「ZUKAN インタビュー」実践による地域人材リゾームの形成
―札幌人図鑑の M-GTA 分析をもとに―

西尾　直樹

目次

第 1 章 序章 1

第 1 節 背景 1

第 1 項 VUCA の時代と課題解決アプローチの限界 1

第 2 項 機械論パラダイムから生命論パラダイムへ 2

第 3 項 生命論とソーシャル・イノベーション 4

第 2 節 研究課題 7

第 1 項 研究目的 7

第 2 項 研究方法 8

第 3 節 本論の構成 9

第 2 章 地域人材リゾーム 11

第 1 節 概要 11

第 2 節 理論 13

第 1 項　はじめに 13

第 2 項　自己組織性の定義 14

第 3 項　シナジェティックな自己組織性 17

第 4 項　意味作用による秩序形成 20

第 5 項　ネットワークからリゾームへ 22

第 6 項　支援型の社会へ 23

第 7 項　批判的視点と本論のアプローチ 24

第 3 節 手法・実践 26

第 1 項 オープンスペース・テクノロジー（OST） 26

第 8 項　京都市未来まちづくり 100 人委員会 28

第 4 節 歴史・文化 35

第 5 節 地域人材リゾームの提唱 37

第 1 項 定義 37

第 2 項 形成へのプロセスモデル 38

第 6 節 類似する概念との相違と関係性 43

第 1 項 ソーシャル・キャピタル 43
第 2 項 生態系 46
第 7 節 ファーストステップとしてのインタビュー 48
第 3 章 ZUKAN インタビュー 51
第 1 節 ZUKAN インタビューとは 51
第 1 項 概要 51
第 2 項 背景 52
第 3 項 フォーマット開発プロセス 53
第 4 項 研究者図鑑からの気づき 58
第 5 項 ZUKAN インタビューの体系化 60
第 2 節 ZUKAN インタビューの詳細 63
第 1 項 手順 63
第 2 項 目的 67
第 3 項 設計思想 70
第 3 節 図鑑インタビューの展開 86
第 1 項 インタビュアーの育成 86
第 2 項 地域展開 87
第 3 項 暖簾分けとしての札幌人図鑑 89
第 4 章 札幌人図鑑の研究 93
第 1 節 研究内容 93
第 1 項 研究目的 93
第 2 項 調査協力者 93
第 3 項 分析手法 95
第 4 項 分析プロセス 97
第 2 節 分析結果 98
第 1 項 結果図 98
第 2 項 ストーリーライン 100
第 3 節 各要素の詳細と考察 101
第 1 項 ［ミクロレベル：創造的個の可視化と強化］ 101

第２項 ［メゾレベル：地域人材データベースとしての図鑑の形成と活用］ 124
第３項 ［マクロレベル：場から地域人材リゾーム形成につながる要素］ 137
第５章 総合考察 148
第１節 はじめに 148
第２節 地域人材リゾーム形成への第一歩としての効果 149
第１項 創造的個の発掘：地域内の知られざる人材を舞台に上げる効果 150
第２項 創造的個の強化：フォーカスされることや、コンテンツの効果 152
第３項 図鑑の構築：取り組みの積み重ねや、情報の集積による効果 153
第３節 地域に根差すまでの発展に必要な要素 154
第１項 長期の継続と高頻度での更新 155
第２項 インタビュアーの自分ごととの接続 155
第３項 資金の獲得 156
第４節 リゾームに至る兆しの要素 157
第１項 ネットワーク化 157
第２項 支援の仕組み 158
第６章 終章 159
第１節 はじめに 159
第２節 今後の課題と展望 161
第１項 理論面 161
第２項 実践面 162
第３項 機能面 162
第３節 終論 163
第１項 誰もが「自分ごと」で行動する地域へ 163
第２項 ロールモデルとしての「凡人」 164
第３項 「日常生活」の支援を通じた活私開公 165
第４項 凡人集めて非凡を成す ZUKAN インタビュー 166
参考文献 1

第１章　　序章

第１節　　背景

第１項　　VUCA の時代と課題解決アプローチの限界

人類は有史以来、時代ごとにさまざまな社会問題を抱えては、現在にも名を遺すような偉人、賢人たちが課題に向き合い、解決策を導き出し、世の中を変革させてきた。人類の歴史と文明は、その積み重ねであると言っても過言ではないだろう。

しかし、20 世紀の後半から世界は①変化のスピードの加速、②複雑性の増大、③多様性の高まり（高間　2008：33-42）が進み、21 世紀に入ると「VUCA（Volatility：変動性、Uncertainty：不確実性、Complexity：複雑性、Ambiguity：曖昧性）」の時代[1]といわれるようになる。社会問題も同様に、環境問題をはじめ VUCA の特徴を非常に高いレベルで持つものが増えてきており、これまでの一部のステークホルダーや専門家による課題解決型アプローチの限界が顕在化してきている。

複雑性の低い社会においては、個別の課題に対して専門家が過去の経験を元に、処方を考えて対処をしていくことで解決ができた。しかし、現代社会において従来の方法で「問題」とその「解決」、そして、その解決ための「方法」を単純な関係性として捉えてしまっていると、別の悪影響が生じてしまう可能性がある。社会の複雑性を視野に入れておかないと、よかれと思っての取り組みが別の問題を引き起こす引き金にもなりかねないのである。

また、世界は密接に絡みあい、どこかの国で何かが起きると連鎖的に自分の国でも影響を受ける（バタフライ効果）など、あらゆる局面でカオス状況にある現代社会において、未来を予測していくことが非常に困難となっている。その未来は、今までの延長線としての変化ではなく、ほとんどすべてが無くなってわずかなものだけが残され、まったく新しいものが生まれる劇的な変革の未来でもある。例えば「スマートフォン」などは、初めて登場してから、ほんの 10 年ほどで電話端末の主流となり、当たり前のように誰もが手にするものとなった。その半面、過去に主流だった固定電話やガラケーのような端末は数が

[1] もともと 1990 年代後半に米国で提唱された軍事用語。2010 年代からビジネス世界にあてはめられ、2016 年には世界経済フォーラム（ダボス会議）で使用されるなど、さまざまな文脈で注目されるキーワードとなっている。

激減し、ほとんど目にすることがないものとなった。

さらに、近年 SDGs[2]が世界的なムーブメントとなっており、持続可能な未来に向けて、今や身の回りの地域や暮らしに関しても、地球規模かつ俯瞰的・長期的な視野で語られる時代となっている。世界を一つ一つ分解して捉えて制御するアプローチから、世界の複雑性全体を捉えて変容していくアプローチへ、根本的なパラダイムの転換が起きつつあるのである。私たちは社会問題や未来のまちづくりに対して働きかけていく際、この新しいパラダイムに対する視点を持ってアプローチしていくことが必要である。

「新しい」といったが、このような視点は最近になって突然現れたものではない。幅広い学問分野の研究者が議論し、世界各地の社会活動家が実践を行ってきた知見がベースとなり、前述のような時代の行き詰まりの中で具体化、体系化され、大きな流れとなってきたものである。分野やセクターによって、表現される概念や手法も多様に存在しているが、根底にある学術的背景をもとに大きくまとめると、デカルト的科学観をベースとした「機械論パラダイム」から、複雑系科学観をベースとした「生命論パラダイム」への移行（日本総合研究所　1998）である。この言葉は、散逸構造理論を発表し 1977 年にノーベル化学賞を受賞した Ilya Prigogine の考えを中心に、システム理論や複雑系理論の知見を整理し、世界への新しいアプローチとして田坂広志らが概念化したものである[3]。

第２項　　機械論パラダイムから生命論パラダイムへ

従来の課題解決のアプローチは、しばしば機械に例えられる。17 世紀に Newton、Descartes 等によって近代科学が確立されて以降、多くの知識人や研究者が分析的手法によって「世界」を解釈し、その理論に基づいて社会が構成されてきた。このような近代合理主義科学に則り、「機械的世界観」「要素還元主義」を車の両輪とした知のパラダイムを「機械論パラダイム」という。機械的世界観とは「世界は、いかに複雑に見えようとも、結局は、一つの巨大な機械である」という発想に基づく世界の見方である。要素還元主義とは、何かを認識するためには、その対象を要素に分割・還元し、一つ一つの要素を詳し

---

[2] 持続可能な開発目標。2015 年 9 月の国連サミットで全会一致で採択。「誰一人取り残さない」持続可能で多様性と包摂性のある社会の実現のため、2030 年を年限とする 17 の国際目標と、その下に 169 のターゲット、232 の指標が決められている。

[3] 同様の枠組みは、システム理論家を中心にさまざまに定義されてきた。例えば Acoff は、機械の時代とシステムの時代に分け、機械の時代の哲学は、還元主義・分析的思考・機械論から構成され、システムの時代の哲学は、拡張主義・構成的思考・目的論から構成されるとした。後述する今田による反制御のパラダイムも、同様の理論的背景を持つ。

く調べたのち、これらを統合すれば良い」という考え方である（日本総合研究所 1998：35）。この考えでは、要素間の関係は基本的にリニアな関係であり、これらの結果を再び集め足しあげていけば、もとの全体になる。機械論パラダイムは、18 世紀の産業革命以降、特に 20 世紀の大量生産・大量消費の工業化社会、成長と拡大が前提の資本主義の世界においては、トップダウン式の管理型組織運営の下で効率性、収益性、競争力の向上につながり、国や組織の発展に寄与してきた。現代社会においても依然として支配的影響力を持っている。しかし、前述のとおり、分析的手法では複雑化した社会を捉え、本質的な改善を実現することはできない。

対する「生命論パラダイム」は、生命的世界観と全包括主義を両輪とする知のパラダイムである。生命的世界観とは、世界を「大いなる生命体」として見る世界観である（日本総合研究所 1998：40-41）。例えば、社会システムを一つの生き物とみなし、エントロピー収支を論ずるエントロピー経済学など、具体的な学問の理論の中にも組み込まれている（田坂 1997：185）。さらに田坂は、仏教思想の「山川草木国土悉皆仏性」という言葉も、世界のすべてが「生命」を持つという思想にも通じているとしている（田坂 1997：187）。「全包括主義」は、対象を細かな要素に還元することなく、「全体性」において理解しようという考え方である。要素還元では、「対象を分割するたびになにか見失われる」という問題点がある。ありのままの全体を全体のまま認識するのが全包括主義である。

田坂らが生命論の概念を本格的に世の中に提唱したのは 1992 年のことである。さらに、そのベースとなる世界の複雑性へのアプローチに遡ると、生物が持つ非線形性など要素還元では説明できない現象についての議論から始まった「生気論」、Bertalanffy（1968）が提唱した「一般システム理論」など、100 年近くに渡って研究と議論が重ねられてきた。その間、システム理論や複雑系理論は多くの書籍で紹介され、科学技術の分野では物理学や生物学などの自然科学の理論形成、情報学や工学などの技術開発での応用は一般化している。一方で、組織変革や地域活性など社会の現場での実践は、さまざまに試行錯誤が行われてはきたが、広く定着するには至っていない。しかし、2000 年代から、後述するホールシステム・アプローチや Teal 組織[4]といった具体的手法の認知と試行の輪が広がって

[4] 2014 年に Laloux により提唱された、役職などのヒエラルキーを廃し、組織を一つの生命体として捉えてメンバーの自律的な行動により運営をしていく組織形態。次世代の組織モデルとして注目をされている。

きており、社会や地域コミュニティでの実践レベルで事例が蓄積されてきている。

第３項　　生命論とソーシャル・イノベーション

パラダイムの転換と近い言葉にイノベーション（変革）がある。生命論パラダイムの社会実践の視点で、社会的課題を対象としたイノベーションである、「ソーシャル・イノベーション」との重なりを検討する。この言葉の定義や使われる文脈は非常に幅広いため、まずはその整理から行う必要がある。

定義の比較

小川（2015）はソーシャル・イノベーションについて、谷本（2009）による「社会的課題の解決に取り組むビジネスを通して新しい社会的価値を創出し、社会的成果をもたらす革新」（谷本 2009：31）、露木（2011）による「既存の手法では解決できていなかった社会的課題に対して新規の解決手法を提示し、もって社会の仕組みに変革もしくは一定の影響を与え新たな社会的価値を創出すること」（露木 2011：46）などを参照した上で、「既存の仕組みでは対応が難しい社会的課題を見出し、その解決に向けて社会構造へ働きかけ、新たな仕組みの開発および新たな社会的価値を創出し、社会的成果をもたらすプロセス」（小川 2015：22）と定義づけている。

次に Nicholls & Murdock（2012）はソーシャル・イノベーションを、18 世紀の産業革命から始まる先進国経済全体のマクロレベルのイノベーションの「第 6 の波[5]」とし、それ以前に起こった波と同様に、破壊的で影響力のあるものになる可能性があることを示唆する。しかし、「単に既存のシステムの中での破壊を提供するだけではなく、ソーシャル・イノベーションはしばしばそれ以上のものであり、内部の制度的な論理、規範、伝統への変更を通じて、システム自体を破壊し、再構成しようとする」という。それらを踏まえ、ソーシャル・イノベーションとは、「新しいアイディアと新しい構造の生産であり、公共の利益、正義、公平性の社会的に（再）構築 された規範の中での再文脈化のプロセスでもある」(Nicholls & Murdock 2012: 2）とし、このようなイノベーションは、「コ

[5] 第 5 の波までの流れについては、以下のように紹介されている。

1. 産業革命（1771～1829 年）
2. 蒸気と鉄道の時代（1829-75 年）
3. 鉄鋼・電気・重工時代（1875-1908 年）
4. 石油・自動車・大量生産時代（1908-71 年）
5. 情報通信の時代（1971 年～）

ミュニティの知識と文化的資産を優先させ、社会関係の創造的な再構成を前提とする社会的変化の偶発的な構築を示すものである」(Nicholls & Murdock 2012: 2)としている。

両者とも共通して、「社会構造」への働きかけについて言及されている。ソーシャル・イノベーションはソーシャル・ビジネスとセットで語られることも多く、ともすれば、個別の課題と事業としての継続性にフォーカスがあたりすぎて、要素還元的になってしまう可能性も内包している。これらのような定義に意識的に立ち返ることも必要である。

トランジションデザインでの位置づけ

もう一つ、デザイン学の文脈からのアプローチを紹介する。2015 年、カーネギーメロン大学（CMU）により、「トランジションデザイン」という概念が提唱された。トランジションデザインは「より持続可能な未来に向けて、デザイン主導の社会的移行を提案するデザイン研究・実践・研究の新領域」（Irwin 2015：1）である。それは、政治的、社会的、経済的、文化的、科学的、技術的な学際的プロジェクトであり、「人間関係のあらゆる側面がトランジション（移行）の必要性に直面しており、様々な問題（気候変動、不公平、資源の枯渇、生物多様性の損失など）が臨界点に達するにつれて、移行の必要性の緊急性が高まっている」（Kossoff, Tonkinwise and Irwin 2015：1）という時代背景のもとで考案された。そのためデザイン学の理論ではあるが、非常に幅広い理論や概念を統合した理論体系となっており、その核となる部分に、生命論パラダイムの要素が明確に使用されている。例えば重要な概念として、以下のようなものが挙げられている（Irwin 2015：4）。

生命システム理論：

生命システム理論は、現象を構成要素に分解しようとするのではなく、生物とその環境との間の関係の動的なパターンという観点から現象を探究する。自己組織化、創発、レジリエンス、共生、ホラーキー、相互依存などの原則は、複雑なシステムの中で変化を開始し、それを促進するためのレバレッジポイントとして機能する

世界観：

過渡期を生き抜くためには、世界の中での新しい「存在」の仕方が必要である。環境学者であり物理学者でもある Fritjof Capra は、21 世紀に私たちが直面している無数の問題は相互に関連しており、

「知覚の危機」という一つの根本的な問題に辿り着くことができると主張している。彼は、この認識の危機を、複雑なシステムの本質を理解するには不十分な、機械論的／還元主義的な世界観と定義している。より全体的／生態学的な世界観へのシフトは、持続可能な未来への移行のための最も強力なレバレッジポイントの一つである。

このトランジションデザインの実践プロセス中に、「ソーシャル・イノベーションのためのデザイン（Design for social innovation）」としてソーシャル・イノベーションが言及され、トランジションデザインとの補完関係があると位置づけられている。ここでいうソーシャル・イノベーションのためのデザインとは、「既存のソリューションよりも効果的に社会的ニーズを満たすデザイン」であり、ソーシャル・イノベーションは「デザイナーが学際的なチーム内でファシリテーターや触媒として働く「共同設計」プロセスである。ソリューションは、複数の関係者にメリットをもたらし、コミュニティが公共、民間、商業、非営利の各セクターで活動できるようにする。ソーシャル・イノベーションのためのデザインは、新たなパラダイムや代替的な経済モデルのためのデザインであり、大きなポジティブな社会的変化につながる。」（Irwin 2015：8）と解説されている。つまり、「新しいパラダイムをデザインする」要素が含まれている。

ソーシャル・イノベーションのためのデザインは「生命論パラダイムの社会をデザインする」アプローチであり、トランジションデザインは「生命論パラダイム社会への移行をデザインする」アプローチであると表現することができよう。言いかえると、ソーシャル・イノベーションの実践の蓄積が、生命論パラダイム社会のあるべき姿を浮かび上がらせ、その社会へどのように移行するかを、トランジションデザインによって考案し実践していくのである。

これらを踏まえ、生命論パラダイムへの実践としてのソーシャル・イノベーションの条件を、以下のように整理する。

① 個別の課題解決だけでなく、社会における新しい価値や構造の創造（さらにはその先の持続可能な社会への移行）を視野に入れて、目の前の現実にアプローチをする。

② 具体的な実践を計画する際は、生命論パラダイムに類する理論や概念も、プロジェクトのビジョンやプロセス、仕組みの中に取り入れる。

第２節　　研究課題

第１項　　研究目的

本論では、こうした背景を踏まえ、地域社会の中で生命論パラダイムへ向かうソーシャル・イノベーションのあり方というビッグピクチャーを描き、その実現のための具体的な手法について検討することを目指す。その際のキー概念として、生命論パラダイムの重要な要素である「自己組織化」を取り上げる。地域の人材が自己組織化し自在につながりあい、相互作用の中から創発が生まれ、新たな秩序を形成していく。そこには機械の歯車としての人ではなく、生命体の一部としての人であり、個に分解してまた組み立てても同じものにはならない、創発性をもつ。この自己組織化を、理論、手法、実践、歴史、文化と多面的に整理し、自己組織性に関連する比喩的概念を用い、地域における人材の自己組織化のモデルとして「地域人材リゾーム[6]」を考察する。

その上で、地域での第一歩の取り組みとして、「ZUKAN インタビュー」を取り上げる。ZUKAN インタビューとは、筆者が NEDO フェローシップ時代に業務として、研究者へのインタビュー企画「研究者図鑑（Researcher Zukan）」（※第 3 章 3−2.参照）として取り組み始め、現在まで研究者に限らず 700 人以上の「人」を引き出し、紹介してきた手法である。インタビュイーの現在・過去・未来を表す 3 つのキーフレーズを記入されたボードを手に、そのフレーズを使って対話型のインタビューを行い、その模様を二人並んだバストショットで映像に収録しインターネットで配信するという決まった型を持っている。

筆者が考案し実践した独自の型が、遠く離れた札幌のラジオパーソナリティー福津京子に伝わり、2012 年に札幌人図鑑という新たなメディアがスタートした。札幌人図鑑には、市長、知事、企業の頭取などの権威ある立場の人々やスポーツ選手、ミュージシャンなどの著名人と、地域のカフェ店主、高校生、主婦などの“普通の”人々が、全くの同レベルで紹介されている。2012 年から 6 年に渡って 1 人でインタビューを実践、出演者は現在 1500 人にまで達し、札幌の人材のデータベースとなっている。また、1001 人目からは、ケーブルテレビの株式会社 J:COM 札幌と提携し、TV 番組としても放送されている。さ

---

[6] リゾームとは、地下茎を意味する。Deleuze と Guattari が共著『千のプラトー』の中で、提唱した概念である。竹の地下茎のように個々がお互いに錯綜しつつくんずほぐれつ結びつき合うようなモデルである。詳しくは第 2 章にて述べる。

らには、過去にインタビューを受けて出演した人が、この ZUKAN インタビューのフォーマット（オープニングソング、3 つのキーフレーズなど）を使って新しい図鑑を立ち上げ、インタビュアーとしての活動を始めている。J:COM でも「ご当地人図鑑シリーズ」として、全国の支局で展開をしている。

このように、ZUKAN インタビューは、研究者図鑑から 10 年の時間をかけて広がり、徐々に成果を生み出してきた。中でも事例として札幌人図鑑を研究対象とすることには、以下のような観点からも意義があると考える。

① 地域・社会に点在する知られざる人材にスポットを当てる、新たな可能性を持つメディアとして

② 一人が考案した仕組みがスケールアウトし、地域に根差すところまで到達した取り組みとして

札幌人図鑑のような取り組みが全国に広がることによって、日本中どこに行っても、主体的に行動をしている人の情報が手に入るようになる。そして、それらを見た人が新たな主体となり、主体同士がつながり合い連携が生まれ、リゾームの状態になる。その結果、地域ごとに自己組織による新しいパラダイムの社会が構築されていく。

本論では、誰もが自分が活動する地域にて実践してもらえるよう、その指針やガイドラインにつながる要素やプロセスモデルの提唱を目的とする。

第２項　　研究方法

本論では、札幌人図鑑を事例として、以下の 2 点のリサーチクエスチョンを基に調査分析を行う。

1. 地域人材リゾーム形成への第一歩として、創造的個にアプローチする ZUKAN インタビューの実践にどのような効果があるか？
2. ZUKAN インタビューの設計思想に則った実践が、地域に根差すところまで発展していくために、どのような要素が必要か？

研究は、札幌人図鑑出演者を中心としたヒアリング調査による質的研究の形をとる。収集したデータは、修正版グラウンデッド・セオリー（M-GTA）の手法で分析を行う。それらを通じて、札幌人図鑑の中で行われている行為や起きている事実などを整理し、概念やカテゴリーなどの抽出と、それらのつながりや流れを整理した結果図およびストーリーラインを作成する。そしてその結果と、地域人材リゾームの要件とを照らし合わせ、実践

のための要素とプロセスを明らかにする。

本論が視界に入れているのは、生命論に則したソーシャル・イノベーションとして、生命論の理論や概念を活用した実践を通じて、社会における新しい価値や構造の創造（さらにはその先の持続可能な社会への移行）をめざすための実践手法の提唱である。ZUKAN インタビュー自体は、特定の社会問題に直接的に対応してソーシャル・イノベーションに寄与するものではない。前述のとおり個別対応だけでは解決が難しくなってきている状況において、さまざまな専門性や現場を持つ人々をつなげ、「自己組織性による創発」を生み出し、課題が解決されていくプラットフォームとしてソーシャル・イノベーションに寄与する。かつ、そのプラットフォームは、誰かが中心となってトップダウンでまとめる樹木状のツリー型ではなく、それぞれがゆるくつながりながら自律的に活動し自然発生的なコラボレーションから新たな価値が創発される根茎状のリゾーム型である。そのプラットフォームを全国各地、さまざまな人や組織が構築している状態になることが、最終的に目標とするソーシャル・イノベーションの姿である。

第３節　　本論の構成

第 1 章は本論の背景として、VUCA 時代における機械論パラダイムの限界と生命論パラダイムの可能性について述べ、生命論パラダイムの世界観を実現するためのアプローチの重要性について述べた。その上で、本論のリサーチクエスチョンを設定した。

第 2 章では、生命論パラダイムに関する主要な概念である自己組織化について、理論、手法及び実践事例、歴史・文化の 3 面から整理し、地域において人材が自己組織化し創発が生まれていく状態をあらわす「地域人材リゾーム」を定義する。具体的には、今田（2005）による自己組織性の理論を整理し、大規模対話手法であるオープンスペース・テクノロジーとその実践事例として京都市の市民参加の事業である京都市未来まちづくり 100 人委員会を紹介、京都市の市民性としての町衆の精神をその歴史・文化から紐解く。これらの要素を組み合わせることで、地域人材リゾーム形成プロセスを考案する。そしての実践の最初の一歩、自己組織性の原則に則って創造的個にアプローチする手法として「ZUKAN インタビュー」の可能性に言及する。

第 3 章では、その ZUKAN インタビューについて、まず最初の企画である研究者図鑑／Researcher Zukan の立ち上げから、フォーマット形成のプロセス、実践の中での気づきやブラッシュアップ、その後の経緯について説明する。次に 300 人の実践を通じて構

築された ZUKAN インタビューの各要素について、手順、目的、設計思想の順に詳細に説明する。そして研究者から地域の人材に対象を広げてスケールアウトしていった他の図鑑について紹介する。

第 4 章では、札幌市にて 2012 年より現在も続いている ZUKAN インタビューである札幌人図鑑を対象とし、出演者を中心とした関係者への質的調査と M-GTA を使用した分析を行う。調査では、1 つ目のリサーチクエスチョンへの回答に向けて、図鑑インタビューの実践を通じてどのような効果を生み出しているのか、図鑑インタビュー出演前から出演後にかけての気づきや意識の変容などを中心に、2 つ目のリサーチクエスチョンに向けては、スタート時の様子、取り組んでいる中での出来事、その中で出てきた困難などを中心にヒアリングを行った。そうして得られた質的データを、M-GTA の手法を用いて分析し、札幌人図鑑を通じた地域人材リゾームへのファーストステップのプロセスモデルの作成をめざす。

第 5 章では、各章で整理した要素と 4 章での分析結果を統合した考察を、リサーチクエスチョンと対応する形でまとめ、ZUKAN インタビュー実践のポイントや課題などをまとめる。

そして、第 6 章では、終論として、今後の研究課題と、本論の先にある地域や社会のビジョン、その中での ZUKAN インタビューの役割についてまとめ、本論を締めくくる。

第２章　　地域人材リゾーム

第１節　　概要

この章では、生命論パラダイムに基づく実践の理論的枠組みとして使用する自己組織化について、今田（2005）による理論、手法としての OST（オープンスペース・テクノロジー）と実践事例としての「京都市未来まちづくり 100 人委員会（以下、100 人委員会）」、京都市の歴史・文化的背景として「町衆」を取り上げ、各要素との重なりを考察して地域人材の自己組織性モデルを導き出す。それらを通じて、どの地域でも実践できる人材リゾーム形成の要素とプロセスを提示する。

自己組織化[7]（self-organization）とは、第 1 章で述べた「生命論パラダイム」の中の中心的概念である「複雑系」モデルの一つである。要素還元主義の微細な個々の要素に還元するのに対し、それらを法則性や全体的な動きとして扱おうという観点で捉えるのが「複雑系」である。その複雑系の最も重要な特徴の一つが、系の外部からの直接的な拘束がないのにもかかわらず、系自身がひとりである種の規則性を獲得する自己組織化である。自己組織化とは、少数または多数の要素で構成されたシステムにおいて、空間的、時間的、時空間的な構造または機能が、要素のしばしば意図的にも見えるような自然発生的ふるまいによって形成されること（URL 1）である。言いかえると、無秩序な状態の系の部分間の局所的相互作用から、ある種の全体的秩序が生じる過程といえる。この概念は、自然科学および経済学や人類学のような社会科学の両方において、他の多くの学問分野に利用されている。社会科学の分野においては自発的秩序とも呼ばれる。

自己組織化の例としては、結晶化、レーザー光、流体の熱対流、雲の形成、インターネット、生物の形態形成、神経回路、金融市場、世論の形成と多岐にわたる。今田は社会学に軸足をおきつつ、自己組織性についての自然科学分野でのメカニズムの知見を集約し、社会学の文脈と融合させ、実社会のシステムへの適用を想定した理論を構築している。

今田の自己組織性論は学際的な理論体系として完成しているが、実践レベルで「自己組織性による社会システム」にまでアプローチしている事例はまだまだ多くはない。そこで、

[7] 本論で中心的に使用する今田による理論では「自己組織性」が主に使われている。ここでは現象についての全般的な呼称としては自己組織化を用い、理論的説明や性質についてあらわす際は自己組織性を使用して使い分ける。

次に具体的に自己組織化を組み込んだ手法としてのオープンスペース・テクノロジーと、具体的な地域実践事例としての 100 人委員会を紹介する。

オープンスペース・テクノロジーは、最大で 1000 人程度まで可能な大規模対話手法群であるホールシステム・アプローチの一種であり、参加者の自己組織化を促す非管理型の対話手法である。その実践としての 100 人委員会は、従来型の特定の専門家によって構成される審議会や委員会とは異なり、幅広い分野の市民に委嘱して行われた委員会である。市民自らが京都のまちづくり全体についてテーマを発案し、白紙の段階から議論し、提言するだけでなく、自ら実践、行動する「市民組織」である。毎年 100 名以上の市民が市から委嘱を受け委員として参画。2008 年 10 月にスタートし、メンバーを入れ替えつつ、5 期 7 年に渡り活動を進めた。100 人委員会は、オープンスペース・テクノロジーの実践としてだけでなく、以下のような特徴から、自己組織性論の考察の素材として最適であると考える。

1. 大学、企業、NPO などさまざまなセクターに勤務する人から、学生や主婦に至るまで、地域の縮図のような多様な人々が一同に集まり、1 年間以上かけてゼロからプロジェクトを生み出した。
2. 行政でなく、参加する市民と同じ立場である民間組織が委託を受けて運営を行った。システムの論理で動いている組織である行政の正式な委員会で、ゆらぎ図式を含むプログラムを長期に渡って実践された。

100 人委員会を通じて、その中で生まれたグループから地域を巻き込んだプロジェクトの実現や NPO など継続的な活動につながっただけでなく、委員個人や委員同士の関係性にも影響を与えた。100 人委員会の仕組みは市内の各区に展開され、委員を務めた人がファシリテーターとなって集まった参加者の対話を進めるなど、運営の手を離れ、自在な活動やコラボレーションが行われるようになった。それはまさに後述するリゾームの状態である。では、このモデルをそのまま全国の地域で活用できるかというと、そうとは限らない。100 人委員会をきっかけとした自己組織化とリゾーム形成は、京都市という歴史や文化を中心とした地域の長い年月をかけて形成された文脈の上に成り立った部分もある。その代表的なものとして「町衆」の精神がある。町衆は遡ると 15 世紀末に起源があり、歴史の中で育まれ京都の市民社会を形成してきた主体であり、時代ごとの危機的状況において力を発揮してきた。その精神は、今も京都市民の心に根付く規範となっている。

最後に、これら自己組織性にまつわる理論、手法・実践、歴史・文化の 3 つを統合し

て、「地域人材リゾーム」を定義し、そのプロセスモデルを提示する。100 人委員会のような官民の大きなプロジェクト、さらにはベースとなるような歴史・文化がない地域において地域人材リゾームを形成していくためには、創造的個にフォーカスした「第一歩」の取り組みとその蓄積が重要となる。具体的には、創造的個の発掘、意味作用の強化、それらの集積と主体的行動の文化の醸成である。それらの要素を満たしうる手法として、ZUKAN インタビューを提案する。

第２節　　理論

第１項　はじめに

ここでは本論の理論的枠組みとして使用する、今田による自己組織性の理論の詳細を整理する。まずは自己組織化に関する理論の中で、今田理論をベースとする理由を示しておく。

1. 新しい社会編成原理として提唱しているリゾームと生命論パラダイムの社会像に共通点が多いこと
   - 要素還元や分析的なアプローチでなく、トップダウンやボトムアップの構造でもない
   - 地域社会におきかえると、市民一人ひとりの主体的な行動が集積し、相互に連携しあい創発が生み出される自律的な地域ビジョンにつながる
2. 自己組織化について、自然科学、人文社会科学などの枠を超えた、統合的な理論構築が行われていること
   - 自己組織化のメカニズムに対する理解をベースに、実社会への活用を想定した学術的な記述がなされている
   - 実社会での実践との接続の際には、どちらかに偏ることは理論的正確さ、もしくは社会の現場との乖離につながり、具体的な議論が困難となる。両方があるからこそ、生命論パラダイムのソーシャル・イノベーションの手法につなげられる。

今田はさらに、自己組織性の基盤となる「ゆらぎ」の科学の源流として、科学思想における転換運動として、「デカルトとニュートンに始まる科学観、つまり要素還元主義、主観と客観の二分割、心身二元論などに反省を加え、人間の「生」と調和した新たな科学思想の構築をねらいとする」いわゆるニュー・（エイジ・）サイエンスの登場—を挙げてい

る。ニュー・サイエンスはまさに本論が目指す生命論パラダイムの世界観であるが、神秘的な思想の域に留まってしまうリスクをはらんでいる。その点について今田は、「広い意味でこの流れに位置するプリゴジーヌの『散逸構造』論やハーケンの『シナジェティクス』など、システムの自己組織性に焦点をあてて近代科学の転換をはかろうとする試みは、ゆらぎの思想に科学的根拠を与えている」（今田 2005:27）と述べており、生命論パラダイムの世界観を、学術的な深さを持って記述するのに適していると考えられる。

今田の理論は、次のような流れで展開する。まず自己組織性について、「制御図式」と「ゆらぎ図式」の 2 つの接近法の紹介と比較から、現代社会におけるシナジェネティックな自己組織性の重要性を説き、その 4 つの特性を示している。次に、システム科学から発生したシナジェティックな自己組織性を社会学化するため、意味学派の主張を取り込むことに挑戦をしている。具体的には、構造と機能を中心に組み立てられてきた社会システム論に、ゆらぎと意味作用を埋め込む作業である。そして、シナジェネティックな自己組織性を通じて構築されるシステムについて、代表的なポスト構造主義者である Deleuze と Guattari が提唱した概念「リゾーム（rhizome）」を援用したシステム観を提起している。最後に、リゾームのシステム観による（リゾーミックな）新しい社会編成の在り方として、管理型から支援型の社会システムへの構造転換の必要性を説いている。その社会システムを基礎づける公共哲学として《実践系の公共性》を提唱し、現在のさまざまな社会問題を解決するためにも不可欠であると主張している。

次項では、地域社会において関連する要素について整理し、紹介していく。

第２項　自己組織性の定義

今田は自己組織性について、「システムが環境との相互作用を営みつつ、みずからの手でみずからの構造をつくり変える性質を総称する概念」（今田 2005:1）と定義し、さらに、その本質を「自己が自己の仕組みに依拠して自己を変化させることにある。このとき重要なことは、環境からの影響がなくても、自己を変化させうることである」（今田 2005:1）と述べている。その変化は、「自分のなかに変化の兆しを読み取り、これを契機に新しい構造や秩序を立ち上げてはじめて自己組織的である。つまり、自己組織性とは変革の原因を自己のうちに持つ変化、《内破による変化》をあらわす。この意味で、自己組織性は環境決定的でも環境適応的でもなく、自己決定的ないし自己適応的である」（今

田 2005:1）としている。この定義自体にも地域社会に置き換えられる重要な示唆がある。国や行政による政策や施策、外部のコンサルタントなどの働きかけでなく、地域市民自らの内なる思いや行動から変革していく形ができてはじめて、地域の自己組織性が表れているといえる。

制御図式とゆらぎ図式

今田は自己組織性を「制御図式」と「ゆらぎ図式」の 2 つの接近法に区別している。以下に、それぞれについての記述を整理して紹介する。

1．制御図式

1 つめは、「システムがみずからの構造や機能を《自己制御》によって変える仕組みを扱う接近法」である。「自己制御とは環境ではなく自身を制御すること、自力で自己を望ましい状態に誘導すること」（今田 2005:4）をいう。

制御図式による自己組織性は、「システム要素である「個」に焦点をあてるのではなく、あくまで「個」の集合体としてのシステムを考察の対象とする。このため自己組織性は、システムに備わった機能が構造変化をもたらす営みとして定式化される。この構造変化を導くのが制御、とくに《自己制御》である。そこでは個々の構成要素の営みが構造変化をもたらす視点は相対化され、システムに内蔵された制御機構により構造変化が引き起こされることを焦点とする。」（今田 2005:2）

この制御図式による自己組織性論は、サイバネティクス（cybernetics）に理論的基礎を持つ。「サイバネティクスの語源はギリシア語の操舵術――船が航路を外れないように舵取りすることにある。一般に、A（操舵手）が B（船）を制御するとは、B の出力あるいは状態が、A にとって望ましい状態をもたらす（航路通り進む）ように、A から B に働きかける（舵を取る）こと」をいう。これを理論的に定式化したのがサイバネティクスであり、「こうした制御行為を、環境に対してではなく、自己自身に適用することで、自分で自分を変える自己組織化を定式化することができる。」（今田 2005:4）

2．ゆらぎ図式：

2 つめは、「《ゆらぎの増幅》によってシステムが不安定な非平衡状態（nonequilibrium 不均衡:自然科学では非平衡と訳される）に至ることで、新たな構造生

成がなされる仕組みを扱う接近法である。ゆらぎというと、システムの存在を脅かす逸脱ないし攪乱を思い浮かべる場合が多いが、自己組織化とは《ゆらぎを通じた秩序形成》であるともいわれるように、ゆらぎは必ずしも秩序の破壊要因ではなく創造要因ともなる。」（今田 2005:4）

ゆらぎ図式による自己組織性は、「システムの論理は背景に退き、創造的個の原則がシステムの原則を凌駕する。換言すれば、システムの論理をはみだす「個」の営みが相乗作用することで、既存のシステムがゆらぎ、別様の構造へと導かれることを焦点とする。そこでは、いわば《システムは最後》であり、重要なのは創造的個による《ゆらぎの増幅》である。」（今田 2005:2）

この《ゆらぎ図式》による自己組織性論は、「シナジェティクス（synergetics）にその理論的基礎を持つ。シナジェティクスとは、ギリシア語の syn（協同）と ergon（働き）を合成したもので、協同して働くことすなわち協同現象」を意味する。「シナジェティクスの理論があてはまるシステムは平衡状態から遠く離れた不安定な大規模システムである。そこではゆらぎが多発し、これらが協同的に振る舞う結果、巨視的水準で新たな秩序形成がなされる。」（今田 2005:5）

システムの論理に創造的個の営みを組み込む

２つの接近法を要約すると、「サイバネティクスが《システム》の舵取り（制御）を特徴とするのに対し、シナジェティクスは《要素》の協同現象（シナジー）を特徴とする。システム制御による自己組織化と要素シナジーによる自己組織化」（今田 2005:5）と表現できる。

両者のあいだには、システム対創造的個および制御対ゆらぎという、対極的な視点の相違があるが、どちらが良いというものではない。一方に偏ることには「制御を強調することは管理社会への道を開く。また、ゆらぎの強調は社会をでたらめさに解消し去る」（今田 2005:4）という危険性をはらんでいる。「サイバネティックな制御を基礎とした自己組織性論は、社会計画や社会発展の誘導という政策課題に効果的な方法を提供する。ただし、社会はこうした計画政策論だけでは成り立っていかない。要素の協同による遂行的で自生的な秩序形成論も不可欠である。計画的政策的な秩序形成と自生的遂行的な秩序形成の双方が融合した自己組織性が、そのほんらいのあるべき姿である」（今田 2005:6）。しかし、「現状では後者の視点からの理論化が不十分であるため、両者の本格的な融合は

実現していない」（今田 2005:6）。

では、どうすればいいか。それは「システムの論理に創造的個の営みを組み込む」（今田 2005:4）ことである。社会システムにおいては、「既存の地位保全や役割遂行に汲々とする人間ではなく、地位や役割に囚われない自在な人間像が求められる。また、制御を捨て去るのではなく、ゆらぎ潰しをおこなう管理から脱して、ゆらぎが新たな秩序形成へと至るよう誘導する制御を考えること」（今田 2005:4）によって実現をしていく。その具体的な内容については、第 5 項で詳しく紹介する。

第３項　シナジェティックな自己組織性

「ゆらぎ」について今田は、「ものごとの基盤をぐらつかせ危うくする要因のことを意味し、既存の発想や枠組みには収まりきらない、あるいはそれでは処理できない現象」であり、社会現象においては「こうしたズレを拡張して、既存の枠組みには収まりきらない、あるいは既存の発想では処理できない現象として用いる。つまり、ゆらぎとはシステムの均衡状態からのズレ、その延長として既存の枠組みからのズレである」（今田 2005:19）としている。

しかし、ゆらぎを強調するだけでは、世の中をでたらめなものに委ねる無政府主義に陥ってしまう。ゆらぎを秩序に変換する仕組みが必要となる。これを担うものとして、「ゆらぎを自己強化する触媒作用、より一般的には自己が自己に働きかける自己言及作用」（今田 2005:5）が重要となる。ここでいう自己言及作用とは、以下の 3 つである（今田 2005:18）。

①システムに発生したゆらぎの増幅を通じて新秩序が形成される自己触媒作用

②自己を再生産するために自身を必要とする自己回帰の仕組み

③システムの要素が他の要素を生産するとともに最終的には自己を生産する円環的因果のネットワーク

1970 年代後半、生物学・熱力学・化学の分野において、先述した Haken の「シナジェティクス（協同現象論）」、Prigogine らの「散逸構造の理論」、Maturana and Varela の「オートポイエシス（自己産出論）」など、システムのゆらぎや自己言及性の問題をさまざまな角度から扱う理論が登場した。今田はこれらのアプローチを、サイバネティクスの制御図式に対する《反制御のパラダイム》とし、ゆらぎと自己言及に焦点をあてる自己組織性を《シナジェティックな自己組織性》（今田 2005:19）と定義した。今田

はシナジェティックな自己組織性の 4 つの特性を提示している。

第 1 特性：ゆらぎを秩序の源泉とみなす

シナジェティックな自己組織性論の特徴の 1 つめは、《ゆらぎを秩序の源泉とみなす》ことである。「ゆらぎはシステムを別様の存在や構造へと駆り立てる要因である。世の中からゆらぎを消去しさることは不可能であるだけでなく、これがない社会は活力を欠いた異常な社会でもある」（今田 2005:30）。そして、「ゆらぎを含んだ微視的な要素が、相互に協同しあって 1 つのパターンを生成することの巨視的な反映が、ゆらぎの増幅である」（今田 2005:28）。

ゆらぎの強調は一見するとでたらめさや偶然性を主張することになるように思えるが、以下の 2 点の視点を持つことで、秩序形成へと向かうものとなる（今田 2005:29）。

> 第 1 に、ゆらぎはシステムという巨視的な観点から眺めればでたらめにみえるかもしれないが、微視的な要素水準では合理的で整然とした行動である場合が存在する。つまり、巨視的水準のでたらめさは必ずしも微視的水準のでたらめさを前提としないことである。自己組織性論において扱われるゆらぎは、巨視的なシステムの中枢部から微視的要素へ向かう制御作用とは逆の、微視的要素から巨視的全体に向かってなされる差異化の作用と理解すべきものである。
>
> 第 2 に、ゆらぎをでたらめで偶然のものと必ずしも決めつけられないことである。ゆらぎには、でたらめなものと系統的な歪みを持ったものが存在する。自己言及性と結びつかないゆらぎは、突発的でありでたらめとみなして差し支えないが、自己言及性と結びついたゆらぎは、自己強化によって系統的な歪み（ある方向性）を持ったものとなる。

そして、一見でたらめにみえるゆらぎが系統性を持ち、新たな秩序形成へと向かっていく例として流行現象をあげ、「最初のうちはでたらめな試行とみえても、これに歪みがかかることで大きな波動となる。どこかの誰かが、あるときポツンと変わったことを試み、それに同期する人があらわれて自己触媒作用ができあがり、流行が現実化する」（今田 2005:29-30）と述べている。まさにこの現象をあらわしているのが、「広める価値のあるアイデア」をスローガンに世界の知識人のプレゼンテーションを動画配信している TED において、Derek Sivers が『How to start a movement』と題して話したスピーチ（URL 2）である。このスピーチでは、最初にある映像を流す。それは、公園で男がた

った一人で裸踊りをはじめるところから始まり、徐々に輪が広がって、やがて公園全体にまで広がっていくという内容である。Sivers は、この映像を使って社会的なムーブメントが形成される方法を説明している。最初に周囲から嘲笑されながらも新しいことを始めるリーダーがいて、リーダーに共感した追随する最初のフォロワーが登場する。そのフォロワーを真似て第 2、第 3 のフォロワーが加わってグループとなる。そうなると勢いがついて臨界点に達し、次々とフォロワーが集まってくるムーブメントとなる。ここで強調されているのは、「最初のフォロワー」の重要性である。この「最初のフォロワー」はまさに最初はでたらめだった試行に自己触媒作用を起こし、新しい秩序への系統的な歪みを生み出す存在なのである。

第 2 特性：創造的個の営みを優先する

2 つめの特徴は、《創造的個の営みを優先する》ことである。自己組織化が進行しているときは「巨視的なシステム特性は重要な働きを持たない、創造的個の原則がシステムの原則を凌駕する」のである。そして「ゆらぎは大数の法則（あることがらを繰り返し行うと、一定の事象が起こる確率は、回数の増大にともなって一定の値に近づく、という確率論の法則の 1 つ）に従った巨視的な全体に対する、要素行動の挑戦と位置づけられる。この命題は自己組織性論にとって決定的に重要」であるという。そして「ゆらぎの科学としての自己組織性論は、全体の原則にではなく、《個の原則》に積極的意義を与えること」だとしている（今田 2005:30-31）。

これを社会システムに置きかえると、社会や組織といった巨視的な側面よりも個人という微視的な側面に焦点をあて、「個々人の行為が協同しあって新たな意味づくりをおこない、そこから新秩序が立ち上がる点を強調すること」であり、「一言でいえば、《システムは最後》ということ」である（今田 2005:31）。

地域においても「移住促進で人口を増やす」「企業を誘致して新しい産業を創出」といった視点から、「地域に住む一人ひとりの行動の喚起」「移住者と地元民の関係づくり」といった視点でスタートをすることと考えられる。

第 3 特性：混沌を排除しない

3 つ目の特徴は、混沌を排除するのではなく積極的に受け入れるというものである。「シナジェティックな自己組織性論の意義は、不均衡状態ないし混沌が決定的に重要であ

り、これらなくして新たな秩序へ向かう力が生まれないと主張することにある。」（今田 2005:32）

ここでいう混沌は、「日常的には、もやもやとして物事の区別がはっきりしないことを意味する。物事がすっきり《分かれていない》ということは、《分からない》こと、つまり何がなんだかよく理解できないことである。カオス（混沌）は、学術的には、かりに現状が正しく認識できたとしても、その先どうなるかが予測不可能な状態のこと」（今田 2005:32）である。

そして「カオスは異質なもの同士の不規則な相互作用からもたらされる。社会もまた、ちょっとした出来事が不規則に相互作用しあうことで、新たなパターン形成へと導かれることが多い。この意味で、カオスには秩序を創造する力が含まれる」という。

この特性は、社会の大きな転換期において「混沌に秩序の兆しを読み取ること」（今田 2005:33）の重要性を示している。逆に言えば、混沌を排除することは、いざというときの脆弱性にもつながるといえる。今や、自然災害や金融危機、新型ウィルスの流行など、人々の営みに多大な影響を与える事態は、いつどのような時に来るかわからない。混沌を前提として備えておくことは、地域や社会の持続可能性にまで関わる重要な心構えともなりつつある。

第 4 特性：制御中枢を認めない

ゆらぎ図式の自己組織性においては、「制御中枢ないしその類似概念、つまり権威当局やシステムの全体性を拒否する。これは「個」の全体に対する従属を転倒させる視点であり、制御中枢を欠いた部分の協同現象としての秩序生成を強調すること」（今田 2005:33）であるという。

制御中枢を完全に廃すことは、現実的には難しい。プロジェクトは時間的、空間的制約があったり具体的成果を求められたりという状況がほとんどである。部分の共同現象としての秩序形成に委ねた実践には、それなりの手法の習得や周到な準備、メンバーの関係性などが重要である。その要素については、以降に述べていく内容の中でヒントを見出していきたい。

第４項　意味作用による秩序形成

今田は制御図式にしてもゆらぎ図式にしても、自己組織性論では自己言及の問題が要と

なるとし、さらには「自己言及を論理（logic）としてではなく作用（operation）として、とくに社会科学でそれを扱う場合は、自省作用（selfreflexion）の問題として位置づけるのが適切」であり、《自省作用》とは「みずからの行為や作用を自己に回帰させること」である」（今田 2005:35）という。その上でシナジェティックな自己組織性が扱うゆらぎについて、「偶然性に支配されたものではない。自己言及の仕組みと結びついた、歪みを持ったゆらぎを対象とする。それは偶然か必然かの二分法で分類できない対象」であり、自己組織性の世界について「偶然であることのなかに必然が入り込み、必然であることが偶然であるようなリアリティからなる世界」（今田 2005:38）であると述べている。

そのような世界において、制御図式が含意する設計思想に求められることは「ゆらぎのなかに新たな価値や欲求のベクトルを読み取って秩序パラメータを識別し、構成員のシナジーを促進すること」であり、ゆらぎ図式に含意される無政府思想に求められるべきことは「差異化に戯れるのではなく、社会システムの構造や機能を脱構築に導くような問い直し」（今田 2005:38）を通じて、自省作用によって新たな秩序形成に至るシナジーを喚起することであるという。

そして、「制御図式であれゆらぎ図式であれ、自省作用によってみずからの構造を問い直し、新たな秩序形成をめざす営みが繰り広げられる空間」（今田 2005:39）こそが、自己組織性が目指す地平であるとビジョンを示している。

以上のようなことを一言で表すならば、自省的になるとは「意味の水準で内的視点を確保し、自己を問い直すこと」（今田 2005:36）である。今田はシナジェティックな自己組織性を社会学化するには、意味学派の[8]主張を取り込む必要があるといい、その際に要となる作業は、「構造と機能を中心に組み立てられてきた社会システム論に、ゆらぎと意味作用を埋め込むこと」（今田 2005：117）と述べている。意味学派は「巨視的なシステムの論理に埋没する行為者像を否定して、現実社会を微視的な個々人から構成する接近法を唱えた。それは個々の行為者がシナジーしあうなかから制度や規範が生成されることを焦点とする」（今田 2005：117）というように、自己組織性の理論と親和性が高い。

意味作用の視点は、理論の実社会への適応の視点からも重要であると考えられる。自己組織性はともすると構成する人に対し記号的な扱いになり「人間らしさ」とも言えるような意思や感情がスポイルされてしまいがちになる。個々人の持つ経験や思考、他者とのコ

[8] シンボリック相互作用論、エスノメソドロジー、現象学的社会学など。社会学においてシステム科学分野と同時期に生まれた、機能主義や批判社会学に対する学術的な潮流。

ミュニケーションを通じた気づきや発想など、意味作用が積み重なってゆらぎとなり、その地域やコミュニティならではな文脈が新たな秩序として形成されていくのである。

第５項　ネットワークからリゾームへ

リゾーム

これまで整理してきた要素を踏まえ、今田はシナジェネティックな自己組織性を通じて構築されるシステムについて、フランスのポスト構造主義の哲学者 Deleuze と精神分析学者 Guattari が提唱した概念「リゾーム（rhizome）」の重要性を説き、自己組織性の基礎としてリゾーミックなシステム観を提起している（今田 2005:204）。リゾームは地下茎を意味する。Deleuze と Guattari による共著『千のプラトー』の中で、西欧文化の知を形作ってきた伝統的な認識方式である「ツリー（樹木）」構造に相対するメタファーとして提唱した概念である。樹木のように「幹」という中心から周縁に向かって系統だって枝分かれし、その末端に葉＝個が位置づけられるのではなく、竹の地下茎のように個々がお互いに錯綜しつつくんずほぐれつ結びつき合うようなモデルである。

この概念はインターネットの「ハイパーテキスト」、さらには「SNS」の登場と発展を例にするとわかりやすい。インターネット初期に構築されていたパソコン通信は、ホストコンピュータという「幹」にクライアントとなるコンピュータが「枝葉」としてぶら下がるものであった。管理者が存在し、トラブルがあればホストコンピュータを止めればすべてが止まる。インターネットは、あるコンピュータが隣り合ったコンピュータに結び、そのコンピュータがまた別のコンピュータと結ぶ。これが繰り返されることで形成された巨大な通信網となっている。管理者はおらず、特定の誰かがこれを完全に止めることはでない。SNS もまた、個と個が直接結びつき、その個も別の個と結びつく、その連鎖によって形成された巨大なネットワークとなっている。従来からある掲示板サービスのように、管理者が制御できるものではない。

ネットワーク論の限界

自己組織性におけるリゾームは、まずネットワーク社会論を批判的に検討するところからはじまる。ネットワークについて「現状では、《効率化と選択性の強化》を推進する手段であり、機能合理化という近代のプロジェクトを完成に導こうとするものである。この点を無視して、自由で平等な個人の結びつきを可能にするものだと礼賛しすぎると、テク

ノクラートの発想に加担することになる。メディア通信、情報ハイウェイ、オンラインシステムなど、いわゆる情報とコミュニケーションの効率化・高速化がますます進む。」（今田 2005:206）とし、ネットワークの手放しの賛美は機能合理化の推進に加担することになる。ネットワークから機能合理化に囚われない側面を抽出する必要があると警鐘をならす。そのためには、「現状のネットワーク論を脱構築する必要がある。その手続きとして、私はネットワーク論に含まれるリゾームの性質を自己組織性論の視点から定式化すべき」（今田 2005:208）であるという。

そして、既存のネットワークを変えていく原理が、ネットワーク論に含まれているのかということに疑問を投げかけ、「自分で自分を変え、常に流動してみずから変態していく自己組織化の視点を、ネットワーキング論は自覚的に持っていないと考えられる」（今田 2005:208）。そして、「ネットワークが常に異質なものを取り込み、関係を変えていくには、違いを創造することへの参加によって、新たな差異を付加する運動が要求される。この性質はネットワークというよりはリゾームと呼ぶべきものである」（今田 2005:208）という。

リゾームについては、Deleuze と Guattari による記述を引用した上で、「リゾームとは樹木と根といった秩序観に収まりきらない、変幻自在な運動体である。それは中心もなく、位階序列もなく、主体と客体の区別もなく、秩序とカオスの区別もない多様体である」とし、さらには「理路整然とした秩序や均衡の発想を脱構築した運動体がリゾームであり、ゆらぎを取り込んだ反制御のシステムである」（今田 2005:212）とまとめ、ゆらぎ図式と接続している。

第６項　支援型の社会へ

管理から支援へ

今田は社会においてリゾームを築いていく上での「管理」に代わる社会編成のあり方として、「支援」をあげている。そして、「支援型の社会システムへの構造転換をはかることが、現在、さまざまに現象している社会問題を解決するために不可欠」（今田 2005:242）であるという。ここでいう支援とは、「従来の目的合理的行為とは異なり、被支援者の行為の質を維持・改善するとともに、被支援者のエンパワーメントをはかることで、自身の自己実現を得る行為」である。支援の構成要素としては、以下の 4 つがある（今田 2005:247）。

① 他者への働きかけ

② 他者の意図の理解

③ 行為の質の維持・改善

④ エンパワーメントと相互実現

リゾームの形成には、新しい秩序に導いていく支援者の存在がキーとなる。支援者は、既存の地位保全や役割遂行に汲々とする人間ではなく、地位や役割に囚われない自在な人間である必要がある。地域においては、中間支援組織やコーディネーターの存在は大きいだろう。中間支援組織については、いろいろな捉え方があり、共通の定義というのはないが、内閣府（URL3）によると、その機能、役割としては、主として

① 資源（人、モノ、カネ、情報）の仲介、

② ＮＰＯ間のネットワーク促進、

③ 価値創出（政策提言、調査研究）

といった点があげられており、その上で中間支援組織を「多元的社会における共生と協働という目標に向かって、地域社会とＮＰＯの変化やニーズを把握し、人材、資金、情報などの資源提供者とＮＰＯの仲立ちをしたり、また、広義の意味では各種サービスの需要と供給をコーディネートする組織」と定義している。日本各地に NPO センターやボランティアセンターなどが設置され、地域市民の活動を支援している。また、地域おこし協力隊のような制度も、人材配置型の支援制度といえるだろう。こうした存在は、支援型の社会の実現に向けて、ますます重要になってくると考えられる。この定義に個人のエンパワーメントなど支援の構成要素をかけ合わせることで、一人ひとりの活動が活性化を促し、地域社会を少しずつリゾームの状態へと近づけていくことができる。

第７項　批判的視点と本論のアプローチ

本論では、第 1 項で述べた通り今田による自己組織性論を理論的枠組として使用する。ここまでその主要な概念を列挙してきたが、最後に今田理論に対する批判的意見を整理する。それらを通じて理論的課題を明らかにし、その後の実践的議論への接続をはかる。

赤坂（2007）は、自己組織性システムに対し「ほんとうに制御メカニズムを持たない社会システムの自律、存続が可能かという疑念が払拭できない」と疑問を呈し、さらに「たしかに現代社会にはインターネットの普及による組織のフラット化、多種多様な NGO の生成と活動、さまざまな分野における規制緩和、伝統的社会規範のゆらぎなど、

社会構造の流動化を示す現象が数多く見出される。だが指令中枢の欠如が社会を再び混乱に陥れることはないのか。混乱の反動として過剰な社会統制が復活することはないのか。制御と自律性の相克を調整するメカニズムは未だ論じられていない」（赤坂 2007:10）と指摘している。

佐藤（2006）は、今田の自己組織性理論はミクロ・マクロ・リンクを適切に扱うことができるように見えるとしたうえで、「行為レベルからシステムレベルへの移行過程が不明瞭である。さまざまな価値観や社会イメージを持った行為者の行為がいかにしてシステムレベルに収束するのか、今田は明確に述べていない」（佐藤 2006:3）と指摘する。

寺島（2012）は、ゆらぎの定義について「明瞭性を欠いているように思える。また、ゆらぎの生じるきっかけについても、行為の意図せざる結果であるとしているが、詳細には論じられてはいない」（寺島 2012:95）と批判した上で、「ゆらぎを自身の安定性を求めた行動であると定義しているが、ここではむしろ、自省的行為そのものをゆらぎと考える方が有益ではないかと思われる。自省的行為、すなわち規則に従うことの意味を考え、もとの行為に立ち返ってなぜそうなのかを問い直す行為である。ここではこれまでの規則と違った行為が生まれていると考えることができ、その行為がゆらぎとなって現れたと考える方が、ゆらぎというものが明確になると考えられる」（寺島 2012:95）と持論を述べている。

これらの指摘は、指摘しているポイントに違いはあるが、机上の理論と社会の現実の間にあるギャップへの懸念という共通点を見出すことができる。たしかに今田は、実社会における事例として神戸製鋼ラグビーチームをあげ、「アンチ犠牲的精神」、「システムは最後」、「創造的破壊」、「型破り」、「アドリブ・ラグビー」、「チームをいつも変える」、「監督制の廃止」といった象徴する言葉とシナジェティックな自己組織性の 4 特性との重なりを紹介している（今田 2005:225）。しかし、スポーツのチームのコミュニティとしての多様性や規模はそれほど大きくはない。地域や社会レベルのスケールと複雑性となった際はどうか。3 人の指摘を統合すると、さまざまな価値観や社会イメージを持った行為者が集まることで、どのようにゆらぎが生じ、秩序が形成されていくのか。その際、どの程度までゆらぎにまかせていいのか。その具体的な指針というものの必要性を示しているといえる。

その答えの一つとして「支援」のあり方が考えられる。後述する海士町は、地方自治体による支援を通じた地域社会の自己組織性の事例として、有力なものとなるであろう。ま

た次節では、具体的な手法や京都市での取り組み、歴史と文化を紐解き、実社会から導き出した要素を加えることで、3 者が指摘した課題を補完したい。

第３節　　手法・実践

第１項　　オープンスペース・テクノロジー（OST）

次に、具体的に人々の自己組織化を促す手法の側面から考察していく。自己組織化を背景理論の一部に持つ手法はいくつか存在しているが、本論ではその中でも「オープンスペース・テクノロジー（以下、OST）」を紹介する。OST は大規模対話手法であるホールシステム・アプローチ[9]の一種である。1985 年に Harrison Owen によって提唱された。5 人から 2000 人規模の大人数まで一堂に会して行うことができる。参加者が課題を提案してミーティングを行う仲間を募ってグループを作って話し合いを進めていくため、全体が大規模でも、少人数で密なコミュニケーションを行うことができる。

原則、法則

参加者の当事者意識や自発性を喚起するための原則、法則があり、主体的な発案、対話を促す。以下に Owen（1997＝2007）より、特徴となる設計思想や概念を抜粋する。

＜サークルからスタートする＞

全員が一堂に集い、サークルを形成する。サークルは、オープンな人間関係の基本である。多様なステークホルダーが円を描いて互いの顔が見える状態であり、発言権の順位、地位や権威などの力関係などをなくし、フラットな関係にする。

＜情熱と責任を持つテーマの提案＞

一人ひとりが関心をもつすべての課題が取り上げられる。ただし提案される課題には、提案者本人の「情熱」と「責任」、そのベースとしての「ボランティア精神」が必要となる。

---

[9] あらゆるステークホルダーが一同に介して大規模（数人から 1000 人以上まで）で行われる対話の手法（高間 2008：80）。1980 年代からグループ・ダイナミックや参加型アプローチなどの研究成果を踏まえて開発され、代表的な手法としては、アプリシエイティブ・インクワイアリー(AI) 、フューチャーサーチ 、ワールドカフェ、オープンスペース・テクノロジー(OST)などがある。

＜４つの原理＞

1. ここにやってきた人は誰でも適任者である

2. 何が起ころうと、起こるべきことが起こる

3. それがいつ始まろうと、始まった時が適切な時である

4. それが終わった時が、本当に終わりなのである

＜主体的移動性の法則＞

参加者は、どの課題に参加することも自由であり、選択した課題に自分自身が貢献できないと感じたときには、自由に移動することができる。そのような人々にも、「チョウ」と「ハチ」の役割がある。

チョウ：休憩所で羽を休めている人。その場に留まることで、訪れた多くの人と交流することができる。そこでの立ち話から新たなグループが形成されることもある。

ハチ：次から次へと異なるグループを渡り歩く人。花粉を花から花へ運ぶように、他のグループの情報を提供してまわる役割がある。

＜えっ？という感覚を大切にする＞

イノベーションこそが重要。それゆえに驚きがこの取り組みの真髄。

＜議事録・アクションプランを作成する＞

参加者の主体性や関係性が高まった場で行われた議論を収束させ、議事録などのアウトプットや具体的な行動・プロジェクトへと接続を行う。

プロセス

OST は固定されたプロセスがあるわけではない。また 1 日から、長いときは数日にわたって開催されることもある。以下は一般的なプロセスの例である。

1. 招待状
   - 招待状には、重要な目的や問い、招待者のリスト、会う場所と時間、メッセージなどが記されている。事前に参加者のマインドセットを整えておく役割もある
2. オープニング

- 参加者は椅子の輪になって座る。
- ファシリテーターは、簡潔で力強い冒頭の声明を発表する。参加者の集中力を高め、オープンな空間をつくり、プロセスを説明する。

3. アジェンダ
   - 参加者は、自分の情熱と責任を持てるトピックが浮かんだら、輪の中心に行って紙に記入し全員に向かって発表する
   - 発表した紙はアジェンダとして時間と場所を選択して張り出す。
4. マーケットプレイス
   - これ以上出ないというところまでアジェンダが出たら、参加者は張り出されたアジェンダを見て、どの議論に参加したいかを話し合い、トピックの横に名前を書く。
5. ディスカッション
   - アジェンダごとのグループに分かれてディスカッションを行う。各会話の終わりには、参加者の一人がディスカッションの結果をコンピュータに入力する。すべての議論と全体会の閉会セッションの最後に、参加者全員に報告書のコピーを提供して終了する。
6. クロージング
   - 資料の整理、優先順位付け、アクションプランの作成を行う

次に、実際にこの OST を地域の委員会で使用した実践事例を紹介する。

第８項　京都市未来まちづくり 100 人委員会

この手法を活用した 100 人委員会は、門川大作京都市長 1 期目のマニフェスト施策として、2008 年 9 月に設立された。京都のまちづくり全体に関するテーマを市民自らの発想により、大局的な観点から設定した上で、今後のまちづくりの方向性や具体的な取組方策について議論する「市民組織」である。毎年 100 名以上の市民が市から委嘱を受け委員として参画。従来型の特定の専門家によって構成される審議会や委員会とは異なり、幅広い分野の市民の参加を得て従来の行政の縦割りを排すことも意図していた。メンバーを入れ替えつつ、5 期 7 年に渡り活動を進めた。

本論では、主に第 1 期（平成 20 年 9 月～平成 21 年 9 月）から第 3 期（平成 22 年 11

月～平成 23 年 12 月）にかけてのプロセスを紹介する。3 期終了によって一定の活動の区切りとなり、その後は運営団体が変わり、より多くの市民に認知と参加の機会を提供するという観点での取り組みとなった。地域における新しいシステムの構築という観点では、3 期までのプロセスが適していると考えられるからである。

特徴

京都市側の担当課長（当時）であった北川（2013）によると、100 人委員会の特徴は以下の 3 点に集約できる。

1. 京都市行政からの諮問や課題提案に基づき調査や議論をするのではなく、市民自らの課題意識に立脚したテーマ設定と、それに基づく活動を行うという点である。会議の場は京都市が提供するが、何について委員会として取り組むかを決めるのはすべて市民自身である。
2. 調査や議論、行政などへの提言にとどまらず、委員自らがテーマ別のチームを編成し、課題解決に向けて具体的に行動していくという点である。課題解決に向けての市民側からのアプローチとして、チーム自らが事業を企画・実行するケース、行政や他の事業者と話し合いを重ね、連携して事業を実施するケースの両方がある。
3. 委員会運営についてはプロポーザルで選定された NPO に基本的に委ね、京都市はバックアップに徹するという点である。京都市は会議の会場や活動費用の確保、広報、情報提供等はもちろん負担するが、運営の根幹部分には受託 NPO の個性、持ち味が十二分に発揮されるよう極力介入しない「市民による運営」を目指しており、委員選定についても、市民公募及び受託 NPO の推薦により行っている。

プロセスとプログラム

委員は、運営団体の推薦による 118 人に加え市民公募 30 人の計 148 人でスタート。その際、分野、所属、世代、性別など、できるだけ多様になるよう調整を行った。委員の任期は 1 年だが、希望者は 2 期目以降も継続した。継続しなかった委員の人数分、公募で新規委員を募った。

毎月一回、第 4 土曜日に開催される定例会が一番のメインの活動である。また、マルチステークホルダーによる大規模対話プログラムの目玉として、大規模対話手法「ホールシステム・アプローチ」の一つであり、国内のまちづくりでの本格的な導入は初となる

「オープンスペース・テクノロジー」を導入した。年度の初めの 2、3 回は OST を中心としたホールシステムでのプログラムを行い、グループを形成する。その後は主にグループ単位で話し合いを行うが、時々ワールドカフェなどを用いての全体のコミュニケーションの機会やゲストを招いての勉強会など、グループを超えた交流とマンネリを防ぐための工夫を取り入れた。

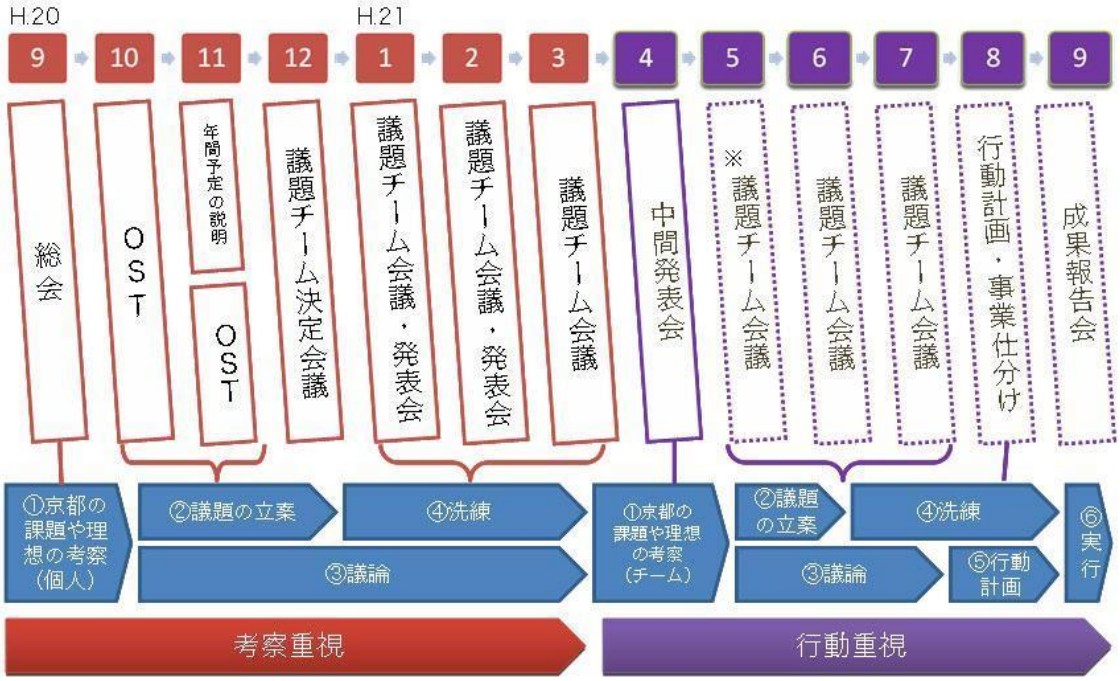

図 1：第 1 期の年間の流れ（100 人委員会定例会議配布資料より）

成果

第 1 期から第 3 期までの 100 人委員会は、委員自らの発意に基づくまちづくりの課題抽出とそれを市民自らのプロジェクトとして実践していくための場としてきた。3 年間運営をした結果として、以下のような成果が生まれた。

- 京都市のまちづくりに関するマルチステークホルダーが、分野、セクター、世代を超え、毎月一堂に集まり、対話を重ねた。
- 委員の一人ひとりが、「自分ごと」となるテーマに、主体的に行動し、自己組織的に 13 グループを形成。また、その後、テーマチーム以外にも、自発的に 100 人委員会全体の運営や活性化に関わるチームも形成された。
- メンバーの相互作用での創発により、新しいプロジェクトが生み出された。13 あ

ったプロジェクトチームのいくつかは、委員任期終了後も活動を継続（うち 2 チームは NPO 法人の認証取得）している

- 年間を通じて対話や交流、協働を重ねることで、委員同士だけでなく、運営スタッフ、行政担当者も含め、相互の信頼関係、互いに助け合う規範、委員終了後も続くネットワークとなり、大きなソーシャル・キャピタル[10]が形成された。それらを生かし、新たなまちづくりの取組を展開している委員もいる。

課題

2008 年当時、まだ他のものも含め大規模対話手法は一部にしか知られておらず、地域社会の中に浸透していなかった。前例もない中、手探りでの取り組みでもあったので、いくつかの課題も残った。

- 行政の事業であるため、最低限の確実な成果が求められるため、100%ゆらぎに委ねることはできず、制御的に運営の仕組みや成果物をまとめあげるテンプレートなどは必要であった。
- 仕事などの都合や、趣旨への理解と共感に至らず、毎回の出席率は委員全体の 8 割程度に留まった。
- 全チームが創発的と言えるプログラムに至ったわけではなく、提案の独自性、実現可能性などの達成度にはばらつきがあった。
- OST でのグループ化の後はグループごとの活動がメインとなり、「創造的個」である委員一人ひとりにフォーカスをする、意味作用と自省システムにあたるプロセスの導入は行っていない。

総じて、ゆらぎをベースとする自己組織化のプログラムは、関係する人の理解を得るところからスタートする必要があり、運営側による制御的要素は必要であった。

自己組織化要素

まず、オープンスペーステクノロジー（OST）を使った 100 人が一堂に会してアジェンダを形成し、マーケットプレイスでセッションを行うという流れはまさに、自己組織化

---

[10] ここでは Putnam による、「調整された諸活動を活発にすることによって社会の効率性を改善できる、信頼、規範、ネットワークといった社会組織の特徴」（Putnam 1993＝2001：206-07）という最も広く知られた定義をベースに扱う。ソーシャル・キャピタルの詳細については、第 6 節にて自己組織性理論との関わりの観点から考察する。

によるチームの形成である。グループ内の多様性と主体性をベースとした対話の蓄積は委員同士の相互作用となり、創発が生まれていった。そしてその毎月のコミュニケーションの蓄積が委員同士のネットワーク、信頼関係、お互いを助け合う規範の形成につながり、ソーシャル・キャピタルが形成されていった。また、そのソーシャル・キャピタルはグループ内や委員の中だけで閉じるのではなく積極的に行政職員や地域のそのテーマに関する分野の市民及び企業にも開かれ橋渡し型や正の外部性を持つソーシャル・キャピタルでもあった。この自己組織化とソーシャル・キャピタルの形成は順番にあるというのではなく、同時進行で互いに影響し合いながら発展していった。

また、運営面に置いても、プログラム設計や場のデザインには常に創意工夫を行った。以下にいくつかの例を示す。

- 行政や運営は、あくまで「場」とプログラムの設計を行う役割に徹し、シナジーを促進する支援者という立場にいた。
- 主体的行動による自己組織性へとつなげるため、「行動する委員会」というコンセプトの浸透に創意工夫と時間をかけた。具体的には、各班から１、2 名、ある程度コンセプトへの理解度の高さが見込まれる委員に「幹事」という役割についてもらい、毎月の定例会議の間に、「幹事会」を開催し、プログラムへの意見や意思決定、当日のプログラムの趣旨の新党への協力をお願いした。
- 幹事の協力で 1 年後には、委員全体にマインドセットが浸透した。また、幹事会自体が、委員が自ら運営に関わっていくという意識や、自己組織性およびソーシャル・キャピタルの形成を強化する効果にもつながった。

こうした工夫は、今田理論の批判的指摘における、ゆらぎ図式と制御図式の融合ともいえる。前述の課題でも述べたように、その配分が最適であったかどうかは検討が必要であるが、少なくともゆらぎによって混乱が収まらないということはなく、委員の主体性が大きく損なわれない範囲での制御に収めることはできた。結果として、市民がセクターや分野、立場を超えて 100 人以上集まり、その中から自己組織化によりプロジェクトチームが生まれ、チーム内のメンバー間の相互作用から具体的なプロジェクトとして地域に対しての取り組みが行われた。地域や社会の規模ではないが、地域の縮図といえるような多様な人材による自己組織化として、赤坂の指摘する制御と自律性の相克の調整については一定の成果があったといえる。

100 人委員会は事業としては終了後したが、その後、市内の各区役所に市民参加の仕組みが設置され、継続的に活動が行われている。そこには 100 人委員会で委員やスタッフをつとめたメンバーが、各自の地元の区での活動に参加し、その経験を活かして、新規プロジェクトの立ち上げや、新たに参加した市民の支援、場のファシリテーターなどを担っている。100 人委員会で形成された人的ネットワークは、各区ごとに分散し、そこで異なるメンバーを受け入れ、自在に結合して自己組織化し、その姿を常に変容させている。つまり今田のいうリゾーミックな状態になっているといえる。

OST による自己組織プロセスのイメージ

いくつかの課題は残ったが、実際に地域の現場において OST という手法を使った実践は、制御的なセクターである行政の事業においても、運営の創意工夫とプログラム設計を通じて、自己組織的なプロジェクト創出が可能であることが示された。図 2 は、100 人委員会における委員の動きを簡素化し、OST を通じた自己組織プロセスのイメージをまとめたものである。

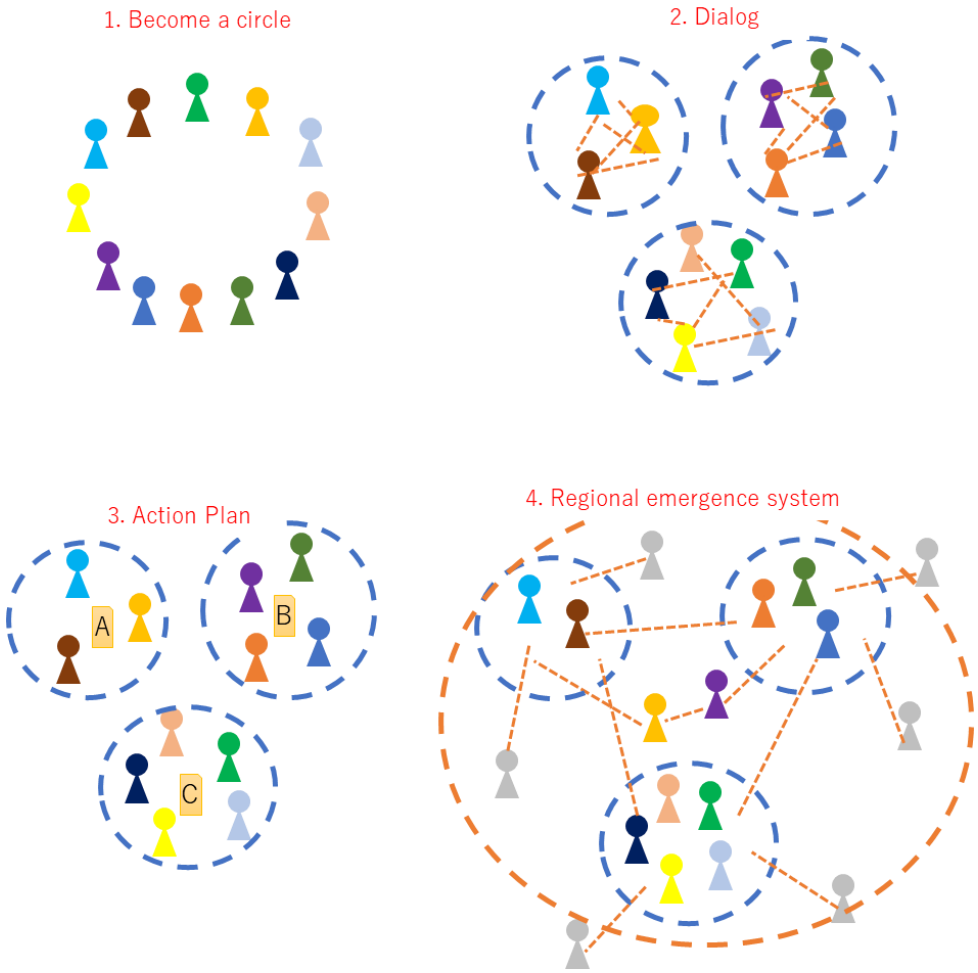

図 2：OST による自己組織化のイメージ（筆者作成）

はじめは、地域の中の主体的に活動している人や組織が、分野や業種などで交わることが少なく分断され、複雑な社会課題の解決に至るほどのインパクトが出せていない状態である。右に行くにつれ、徐々に自己組織化やソーシャル・キャピタルの形成が進行し、相互作用を通じたシナジーによって創発が生み出されるようになっていく。各プロセスを解説すると以下のようである。

1．地域内に点在している多様な主体がサークル（水平関係）で集う

2．自己組織化により主体間のつながりが生まれ、社会的ネットワーク（構造的ソーシャル・キャピタル）が形成。多様性によりゆらぎが発生。

3．ネットワーク内の相互作用によって互酬性の規範、信頼の関係性（認知的ソーシャル・キャピタル）が形成される。それらを通じて、ゆらぎから秩序が生まれる。

4．規範や信頼をベースに、主体をつなぐ支援の存在を通じて主体の相互作用が活発

化し、創発による新たなプロジェクトが生まれる。

第４節　　歴史・文化

京都市は 100 人委員会以前からも、地蔵盆、祇園祭など強固な地域コミュニティと、阪神淡路大震災以降の社会活動型 NPO の隆盛など、もともと持っている文脈から、リゾームは存在していたとも言える。普遍的な要素を抽出するため、京都市が持つ全国的にも特殊なバックグラウンドとして、「（京）町衆」の精神を取り上げる。

京都市は明治維新による人口急減、都市機能衰退の危機に直面し、「まちづくりは人づくりから」と、国に先駆けて 1989 年（明治２年）番組（町の区分）ごとに 64 の日本初の小学校「番組小学校」を創設した。その時に地域の有力者とともに力を発揮したのが「町衆」であった。番組小学校の建設と運営に当たっては、地域ごとに、子どものあるなしに関わらず家の中に竈（かまど）のある家はすべて資金を出し合った。その精神は「竈金（かまどきん）の精神」と呼ばれている。京都市民には、地域のコミュニティ崩壊が叫ばれて久しい現代においても、この「町衆」の精神が受け継がれ、（地域ごとの差も大きくなっているが）「自分たちのまちは自分たちで」という自治意識が全般的に高い都市といえる。

Putnam（1993）は、ソーシャル・キャピタルの概念形成のプロセスの中で、北イタリアと南イタリアの民主主義制度の成功・腐敗の差ができた背景を分析し、その地域が「市民共同体（Civic community）」であるかどうかにあると考えた。その市民共同体を示す市民性の特徴として、以下の 4 つを挙げている。

①「公的諸問題への市民的積極参加」

②「権威と従属の垂直的関係」ではなく「互酬性と協力という水平的な人間関係」である

③連帯し、信頼しあい、互いの相違に寛容である

④内部で協力のための習慣や連帯、規範を育て、外部にそれらを波及させる自発的結社が活発である

(Putnam 1993＝2001：206-07)

これらの要素の多くは、町衆の性質と一致している。同時に Putnam は、「経路依存性」を重視し、長い歴史を通して少しずつ自己集積的に蓄積されていくものとしている。もともと近世の京都には、住民の自治組織である「町組」がある。その起源は江戸時代よ

りさらにさかのぼって、応仁の乱以後、１５世紀終わり～１６世紀初めの戦国期に始まるといわれている。打ち続く戦乱により、焦土と化した京都の町並みと、途絶していた祇園祭を復興させた原動力となったのは、この「町衆」である。町衆もまさに時代の変遷の中で変質しながら、現在に至っている。そういった意味においても、町衆の歴史を紐解くことで、京都のソーシャル・キャピタル形成の起点を見出すことができるといえる。

町衆について研究を行った林家（1964）は「市民社会とは、資本主義的生産様式の発展を原動力としてブルジョワ革命による封建的・絶対主義的体制の変革ののちに成立する社会である」とした上で、京都の場合では、京戸→京童（わらべ）→町衆→町人の変遷を市民の変化としてとらえている（林家 1964：7）。具体的には、政治都市平安京の家を中心とした隷属的な「京戸」から、京都内の「町」の形成期に散発的な批判精神を持って登場した下人・商工業者を中心的な層とする孤立-分散的な「京童」、そして土倉・没落公家・家持商工業者を中心として地域-集団的な生活組織である町組を持った上下両京の自立・自主・自治的な「町衆」が登場する。その後、江戸時代には地域-集団的生活組織面が希薄化し階級的-身分的な意味が強化された「町人」となっていく。この流れから読み取れるプロセスは、まず隷属的な社会に対しの批判精神を持った人が誕生、そのような人が点在している状態から組織やネットワークを構築、自治的なグループを形成していく。最終的に社会的身分の獲得に至る。

このように京都市は、歴史的・文化的背景から、お上（トップダウン）でなく、自分たち（マルチステークホルダー）でという気概が強い。また、もともと地域活動、市民活動は活発で、核となるキーパーソンが各分野にいた。その他にも、大学が数多く存在しているため、全国から多様な学生が集まってくることで、地域の活動にも若い人が関わりやすいという特殊性など、リゾーム構築にとって利となる要素が高い。

そういったバックグラウンドがない、もしくは薄い地域では、京都のモデルをそのまま実践して効果をあげられるかは、疑問が生じる。かといって新たに地域全体を動かすような制度、施設を設置するというのは、大きな予算や組織を動かさなければならず、実現へのハードルが非常に高い。安易に近道を探るのではなく、京戸から町衆への変遷の歴史から、それぞれの地域の中で市民社会の文化を醸成していく必要性を学びたい。そして、その自己組織性のある地域文化の指針として、「町衆的規範」を定義する。「町衆的規範」は、その名の通り、京都の町衆が共通して持つ規範である。町衆の特徴（「地域のことは自分たちで」「まちづくりは人づくりから」「竈金の精神」など）を要素分解し、以下の

3 つの要素を設定する。

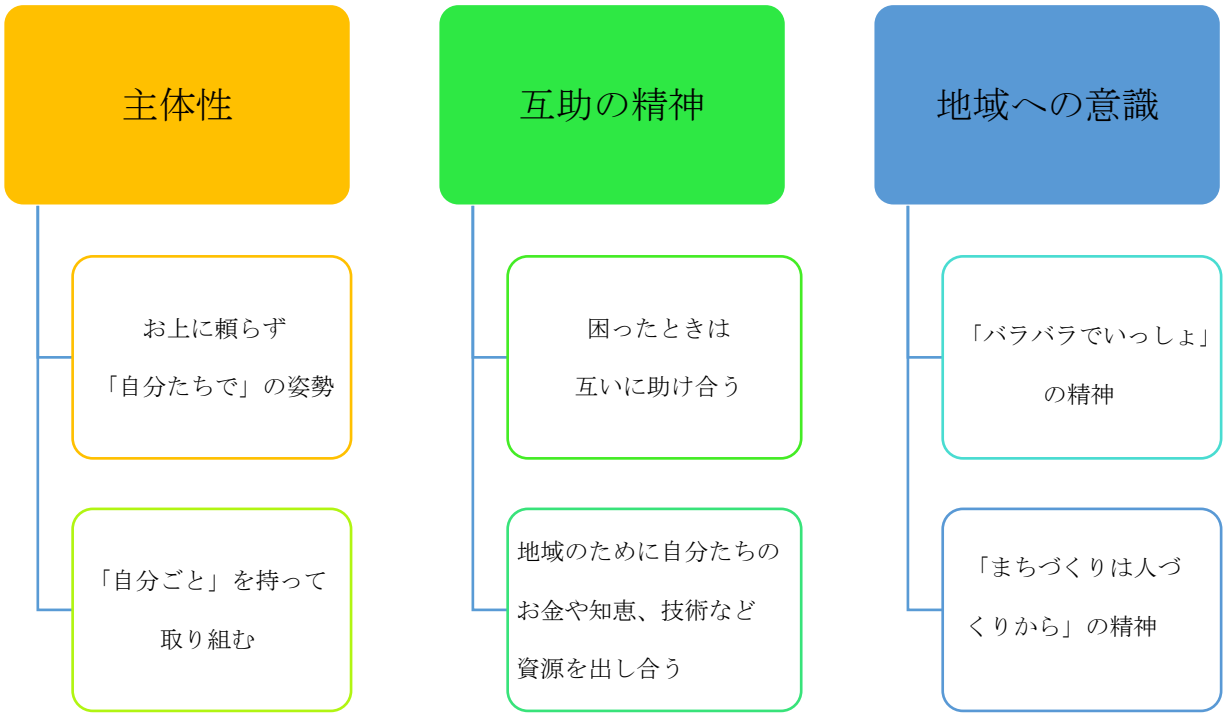

図 3：町衆的規範（筆者作成）

第 5 節　　地域人材リゾームの提唱

第 1 項　　定義

自己組織化についてここまで、今田の理論から「制御図式」と「ゆらぎ図式」の 2 つの接近法、シナジェネティックな自己組織性の 4 つの特性、ゆらぎと意味作用、新しい社会編成原理としてのリゾーム、支援型の社会システムという要素と理論的課題について整理した。次に自己組織化を実践する具体的な手法としての OST と、地域での事例としての 100 人委員会を紹介し、運営した中での工夫や成果、課題などから、ゆらぎと制御の調整について考察を行った。その後の各区への展開も通じて形成された、リゾーミックな状態についても言及した。そして町衆の歴史や文化からは、京都市の市民が町衆として自分たちの力でまちを守ってきたという精神の源流を紐解き、現在の市民活動の根底にある精神を「町衆的規範」として整理した。

これらを通じて見えてきたのは、地域の人々が、分野や職業を超え、地位の上下もなく、

自律的に活動し、時に互いの活動に協力し合ったり、危機的な状況にあっては自発的に地域のためのプロジェクトを立ち上げて集結したりする、地域の人のシナジェネティックな自己組織性の姿である。それを本論は「地域人材リゾーム」と定義する。

第２項　　形成へのプロセスモデル

自己組織性の理論、京都市未来まちづくり 100 人委員会の事例、町衆の歴史と精神の 3 つの要素を組み合わせ、以下の 2 つの視点を軸として、人材リゾーム形成のプロセスを作成する。ある地域の中で、さまざまな人材が集い、つながりあい、シナジェネティックな自己組織性によりリゾームの状態に至るまでの過程のモデルである。

今田の自己組織性の理論の中から、それぞれ対応する要素をもとに「個（要素）−全体（システム）」の軸と「機能（制御）−意味（反制御）」の 2 軸を設定した。その意図は、以下の２点である

1. 「システムは最後」「創造的個の営みを優先」の原則に則り、創造的個へのフォーカスからスタートする。
2. 「制御図式とゆらぎ図式の融合」「システムの論理に創造的個の論理を組み込む」をビジョンとして想定し、その両者を行き来できるよう、位置づけを可視化する。

全体（巨視的なシステム）からのアプローチの場合

図 4 は巨視的なシステムからのアプローチである。地域活性の現場では、地域に関わる活発な地域自治や産業創出につながるよう、さまざまなテーマ、対象のイベントが企画されている。しかし、全体のビジョンをもとに場だけを用意しても、多様な人材は集まらない。筆者自身も何度も経験しているが、集客は非常に難しい。参加者も、情報が届き、時間的制約も少ない限られた層（活動的な高齢者であるアクティブシルバーなど）に偏る傾向がある。

また、老若男女、多様な人材が活躍している地域は各地に存在しているが、注目されるのはカリスマ的リーダーによるイノベーティブな事業を核とした集積（クラスター）か、UI ターンを通じた外部からの人材（いわゆる若者・馬鹿者・よそ者）流入によるものが多い。

地域に多様な人材を招致しようと移住支援制度を手厚くしたり、カリスマ的リーダーを

フィーチャーしてその知名度で認知を高めたりすれば、その求心力で移住者は集まる。しかし、それだけでは移住者と地元民との意識の乖離が生まれ、地域の多様な人々による相互作用は生まれず、リゾームにまではなりにくい（点線表記の箇所）。

京都市のように地域全体で主体的に行動する文化・風土を育むことができれば、移住者、地元民問わず多様な人々が積極的に地域に関わり、相互作用からの創発も生まれる（図４のオレンジ色表記の箇所。点線部分にも流れが生じる）。しかし、こうした文化・風土は歴史や環境によって年月を重ねて醸成されてきたものであり、どの地域にも存在しているものではない。

いずれも産業振興や地域自治という全体からのアプローチであり、創造的個の優先の法則に則った新たな発想の必要がある。地域の文化や風土に左右されず、人々の主体的な関わりを引き出すためには、移住者も地元民も、さらには職業や業界の区別なく、地域の創造的個としての個人にアプローチをする必要がある。

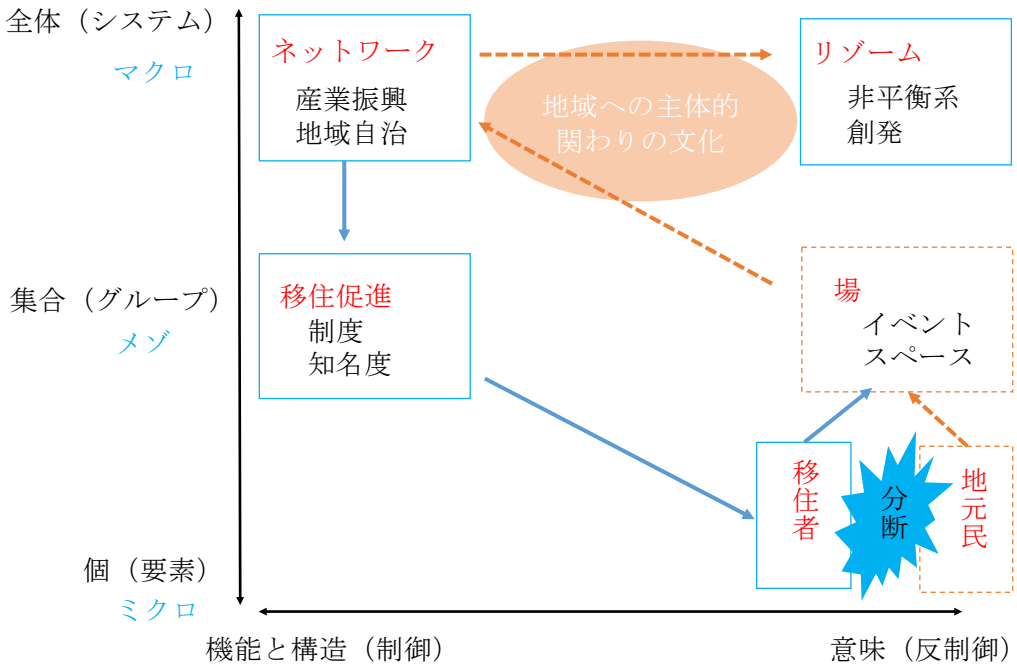

図４：全体からのアプローチ（筆者作成）

制御とゆらぎが分離している場合

図 4 は、個からスタートしているが、制御か非制御のどちらか一方の場合のプロセスである。一方、個からのスタートの事例としては、地域人材のデータベースがある。地域

の人の情報を集めようと、足を使わず決まった項目のテンプレートを配布し記入してもらう形をとると、人の情報はある程度集まるが、肩書や活動内容と行った表面的なデータが集まり、その人の「人となり」の情報が抜け落ちる。その状態で人が集まり交流が行われても、目的合理的で表面的なコミュニケーションとなる。いわゆる人脈づくりにはなる。

逆に、個人それぞれに任せた形をとると、自分で自分のことを紹介する自己紹介となる。例えば、SNS や Blog 等での発信がそれにあたる。イベントや SNS などで集まる機会はあるが、それだけでは無秩序であり、個別の相互作用はあっても、なかなか新しい秩序の形成には至らない。

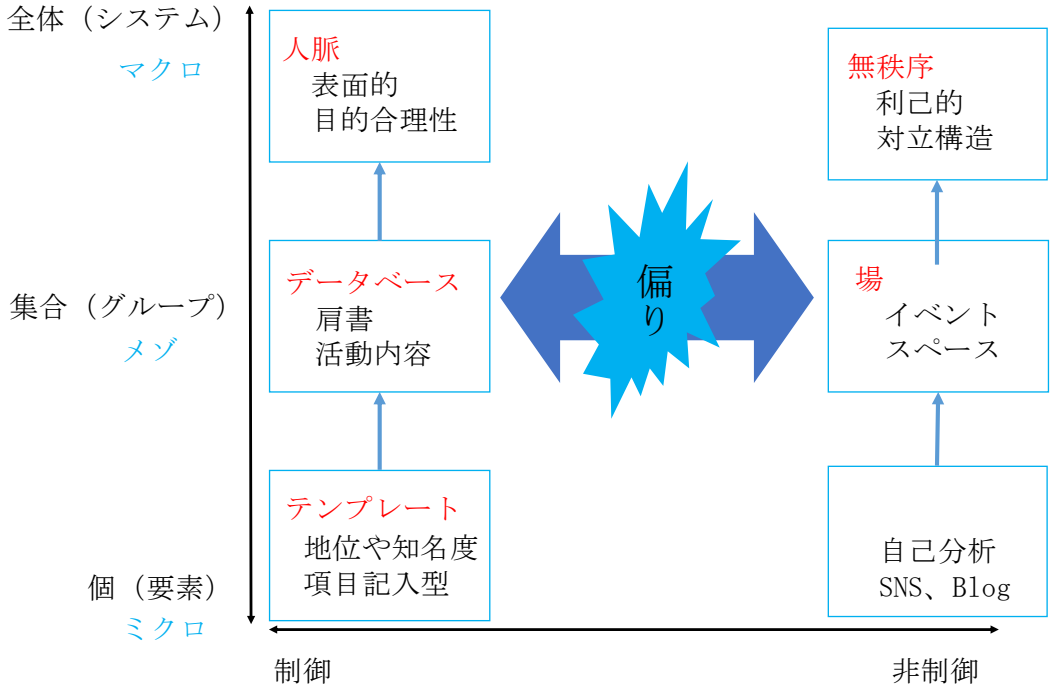

図 5：制御と非制御の分離（筆者作成）

前者は制御型であり、後者は非制御型でといえる。どちらか片方だけでは、地域の人材が効果的につながりあい、相互作用が生まれるプロセスにはならない。個が集合しリゾームになっていくためには、制御と非制御の融合による相互作用と新しい秩序形成が必要である。

創造的個からスタートし、制御とゆらぎが融合するプロセス

地域人材リゾームに至るためには、2 軸を融合する必要がある。人材リゾームを構築し

ていくためには、上記のような前提となる文化の構築からスタートする必要がある。地域全体の文化の醸成は、当然ながら特効薬はない。京都における「町衆」の起源をヒントに、形成の核となる要素がある。地域人材リゾームに至る長い旅程は、人にフォーカスを当てることからスタートする。

人にフォーカスを当て、他者へ伝える手法として「インタビュー」が挙げられる。自己組織化およびソーシャル・キャピタルの理論、100 人員会および町衆成立プロセスを掛け合わせ、創造的個にアプローチするインタビューを起点とした地域人材リゾーム形成プロセスは以下のようになる。

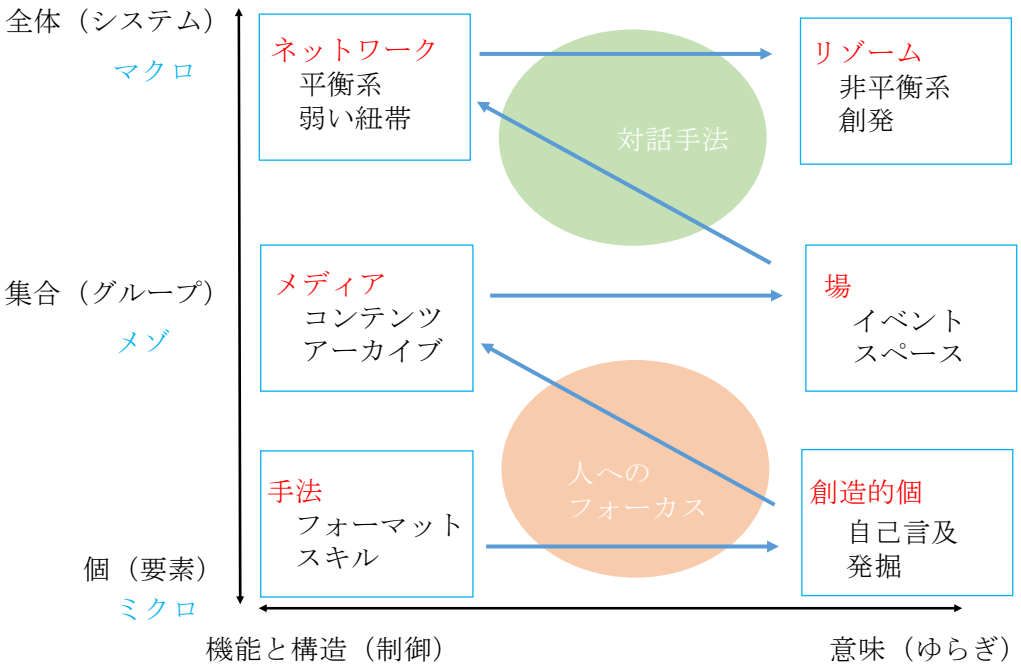

図 6：地域人材リゾーム形成プロセス（筆者作成）

順を追って説明をしていく。まずは創造的個の営みへのフォーカスである。地域においては地域の人材ひとり一人へアプローチを意味するが、その際、一定の質や統一感を出すための「手法」を使用し、有益な情報を引き出し、他者に伝わるコンテンツを作成できるようにする。

インタビューはまさに、特定の一人にフォーカスをして創造的個の営みを可視化する「手法」といえる。そこではインタビュアーからの問いを呼び水として自分で自分のことを語る「自己言及」があり、そして語ったことによって自らを省みる「自省作用」、さら

には語った内容から新たな気付きを生み出す「意味作用」にもつながる。また、インタビューはそこで話した内容がメディア（文字、写真、映像等）にまとめられ、他者もアクセスができるコンテンツとなる。その中で創造的個の営みがストーリーとなり、個人が持ち言語化されていなかった暗黙知が、本人の語りを通して形式知化される。また、もう一つの文脈として人柄や仕草などの非言語の情報も含まれる場合もある。このプロセスでは「半構造化」や「編集」といった仕組み化は行うが、あくまで創造的個の語りが主役であり、インタビュアーによる制御は極力排する。

次に、創造的個の情報の集合としての「メディア」である。「メディア」はコンテンツの集積としての「データベース」である。それは「誰がなにを知っているか」の情報である地域のトランザクティブ・メモリー（Transactive Memory）[11]でもありうる。場やデータベースは一定の制御の必要や検索機能などの機能性を持つ。創造的個の意味性や多様性を、ここで集約することで、誰もがアクセスすることができるようにしたり、求めている人と接続しやすくしたりすることができる。

メディアに情報が掲載された人材が集う場については、先ほどまでのイベントやスペースという具体的な“もの・こと”から、人がフラットな関係で集う「サークル」、その中で人が関わり合う「時間」「空間」といった“概念”に抽象化することで、場自体に自己組織化を促進させる触媒としての役割を持たせる。その際、メディアが構築されていることで、サークルに集う人々の多様性の高さや相互理解の深さにつながる。

その後のプロセスは 100 人委員会の事例の OST を始めとする「対話手法」の出番となる。「サークル」から人のつながりが生まれ（または強化され）、ネットワークになる。さらにネットワーク内の人の関係性が深まり、一定の規範と信頼が醸成されることでソーシャル・キャピタルが形成される。

そのネットワークが常に異質なものを取り込み、関係を変え、創発を通じて新たな価値を創造していく動的平衡の状態となることで、地域人材のリゾーム化が生じる。

---

[11] Daniel M. Wegner が提唱した組織学習に関する概念。「組織にとってメンバーが一緒に何かを学習することよりも、バラバラに学習したことを持ち寄りお互いに「誰が何を知って いるか」を知っている状態のほうが、組織の持っている知識の総量が大きくなるという考え方」であり「何を(What)知っているかよりも、誰が何を知っているか（Who knows what)のほうが組織にとっては遥かに重要」であるということを示す。（飯田他 2016：156-157）

第６節　　類似する概念との相違と関係性

第１項　　ソーシャル・キャピタル

ネットワークに関わる概念であり、地域社会の現場でも広く知られているものとして、ソーシャル・キャピタルがある。ソーシャル・キャピタルには非常に多様な定義があるが、本論では、この概念が世界的に認知されるようになった Putnam による概念を中心に扱う。Putnam は、「人々の協調行動が活発化することにより社会の効率性を高めることができる、社会の信頼関係、規範、ネットワークといった社会組織の特徴」(Putnam 2000=2006 :14)と定義した。Putnam 概念によるソーシャル・キャピタルは、①市民社会の水平的（horizontal）ネットワーク、②一般的信頼感（generalized trust）、③一般化された互酬性の規範（norms of reciprocity）の 3 つの下位要素によって構成される。また後述するようにソーシャル・キャピタルが持つ負の側面の指摘を受け、結束型と橋渡し型という 2 つの類型に分けた（Putnam 2000=2006:18）。

【結束型】

メンバーの選択やあるいは必要性によって、内向きの指向を持ち、排他的なアイデンティティと等質な集団を強化していくもの。民族ごとの友愛組織や、教会を基盤にした女性読書会、洒落たカントリークラブなどがある。「結束型の社会関係資本は、特定の互酬性を安定させ、連帯を動かしていくのに都合がよい。

【橋渡し型】

外向きで、さまざまな社会的亀裂をまたいで人々を包含するネットワーク。公民権運動、青年組織、世界教会主義の宗教組織などがある。橋渡し型のネットワークは対照的に、外部資源との連繋や、情報伝播において優れている。

Putnam の特徴は、4 節でも紹介した市民共同体を重視している点であり、これは要素の相互作用を扱うシナジェネティックな自己組織性との親和性も高い。

そのソーシャル・イノベーションと地域人材リゾームの違いは、ソーシャル・キャピタルもまたネットワーク論の範疇であり、やはり「自分で自分を変え、常に流動してみずから変態していく自己組織化の視点を自覚的に持っていない」（今田 2005:208）点にある。そもそもが「資本」であり、人と人の間で交換される、使用されるものである。ゆらぎや新しい秩序といった社会の動的なプロセスを捉える概念ではないという違いは大きい。しかし上述のようにシナジェネティックな要素を内包し、かつ実際の地域社会の現場にも浸

透しているという点をみると、人的ネットワークから地域人材リゾームの間の橋渡しとなる可能性を持っていると考える。結論から言うと、それは「信頼」や「規範」といった認知的ソーシャル・キャピタルといわれるものに見いだせる。

批判と多様性

ソーシャル・キャピタルや Putnam による概念に対する批判的意見を整理しておく。まずソーシャル・キャピタル自体について多くの指摘が行われてきているが、最も顕著なのが負の側面の性質である。三隅（2013）は、以下のようにまとめている（三隅 2013:86）。

- 外部者の排除：民族集団による職業の閉鎖性など
- 個人の自由の制限：PTA による安全の名の下の監視など
- 集団構成員の過度の要求：中国拡大家族の多大な相互援助など
- 下方平準規範 downward leveling norms：集団外部のマジョリティへの反発・敵対によって集団内の連帯が強化される場合に、「上昇」志向により集団から抜け出そうとする成員を押しとどめる「下方」志向の規範が存在すること。

Putnam は当初この概念をポジティブな姿勢で使用していたが、こうした指摘を受け、先述の「結束型」「橋渡し型」の分類を提示し、結束型が持つリスクについて強調した。

次に Putnam による概念についても、さまざまな視点からその不完全性が指摘されてきた。渡部（2011）は、それらをソーシャル・キャピタルの性質、ソーシャル・キャピタルの計測と分析方法、公共善としてのソーシャル・キャピタルの 3 つのカテゴリーに分類し論じた。大枠を要約すると、以下の通りである（渡部 2011:138−139）。

① ソーシャル・キャピタルの性質：

構成要素における集合財（ある集団内の成員であれば誰もが利用から排除されない財）と関係財（個々人の社会的なつながりを通じてアクセスできる財）の混在、信頼と市民参加の連関関係を中心とした自己強化性の論拠、原因と結果がどちらともとれるロジックの循環性などに不備がある。

② ソーシャル・キャピタルの計測と分析方法：

信頼・規範・ネットワークの計測・分析指標の根拠、計測する対象の設定への恣意性がみられる。

③　公共善としてのソーシャル・キャピタル：

各アクターの主体的な意図や行動、受ける資源配分の差などの言及が脱落し、誰にとってどのような意味を持つのかが不明瞭である。

同じく Putnam 概念について、北井（2017）は共同体の美化と類型、国家と制度の役割という 2 つの視点で論じた。同様に要約する（北井 2017:314-318）。

①　共同体の美化と類型：

伝統的な共同体や垂直的人間関係であっても、異なる種類の規範や信頼に基づき協力が達成される。つまり、異なる性質のソーシャル・キャピタルが存在する。

②　国家と制度の役割：

国家の制度がソーシャル・キャピタルを育成する側面について十分な検討がなされていない。国家、そして公的な制度が影響を与える側面は決して無視できるものではない。

一方で JICA 研究所（2002）は、Putnam 以降、途上国の開発問題というコンテクストの中でソーシャル・キャピタルについての議論に積極的にコミットした論者たちを含め 3 つのタイプに分け、その多様性を整理している（JICA 研究所 2002:9-18）。

①　ソーシャル・キャピタル批判論者たち：

Putnam の議論を中心にその正当性について（時にはソーシャル・キャピタルの存在そのものまで）批判するものである。たとえば「資本」と定義づけることの問題や、定量的に計測することの是非、計測方法など、主に理論形成の厳密さを指摘している。加えてソーシャル・キャピタル自体が持つ負の側面も含まれる。前述の渡部による指摘および三隅による整理がここに該当する。

②　詳細検討者たち：

ソーシャル・キャピタルの定義のあいまいさから起こる混乱をできるだけ克服し、ソーシャル・キャピタルの役割に関する詳細かつ厳密な検討を加えようと試みる論者たちである。ソーシャル・キャピタルの名で定義されるものは多岐にわたるという前提の下に、その中から分析のコンテクストにあった特定のソーシャル・キャピタルを取り上げ、経済発展やその他の厚生向上への貢献について議論するのである。代表格は世界銀行（SCI）であり、前述の北井による

指摘と理論の展開はここにあたる。世界銀行は北井と同じく垂直的な関係に加え、法などのフォーマルな社会構造・社会制度も、様々な規模や目的のネットワークも、政治的自由といった価値観に関わるものも、非市場的な制度・構造はすべてソーシャル・キャピタルの範疇に取り込んだ。

③　戦略的利用者たち：

あえてソーシャル・キャピタルの定義に関する厳密な議論をせず、戦略的にその言葉を開発援助の議論に利用しようという立場である。例えば Evans（1997）は、「政府と社会のシナジー」（state-society synergy）という議論を打ち出す。「シナジー」とは、1 つの組織の機能が他の組織の機能にも波及効果をもたらし、相互の機能が互いに影響し合って、両者にとってより望ましい状態になることをいう。そのプロセスにおいて重要になるのがソーシャル・キャピタルの形成・蓄積である。Evans は、ソーシャル・キャピタルの定義そのものについては深く議論せず Putnam のそれを用いているが、その一方で、ソーシャル・キャピタルは短期間で形成可能なものであるといい切っている。これは Putnam の経路依存性の特徴とは相反するものであり、戦略的にその特徴を変質させて定義している。

本論では、ここまで整理をした上で、Putnam 概念をベースにしつつ、③のアプローチをとる。概念の完全性や厳密な検討の追求は本論の趣旨からは外れる。あくまでネットワークからリゾームをつなぐ要素として、広く社会の現場で使用されているソーシャル・キャピタルの概念を活用する。特に「結束型」と「橋渡し型」は、ネットワークに流動性を生み出し、リゾームにつながる要素として、4 章の分析に置いても使用する。

第２項　　生態系

多様な主体が自律的に関わり合うことを表す近い概念として、「生態系（ecosystem）」がある。 自然界の全ての種は、各々が独立して存在しているのではなく、食うもの食われるものの食物連鎖に組み込まれ、相互に影響しあってバランスを維持している。これらの種に加えて、それを支配している気象、土壌、地形などの環境要因を含めたものを生態系と呼ぶ（筧 2019：140）。もともとは自然環境のシステムで使われている言葉だが、近年はビジネスの世界でイノベーションを生み出す仕組みとして使われるなど、人間社会のシステムでも使用されている。地域を舞台にした人間の生活や経済活動も、住民、事業

者、役場職員、観光客など の人間、企業・組合・行政機関などの組織、気候・地形・動植物などの自然環境の相互作用による生態系、エコシステムの基に成り立っている（筧 2019：141）。

また、佐野（2019）は、この生態系の概念に自己組織化の要素を加味し、地域の主体による「自己生態系化」を定義している。「自己生態系化」とは、「地域内の各主体（グループ／個人）が全体で意味のある系を成し、中央集権・統制に依らず、全体最適を自己生成する状態」をいい、「そのプロセスにおいては、全体の情報共有とフィードバックを媒介し、促進するメカニズムが働いていると考えられる。そしてその調整機能の中枢を担うのが、各主体の動きやリソースを可視化する中間支援組織の働きである」としている。

また、「自己生態系化された地域づくり主体」の成立条件は「地域の維持機能としての地縁集団（住民組織など）と、課題解決及び地域イノベーション主体としてのテーマ・コミュニティ（NPO/事業者など）が、それぞれの得意領域を活かしながら連結している状態」であり、そこに上部構造としての制度・政策主体である行政機構も有機的につながり、「そうした集団間の社会関係資本形成を日常的に行い、地域づくりアクター間の連携を、全体で意味のある生態系として機能させる紐帯としての役割が中間支援組織にはあるだろう。」（佐野 2019:16）とするなど、中間支援組織の役割を強調している。

生態系と地域人材リゾームの違いは、以下のように整理しておきたい。

・生態系は上記の通り人間、企業・組合・行政機関などの組織、気候・地形・動植物などの自然環境の相互作用を総合的に捉えたものである。地域人材リゾームはその名の通り、あくまで人間の相互作用に特化した概念である。

・最終的に理想とするところは生態系である。その生態系を構築していくための「根茎」にまずは目を向けることを本論は意図している。縦横無尽に根を張り、そこから様々な草木、樹木が芽を出し、外から虫や鳥獣がやってきて相互作用が生まれ、豊かな生態系となる。筧（2019）は持続可能な地域の生態環境として、以下の 4 つをを挙げている（筧 2019：3）。

土、つながり協働し高め合う「地域コミュニティ」

陽、道を照らしみんなを導く「未来ビジョン」

風、一人ひとりの生きがいを創る「チャレンジ」

水、未来を切り拓く力を育む「次世代教育」

地域人材リゾームはまさに「土」にあたる部分である。地下茎が張り巡らされた地域の土壌づくりを通じた、生態系の基盤形成の仕組みを論点としている。

第７節　　ファーストステップとしてのインタビュー

100 人委員会をはじめ、地域の人たちを集めた対話の場の取り組みは、各地で行われるようになってきている。人が集まる「場づくり」の実践の手法や事例は蓄積されてきており、その研究も多くされている。しかし、そうした「場」は日常的に設置できるものではなく、継続的に開催することは難しい。また、時間や場所が決まっているため、来られる人と来られない人の差が出てくる。例えば平日の昼はサラリーマンには参加が難しく、夕方は子育て世代には参加が難しい。土日は両者とも貴重な休日のため、なかなか社会貢献や学びの機会には足が向きにくい。結果としてまちづくりのイベントは、どうしてもアクティブシニアと呼ばれるような、定年退職した活動的な高齢者の割合が多くなっている。もちろん、そうした人たちの経験や能力、なにより地域に対する思いの力は重要である。しかし、リーチできる層が限られることは、ともすれば同質的なコミュニティになってしまう危険性をはらみ、かつ中長期的視点での持続可能性の観点からも望ましい状態ではない。

「場」の多様性のためには、その前段階に目を向ける必要がある。それが先述の町衆にヒントを得た「町衆的規範」の土壌であり、そのプロセスが先ほどの図の前半部分である。「町」が機能している地域では、顔が見える関係があり、それぞれが自分の役割を自覚し、地域のために主体的に行動する。必要があれば自分たちで調整して場を設定し、集まることができる。地域に対するインセンティブも高く、予定の優先順位の付け方も違ってくる。しかし、現代社会においては地縁的なコミュニティの衰退が全国的に顕在化して久しく、そのような状態を保てている地域は多くはない。第一章で述べたように大きく時代も変わっている。過去のコミュニティを戻すという発想ではなく、新たな土壌をつくることに目を向ける必要がある。

ここで、今田の自己組織性の理論に戻ろう。今田はシナジェネティックな自己組織性のためには管理ではなく、支援が必要であると述べている。地域のコミュニティについても、行政や特定の権力者が手動して構築し管理するのではなく、地域の人々が創造性を持って行動し、ゆらぎの中から秩序を形成していく支援を行う存在が必要である。

具体的な事例として、島根県隠岐諸島の海士町の「AMA ワゴン」を紹介する。「AMA ワゴン」は、海士町教育委員会と一橋大学の関研究室の共催スタートした都市農村交流事業であり、志を持った優秀な移住者の獲得につながった取り組みである。以下、佐野（2019）による解説を引用する（佐野 2019:24）。

「AMA ワゴンとは 2006 年からスタートしたプロジェクトであり、「人間力」を高める魅力的な教育プログラムの提供と島内外に海士ファンを創出することをねらいとして、「学校における出前授業」と「地域密着型交流」の 2 つを主に実施する企画であった。

AMA ワゴンという名のバスを運行し、都市住民（若者層中心）を海士町に迎え、島前高校と海士中学校で、AMA ワゴン参加者が講師やファシリテーターとなる「出前授業」を実施してきた。島の子どもたちに広い視野・世界観を持ってもらい人間力の育成を図る一方、AMA ワゴン参加者に海士ファンになってもらい、海士町産の安心・安全な食べ物の良き理解者・購買者となってもらうことで、海士町の第一次産業の活性化につなげることを目指した試みである。

発足当初は一橋大学大学院の関満博研究室と教育委員会とが共催していたが、その後巡の環が委託を受け 2009 年 12 月まで実施していた（現在は終了している）。こうした積極的な交流事業を通じて海士町ファンとなり、その後の移住や地域での起業につながるケースも数多くあった。」

この企画は、形としては海士町の事業ではあるが、取り組みの内容はあくまで AMA ワゴンという移動手段と島の住民とのコーディネートという「支援」に徹している。都市部から多くの若者が来島して島の住民と交流を重ねることである種のゆらぎが発生し、その中から地域のハブとなる存在が島の内外から現れはじめ、移住や起業、コミュニティの形成につながり、新しい秩序が形成されていった。その形成のプロセスや方向性について海士町側は、支援、協働はしても管理、制御はしていない。

もう一点、町衆から町人への変遷のように、閉鎖性や階層性の発生には注意が必要である。そこはソーシャル・キャピタルの橋渡し、もしくは外部性を取り入れる必要がある。その観点からも、「AMA ワゴン」はまさにそれらの役割をも果たしていると言える。

高橋ら（2018）は、海士町で行われた島嶼活性化事例からの発見事実を、大きく二点に集約した。第一に、地方自治を担う地方自治体は単なる資源や事業機会の提供者でも正当性の付与者でもなく。外部から必要な資源を獲得する能力と権限を有する強力な変革主体となりうるということである。第二に、地方自治体による地域活性化事業への動機と新

結合の手法は、地理的・財政的制約によって方向付けられる点である。海士町の場合、財政破綻が予想される離島地域であるが故に、島の資源を利用した島外起業家たちの自助努力を取り込む形でヒット商品や新会社設立につなげた（高橋ほか 2018:186）。それらを踏まえ、「地方自治体は民間には無い資源にアクセスすることができ、且つ、民間の自助努力を取り込むことが可能な、ソーシャル・イノベーションを実現させる強力な中心的アクターとして捉え直す必要性があると考えられる」（高橋ほか 2018:186）と述べている。自助努力の喚起はいいかえると支援である。つまり、地方自治体は地方自治体にしかできない支援者として役割を持っているといえる。

海士町は、「離島といった地理的条件や、カリスマ的リーダーの存在といった独自の背景」（佐野 2019）を持つ中で、地方自治体として持つ権限をいかし、AMA ワゴンを含むさまざまな支援事業を通じて、外部人材の自在な活躍と結合を促進させたのである。

これらを踏まえ、改めて、どの地域でも誰でも取り組めて、普遍的に「自己組織性」につなげられるファーストステップの実践としての「インタビュー」に着目をしたい。リゾーム形成へのプロセスでも述べたとおり、インタビューは以下の特徴がある。

1. 点在する創造的個の営みへのフォーカス
2. インタビュアーとの相互作用による自己言及
3. ゆらぎと制御をつなぐ「場」としてのデータベース

インタビューにも多様な形式があるが、本論では決まった型があり、人柄なども伝えられる映像コンテンツを使用したインタビューである「ZUKAN インタビュー」を取り上げ、リゾーム構築の基礎的文化の醸成のきっかけづくりの取り組みとしての意義と効果を検証する。次章ではまず、ZUKAN インタビューについて詳細に解説を行う。

第３章　　ZUKAN インタビュー

第１節　　ZUKAN インタビューとは

第１項　　概要

ZUKAN インタビューは、もともとは、筆者が NEDO フェローシップ時代に研究者へのインタビュー業務として取り組み始め、現在まで研究者に限らず 700 人以上のインタビュー映像を撮影し紹介してきた手法である。基本的なスタイルとしては、収録前打ち合わせを通じてインタビュイーの現在・過去・未来を表す 3 つのキーフレーズを作成し、それらを記入したボードを手に対話型のインタビューを行い、その模様を二人並んだバストショットで映像に収録。それをインターネットで配信するという形式での映像インタビューである。カメラに向かってではなく、インタビュアーとざっくばらんにトークしている横での撮影や、オープニングテーマを一緒に歌うなど、相手がカメラや人前で話すことに慣れていなくても、極力リラックスして素の人柄で話をしてもらえるよう、創意工夫を重ねて構築した。

また、これは、プロセスや使用する機材も含め、最初から最後まで一人でも取り組めるように最適化され、体型立てられた手法である。さらに、単にコンテンツを作成する手段に留まらず、人の情報を映像で発信し、コンテンツが蓄積していく一種のメディアでもある。

表１：インタビューコンテンツとしての特徴（筆者作成）

		文字と写真	映像	(ZUKANインタビューの工夫)
作りやすさ	○（メリット）	・メモかボイスレコーダーがあればすぐにできる。 ・編集作業（修正・削除、コピー・ペーストなど）が柔軟にしやすい。	・話したそのままをアップするので、その場で本人に内容に問題がないか確認ができる。	・できるだけ手作りの小道具を使い、カメラも固定にしているため、身の回りにあるものや最小限の機材（一般的なホームビデオ、スマホでも）で撮影ができる。 ・3つのフレーズを使うことで、ほぼ撮って出しでの配信が可能。また簡単な編集であれば、最近はYoutube上でも編集ができる。
	▲（デメリット）	・テープ（メモ）起こしに時間が非常にかかる。 ・話口調を文章用に変更するため、完成した原稿を本人に確認しないといけない。	・機材や準備が必要。 ・編集が必要な場合、最低限の機材と知識が必要。映像のファイル形式などによって動作しない場合も。	
見やすさ	○	・とばし読みをしたり、じっくり読み込んだり、その人のペースで読むことができる。	・再生をしたら目で追わなくてもいいので、他のことをしながら聞くことができる。	・3つのキーフレーズやオープニングの数分を見るだけで、ある程度その人の人柄などを感じることができる。
	▲	・ページをめくったり（マウス操作をしたり）、文字を目で追ったりする必要がある。	・最初から最後まで、一定の時間見続けないといけない。 ・音声なので、イヤホンなどがないと外出中に見にくい。	
伝わりやすさ	○	・編集によって話の流れや言葉をある程度整えられているので、順序立てて理解することができる。 ・写真によってその人の一番魅力的な表情や感情の出た瞬間をピンポイントで見せることができる。	・声や話口調、間の取り方、仕草などから、その人の人柄や雰囲気を感じることができる。（気さくそう、まじめそう、楽しそうなど） ・同じく声のトーンや口調、仕草などから、その人の感情がダイレクトに伝わる。	・3つのキーフレーズを使うことで、話が展開しやすく、脱線しにくい。 ・対談形式で撮影することで、人前で話しなれていない人でも、インタビュアーとおしゃべりしている感覚で話ができる。 ・ほとんど編集しないので、編集者の恣意性が入らず、できるだけその人そのままをお伝えする。
	▲	・誰の話でも同じようなトーンになり、その人の人柄や感情が伝わりにくい。 ・編集や写真の選び方によって、編集者の主観や解釈が入る可能性がある。	・話言葉そのままなので、聞き取りにくかったり、話が脱線していたり、専門用語や方言など聞き慣れない言葉があると理解に時間がかかる。 ・人前で話し慣れていない人だと、緊張して普段のように話ができない可能性がある。	

第２項　　背景

筆者が 産学連携コーディネーター育成事業である NEDO フェローシップ（URL 4）に採択され、OJT として所属していた研究支援組織（NPO 法人 KGC）にて始めた『研究者図鑑/Researcher Zukan』が ZUKAN インタビューの発端である。KGC は 1.現在の常識に惑わされずに、未来社会の多様性を高めるための非常識な研究プロジェクトを創造する（研究プロデュース）。2.世界中から京都に研究者が集まり、分野の垣根を越えて自由闊達に議論できる研究者コミュニティを演出する（コミュニティプロデュース）の 2 つのミッションを持つ組織であった。研究者図鑑は主に 2 つ目のミッションを達成するための研究者のネットワーク構築を目的としてスタートした。

研究者図鑑を企画する以前は、今でいうサイエンスカフェのような、多様な研究者が取り組んでいる研究を発表し、それをもとに参加者が交流する形式の企画を担当していた。しかし、場の設定や準備の手間が大きく、月に 1 回程度しか開催ができないため、広が

りに限界を感じるようになる。話し合いを重ねる中で、研究者に来てもらうのではなく、こちらから直接会いに行ってインタビューを行い、それをきっかけとしてネットワークを構築していくアプローチにシフトすることになった。加えて、ちょうど一部の人に広がり始めていたオンライン動画共有サービスを使い、インタビュー映像での情報の発信をしていくプロジェクトに挑戦することとなった。インタビューを通じた直接的なネットワークに加え、発信した情報に接した視聴者にも KGC のネットワークを広げていこうという意図である。しかし、当時、筆者も他のスタッフも、インタビューや映像に関して素人であり、なんの工夫もなく取り組んではプロのメディアには質も話題性も適わない。そこで「365 日毎日、3 年で 1000 人を目指す！」「配信スタートの日から一日でも欠けたら即クビ」という「数のインパクト」「エッジの効いた設定」「量質転換」による効果によりメディアとしての認知を高めていこうという戦略のもとスタートした。

第３項　　フォーマット開発プロセス

実際にどのような形の映像で研究者の情報を発信していくのか、さまざまな試行錯誤や経験を通じてブラッシュアップを繰り返し、最適化されたフォーマットが形成されていった。ここでは、そのフォーマット開発のプロセスを時系列に辿っていく。

３つのキーフレーズ、オープニングソング、対談形式の収録

研究者図鑑の企画が決定した 2006 年 9 月からの 1 か月間、テスト収録を繰り返した。最初は映像については研究者が自らの研究をスライドで発表するコンテンツであり、そこに筆者は司会役として映像の最初に研究者の紹介を行い、その後は研究者が単独で話をし、映像に映るのも一人だけという形式であった。しかし、当時のカメラ性能では逆光がひどく、スライドを見せるために部屋を暗くしていたため、スライドを映そうとすると肝心の研究者が真っ暗になる。スライドだけ別ではめ込むという編集技術は持っていなかったため、別の方法を模索する必要があった。そこでスライドを使わず、フリップに研究のキーワードを書きそれを基にしたインタビュアーとの対談形式で行うことで、スライドよりも情報量の少ないフリップをインタラクションで補ってみてはどうかというアイデアが NPO 組織のメンバーから出された。専門的な研究の話を、口頭の話だけで伝えられるのかという疑問を持ちながらテストをしてみたところ、トーク番組のような柔らかい雰囲気の情報コンテンツとなりテスト視聴した外部の人からの反応もよく、この形で行くことに

なった。テスト段階では KGC の過去のイベントに参加をしてもらったり、アドバイスをもらったりしていた研究者にお願いをした。

そのフリップには初めは紙に 5 つのキーワードを書いていた。ただし 5 つでは長くなりすぎたため、3 つに設定をした。その３つというのは単に５つから減らすというのではなく、３の法則と呼ばれる人の認識において、最適と言われている数に合わせるという意図も含まれていた。その３つのキーワードは、インタビュイー（研究者）に自分の研究を３つの言葉で表すとしたら何でしょうか？という問いを設定して、相談して決定した。撮影の前にその３つの言葉について説明をしてもらい、理解をするというプロセスが入っていた。それは実質的にインタビュイーの研究の解説をしてもらうプロセスであった。インタビュアーである筆者が理解できた上で、映像の中でどのような流れで話をしてもらうのかを相談して決定し、それに沿って映像を撮影した。最終的にそのような流れから、実施する形が整い、本撮影に入ることになった。当初フリップは白い紙を使っていたが、撮影をしてみると、そのフリップのまわりが白とびをして文字が見えなくなっていた。そのため、フリップに使う紙は何かしら有色の紙を使うことになった。これまでの説明はテスト段階のことであり、2006 年の 10 月から本撮影をスタートした。本撮影をスタートする段階になって、番組としての体裁や演出を整えるために、何かジングルのようなものを入れたいと考えた。しかし、誰かに作ってもらう時間や人のつながりもなかったため、仮の対応として、ひとまずインタビュアーである筆者が歌うことになった。メロディーは 3 種類ほど「それっぽい」ものを筆者自ら考え、その中から組織のメンバーのアイデアを受けて決定した。

初めは筆者や組織のつながりのある研究者からスタートした。また、「研究者」という概念も幅広く、理数系はもちろん人文社会系、大学や研究所所属の人だけでなく、NPO やアーティストなども専門知の探求をしている人として対象とした。ただし、少なくとも修士課程所属以上を最低条件とした。その後の出演者に関しては、『数珠つなぎ』を中心として発掘をしていった。魅力的な研究者のおすすめする研究者は魅力的であるという仮説のもと、紹介ベースで研究者の発掘を行っていった。ただし、紹介ベースだけでは 1 日 1 人の配信には追いつかないため、インターネット等で検索を行い掲載されている連絡先に依頼のメールも送った。そこには、このような企画の依頼に対して面白そう！と感じてくれる研究者は何かしら新しいことへ挑戦する精神もしくは柔軟な思考を持っておら

れるのではないかという仮説と意図も含んでいた。

2006 年 12 月 1 日よりオリジナルのウェブサイトにて撮影したインタビュー動画の配信を開始した。配信が始まってしばらくした頃、ある研究者のインタビューに、組織にアルバイトで関わっていた学生のインターン生が取材に同行した。撮影が終わったあと、振り返りで気づいたことや感想などを聞いてみると、研究者の研究以外の個人的なお話が面白かったという感想があった。研究者図鑑は当初、異なる分野の研究者を視聴者ターゲットとして想定していた。そのため話してもらう内容も研究の話をしてもらっていた。筆者自身もインタビューをする中で、話を聴いていて面白いと感じる部分も、やはりパーソナルなところの面白さも感じていたこともあり、思い切ってその要素を大きく取り入れてみることにした。具体的には、研究の内容を表す３つの言葉から、『現在・過去・未来』という時間軸にシフトすることで、研究の紹介からライフストーリーが引き出される枠組みに転換した。

当初は関西圏でインタビューをしていたが、徐々に地方でコーディネートをしてくれる人が現れるようになった。その最初の地方遠征が信州大学であった。信州大学では産学連携の組織の担当者より大学に所属する研究者数名の紹介を受け、インタビューを行った。その際筆者とコーディネーターとなった人だけでなく、その組織にインターンとして関わっていた学生も取材の現場に同行した。そして撮影が行われる段階になり、オープニングのテーマを筆者が歌おうとしたところ、そのコーディネーターの人から「みんなで一緒に歌いましょう！」という提案があった。そこの現場にいた研究者を含めた全員で何度か歌の練習をし、そして本撮影でも全員で歌って撮影を開始した。すると、明らかに場の空気が柔らかくなり、研究者の表情も明るく素の人柄が引き出されていた。この経験を受けてその後の収録では、その場にいる全員で歌を歌うという形に変わっていった。

365 日毎日続けるための最適化

映像収録の前の打ち合わせは、テスト段階で解説したように当初は研究のキーワードに対して、研究者に解説してもらい撮影の流れを決めるという内容で 15～30 分程度であった。しかし、3 つのフレーズを「現在・過去・未来」のライフストーリーにシフトした頃から、収録前の打ち合わせの段階で研究者の研究だけでなく、その研究をしている原体験や将来実現したい夢や構想、さらには趣味や興味関心など全人的に聴いた上で筆者が 3 つのフレーズに編集し、本人と細かい表現を詰めた上で決定するというプロセスに変化し

た。そのことで、打ち合わせの時間は徐々に長くなり、最終的には 1 時間半から 2 時間ほどかけて引き出したものをまとめるという形になった。もう一つの要素としては、収録前打ち合わせ時の筆者のインタビュアースキルの熟達というのもあった。筆者はもともと学部の卒業論文で数名にインタビューした程度の経験しか持っていなかったが、50 人を越えたあたりから引き出せる話の深さや広さが実感として変わってきた。そのこともインタビュー時間が伸びた要因として考えられる。

1 日一人のペースでインタビューを行うためには、次の条件が必要であることがわかった。①取材対象者についてじっくりと下調べをする時間がない。②いつどこで取材対象者が見つかったとしてもすぐに撮影ができる形が必要。③撮影したものを事細かに編集することはできない。まず①は、「現在・過去・未来」という枠組みにシフトし、ライフストーリーをメインにしたことによって、専門的な研究の内容も、その人のヒストリーの文脈で理解し、紹介することができるようになった。具体的には、なぜその研究をしているのかという原体験やきっかけ、それはほとんど誰しもが理解や共感ができるものであり、同様に夢や目標もそうである。②の「いつでもどこでも」というのは、機材は一般的に市販されているホームビデオのカメラでいい。フリップも画用紙や色のついた印刷用紙などどんな紙でも可能。ペンで手書きをする。副次的な効果として、手書きによる手作り感という演出にもつながっている。③の編集がいらないというのは、予め 2 時間近く事前に打ち合わせすることによって、その内容を 3 つのフレーズにまとめることによって、一定の編集になっている。また、フリップを見ながら話すことによって、話の流れが脱線してもすぐに戻れるようになっている。収録前打ち合わせを通じてどのような流れで話をしたらいいのか大まかな流れがインタビュアーもインタビュイーもお互いに見えているため、結果的に一発撮りを可能としている。それは同時に編集が少ないことによって、あたかもその場で話を聴いているかのようなライブ感の演出にもつながっている。このように、1 日一人いつでもどこでも撮影ができるフォーマットが完成したのである。

半構造化された質問項目

研究者図鑑を実施してみて、確立された収録前打ち合わせ時のインタビュー質問など収録前打ち合わせはいわゆる半構造化のインタビューで行っている。この構造の部分は、スタート時から徐々に変化をしていった。当初は研究の内容、強みや独自性、構想と課題といったざっくりとしたもので、且つ研究の内容の範囲であった。次に前述したように、

研究紹介から研究者紹介にシフトしたことにより、現在・過去・未来の時間軸での構造になった。その中の現在に当たる部分が「研究の内容やその独自性」。過去の部分が「その研究をするようになったきっかけ」。未来は「将来実現したい夢や構想」という形に設定をして取り組むようになった。その形になってしばらく取り組んでいると、引き出される情報のパターンが増えていき、それらを整理する中で特に効果的だった問いをベースにさらにひとつひとつの細分化と具体化を進めていった。ただし、決められた問いに縛られるのではなく、相手からの話に合わせた新たな問いや対話を通じたインタラクションから生まれる相互作用によって引き出される話も大切に考えていたため、構造化をしすぎないということも一方で意識をしてバランスを取った。そうして、構築された質問の項目は以下の通りである。

１．現在

【研究内容】

（仕事、活動の概要、今一番力を入れていること、具体的な手法、事例など）

【切り口、強み、PR ポイント】

（自分独自の視点だと思うところ、自分の強みだと思うところなど。）

【面白さ、やりがい】

（そのテーマについてでも、仕事・活動自体でも可。）

２．過去

【原体験、ライフヒストリー】

（人生の原体験、原風景。どんな子ども時代・学生時代を過ごしたのか？）

【紆余曲折、転機、成長、成功体験】

（現在に至るまでに苦労した事と、どうやって乗り越えたのか、一番の成功体験は？）

３．未来

【将来の目標、夢】

（具体的な構想から、ビジョンベースの漠然としたものでも可。）

【実現のための課題】

（解決したい課題。乗り越えたい壁。）

４．その他

【趣味、興味関心など】

（その他、自分を語る上で外せないテーマ、活動などがあれば。）

【視聴者へのメッセージ】

（このような人と一緒に取り組んでみたい。このような技術を探している。告知など。）

【　　について】

（カスタマイズ項目。上記以外で特に聞いてみたい話、特定のテーマに関する話など。）

第４項　　研究者図鑑からの気づき

研究者図鑑の実践を通じて浮かび上がってきた研究者に対するインタビューにおいて重要なポイントを、可知・手塚・西尾（2010）は、以下のような 2 点にまとめた。

「論文には出てこない情報」が視聴者の共感を呼ぶ

我々がインタビューにおいて最も重要視しているのが、「論文には出てこない情報をいかにして引き出すか」ということである。具体的には、「研究者の内なる興味関心」と「将来の研究構想」の 2 点を特に引き出したいと考えている。

多くの研究者の場合、研究のモチベーションは何ですか、と聞くと、「よりよい社会の実現」や「人類の未来に貢献する新技術の開拓」といった話がまず出てくる。これは例えば、その 研究者が執筆する論文のイントロダクションに記載されている表現であることが多い。しかしながら、より注意深く研究者の話を聞いていくと、大抵の場合、そこにはもう少し違ったモチベーションがあることに気付く、例えばある微生物の研究者は、微生物の変わった特性に惹かれて研究を始め、「毎日顕微鏡越しに微生物を観察するのが楽しくてたまらない」のだという。また、ある有機超伝導物質の研究者は、自分が超伝導物質を研究するのは、「電気抵抗がゼロという状態がどうしても感覚的に納得できず、それを自分なりに理解するため」だと語った。インタビューを続ける中で、ほとんどの研究者が、そのような非常に個人的な興味関心、素朴な好奇心とも呼べるものを、研究を行うモチベーションの根底に持っていることが分かってきた。もちろん、単に興味のあることを追い求めることが研究者の使命では無い。しかしながら、そのような興味関心が、長時間にわたる実験や、複雑なデータの解釈といった困難な場面においても研究を継続できるだけのモチベーションを与えていると我々は考えている。 また、コミュニケーションの原点は共感であるが、このような個人的な興味関心を研究者自身に語ってもらうことによって、

視聴者の共感を得ることができるのではないだろうか。

インタビューを通じたコミュニケーションの効果と相互理解

研究というものは、何が真実なのかということを客観的な視点から徹底的に追求する行為であり、 その過程の中には、たった 1 人で部屋に閉じこもり、試行錯誤や熟考を重ねる時間が存在する。一般に研究者というと、そのような孤独な存在というイメーシが圧倒的に強く、科学技術コミュニケーションの重要性も、研究者のそのような態度への懸念が発端の一部になっていることもあろうかと思われる。

しかしながら、Researcher Zukan の活動を通して感じるのは、研究者は、自分の研究をたくさんの人に知ってほしいという潜在的な欲求を少なからず持っているということである。加速器開発の研究を行うある研究者にインタビューを行った際、話が盛り上がり、撮影後、インタビュアーは研究者の家に招かれ、明け方まで研究について語り明かしたという話がある。これ以外にも、はじめのうちはあまり乗り気に見えなかったものの、インタビューの打ち合わせを始めたとたんに目の輝きが変わり、撮影後も場所を変え、引き続き研究について議論を続けたという話を、我々はこれまでにインタビュアーから幾度となく聞いてきた。それはカメラの向こうに存在する視聴者だけなく、インタビュアーに対しても、自分の研究を知ってほしいという研究者の潜在的な欲求が顕在化したものであると思わずにはいられない。また、それは、インタビューの主要項目である「研究者の個人的な興味関心」や「研究の将来構想」が、専門家や非専門家を問わず共感可能なテーマであり、インタビューの現場においては、専門家、非専門家という垣根を越え、インタビュアーとインタビュイーとが 1 人の人間として対等なコミュニケーションを実現していることを示しているとも思えるのである。

そして、このような研究者の欲求を引き出す存在として、非専門家として研究者に質問をぶつけるインタビュアーは、大変重要な役割を担っていると思われる。

（可知・手塚・西尾 2010：137-38）

これらは研究者へのインタビューについてのものであるが、研究者に限らず「表には出てこない情報」の中に、広く共感につながるその人の価値観や本質が隠されており、それを引き出し発信することの意義は共通している。取材対象への共感や深い相互理解につながるコミュニケーションの手法として、この ZUKAN インタビューは一定の効果がある

と考えられる。

第５項　　ZUKAN インタビューの体系化

多様な図鑑への展開の構想

最終的に 300 日で 300 人の研究者の動画での紹介を行った。NEDO フェローシップとの契約期間の関係で筆者の研究者図鑑の担当は終了した。その後も複数名インタビュアーとして 1 日 1 人ではなくなったが、継続的にインタビューを行っていたが、組織の運営の方針等もあり、現在は更新していない。研究者図鑑をやっている中で筆者が強く感じるようになったことは、“人”の情報は専門性や価値観、偏見など、人が表層的に持っている意識の壁を自然と乗り越え、多くの人の理解や共感を生み出すことができるということである。もともと、産学連携のプロジェクトに携わったのも、多様な専門知を集積した地域活性に関心があったからである。異分野のネットワークを通じた新しい地域や社会の仕組みに関心を持って取り組んできた。研究者図鑑を行ったことによって、そのベースとなる要素やそれを引き出し形にする手法を構築することができた。

研究者図鑑で多くの研究者と接している中で、産学連携や異分野融合の困難さの根底にある問題が少しずつ見えてきた。その問題においては、まず使用している言語の違い、次に、分野やセクターごとの重視する価値観の違い、そして、自分の分野から外に出て新しい世界を受け入れることへの恐れといった要素が複合的に絡み合っている。逆に、上手くいっている人の話を聞くと、担当者同士の理解と共感。信頼関係がしっかりと築き上げられていることが共通点として見えてきた。その共通点を意図的に実践していく手法として、『人』にフォーカスをしたインタビューに可能性があるのではないかと考えた。例えば、分子生物学の分野でバイオテクノロジーの研究をしている研究者もホームページなどの研究紹介だけを見ると、その分野の知識がないと取り組んでいることの内容や意義を理解することは難しい。それ以前に理系アレルギーや違う世界の言葉に対しての拒否反応を起こす可能性もある。しかし、その研究に取り組んでいる研究者の原体験として、幼少期に自然豊かな地方で、川で魚を採ったりして遊んで育ってきたが、ある頃から川の水質汚染が進み、また、様々な開発などもあり、そうした自然環境というのが徐々に失われていくことに問題意識を感じ、少しでも自然環境の修復や生物の多様性の保全のために水質を改善する研究としてその分野を選んだというエピソードがあったとする。すると、豊かな自然を取り戻したいという思いは専門分野に限らず、共通して理解や共感のできる価値観であ

る。そして目指しているビジョンは同じであり、そこに到達する道を研究者として選んでいるのか、官僚を選ぶのか、企業を選ぶのか、NPO を選ぶのかという手段の話に変換される。つまり、ライフストーリーの文脈の中で研究や取り組みを紹介する形をとることで、これまで伝わらなかった、場合によっては拒否感を与えていた人たちにも自然な流れで伝えることができるのである。

実際に研究者図鑑は、学術の世界に関わりのある人だけでなく、まちづくりなどに取り組む学生や後述する札幌人図鑑のインタビュアーになる当時のラジオパーソナリティーなど、これまで科学的なトピックに関心がなかったような人たちにも視聴されていた。つまり、人にフォーカスを当てると境界線を越えられるということの体感的な確証を得た。そこで、研究者に限らず多様な職業、専門、年代の人々をインタビューし、地域やコミュニティごとの『●●人図鑑』を立ち上げることを意識するようになった。

ノウハウの体系化およびスキルの指導

NEDO フェローシップ終了後、先述の 100 人委員会事務局と並行して、2009 年の 10 月から設立したばかりの一般財団法人地域公共人材開発機構（以下 COLPU）（URL 5）にインタビュー担当コーディネーターとして着任した。COLPU では地域公共人材のスキルの一つとして、インタビュースキルを設定し、そのインタビュースキルの指導を筆者が担当した。また、COLPU は京都府の緊急雇用対策事業と連動し、地域の現場で新たなキャリアを築いていきたいと考えている人材を 1 年間雇用し、業務として地域公共人材育成の研究プログラムを受講してもらい、次の 1 年後にそれぞれのステップにつなげていくという事業を 3 年間実施していた。そのプログラムの中に、地域公共人材として地域の中の多様なステークホルダーの取り組みや背景を理解し、人と人をつなげる役割を担えるスキルを身に着けてもらうことを目的として、インタビュー講座も組み込まれていたのである。

まず、COLPU では新たに地域公共人材図鑑というブログサイトを立ち上げた。最初は筆者が何名かインタビューを行い、地域公共人材図鑑のコンテンツの素地を構築した。また、その取材にプログラム受講生を同行させて、いわゆるシャドーイングとして取り組みのプロセスを学んでもらった。ここでの取材対象者は、タイトルには無いが、京都府内の地域の現場で活躍をしている人材である。例えば、環境 NPO の代表や行政のまちづくり担当者、地域情報を発信している企業の経営者、地域でカフェを開いている人など。シャ

ドーイングと並行して、インタビュー講座を開催し、インタビューについての基礎的な知識、それから受講生同士の相互インタビューをして演習形式での技術の伝達を行った。インタビュースキルの体系化については、COLPU にジョインする以前に友人の運営していた、海外への旅を通じた学びのプログラムの事前講座として、旅先の人へのインタビューできるようにという目的で開催されたインタビュー講座など、何度か単発のインタビュー講座を開催していく中で体系化できてきた。地域公共人材図鑑では、京都府各地の非常に多様な分野、職業、地域のキーパーソンを合計で 150 人以上インタビューを行ったうえ、受講生たちの有志で取り組みを書籍にまとめ出版された。

地域公共人材図鑑の取り組みを通して気づいたことは 2 つある。それは研究者図鑑の時とは対象者が異なることと、初めて講師としてインタビュースキルを教える側に立ったという観点からである。まず 1 つ目の対象者については、対象者が研究者の時は、社会に対しての思いというのはもちろんあったが、個人の知的好奇心に突き動かされて研究を行っている人が多かった。その知的好奇心に触れる楽しさというのがあった。対象者が地域公共人材では、やはり社会課題へのほっとけないという気持ちや、地域に対する地域愛といった思いに突き動かされて活動している人が多い。その人々の志や情熱に、大変感銘を受けることが多かった。両者に共通していることは、一人ひとりが持っている前向きな思いやその思いをベースとした行動により自分ごとで生きている人の存在への気付きである。日々暮らしていると、テレビのニュースなどでは、様々な事件やスキャンダラスなニュースが非常に目立っている。また、何かに挑戦している人を紹介している番組もあるが、何かしら既に有名な人やニュース性のある何か大きな成果を出している人に限られている。しかし、実際は自分たちの身近な地域や組織の中にもとても魅力的な人材は多く存在している。こうした既存のマスメディアでは、取り上げられない人材を一人ひとり丁寧に拾い集めてストーリーを引き出し、見える化するメディアの社会的意義というのを改めて実感した。

次に、講師として、他者にインタビューを実践してもらうということを通じて、まず自分の無意識で行っていた行動を強く実感した。例えば、相手の話の聴き方や、相手の話を受けての問いの立て方など。そうしたものを改めて人に伝えるために、言語化を行い、暗黙知の形式化につなげることができた。もう一つは、やはり一人ひとりのコミュニケーションの癖やスタイルは異なっており、人それぞれにベストなインタビューの在り方は違っているということ。そうした違いを踏まえてその上で共通して言えることは、相手の話を

楽しんで聴くということの大切さが第一にあるということに至った。

この経験を通じて体系化されていった ZUKAN インタビューの基本コンセプト（心構え）、フォーマット（手法）、インタビュー（問いやスキル）については次章で述べることとする。

第２節　ZUKAN インタビューの詳細

以上のような「研究者図鑑」での試行錯誤、各地域での実践の蓄積を通じて、ZUKAN インタビューの可能性を見出し、研究者に限らず、多様な分野、地域で活躍する人たちを紹介するインタビューの形を模索してきた。本節では、それらの中で構築した ZUKAN インタビューを行う上の手順やビジョン、実践のベースとなる ZUKAN インタビューの設計思想を述べる。

第１項　手順

ZUKAN インタビューは、図のような手順でサイクルを回して取り組んでいく。以下、一つ一つのプロセスについて詳細に解説する。

図 7：ZUKAN インタビューの手順とサイクル（筆者作成）

①　日程調整と事前準備について

取材対象者と日程および場所を調整する。先方の都合の良い日時と場所を聞き、収録前打ち合わせとインタビュー動画撮影をあわせて３時間程度空けてもらえる日時で決定する。場合によっては収録前打ち合わせと収録の日を別にすることもある。打ち合わせについては話しやすい場所、多くの場合は事務所や研究室、カフェ、会議室などが多い。収録場所については、活動の現場やお気に入りの場所など取材対象者とゆかりのある場所を考えておいてもらう。

同時に、取材当日までにする事前準備が２つある。１つ目は、取材対象者やその人の専門分野についての事前調査を行う。一般的なインタビューでは、特に研究者を対象としたものの場合は、入念にインターネットや文献などを用いて下調べをしておくことが重要とされている。しかし、ZUKAN インタビューの場合はそこまで重要視しない。その理由は 3 つある。(1)1 日 1 人配信などのように数のインパクトを重視することが多いので、事前調査を入念にする時間的余裕が無い。（2）現在・過去・未来のライフストーリーの文脈で聴くため、完全に専門性を理解できていなくても、相手のストーリーを引き出し、コンテンツを作成するのに充分な情報を集めることができる。および（3）素人目線を残すということである。事前調査をしすぎると、専門的な用語やその人独自の背景に対して自分が分かっている話はスルーしてしまうリスクにもつながる。特に映像では、後で細かく言葉を振り返ることはしないので、撮影の段階で専門外の人にも伝わるようなコンテンツにする必要がある。適度に素人目線を残しておくことも、良いコンテンツを作るために優位に働くのである。

以上の 3 つの理由から、ZUKAN インタビューにおいては、事前調査は可能な時間の範囲で、主にインターネット上の情報を中心に事前調査を行う。ただし、取材対象者は時間を空けてインタビューを受けてくれているという意識は常に持ち、相手に対して失礼に当たらないように知識の取得と丁寧な応対を心がけることは大切である。また、研究や活動に絞らないということは、相手の心の中に深くアプローチをし、話を引き出す必要がある。そのプロセスにおいては、幅広い知識や経験がある方が引き出せる情報の量と質に大きく影響する。２つめは機材や道具の用意である。機材は、ビデオカメラ、マイク、三脚。道具は、パソコン（ノート）、キーフレーズと名札用の色紙とボード（スケッチブックでも可）、水性マジックである。ビデオカメラは市販の一般的なカメラで良い。最近であればスマートフォンのカメラでも充分なクオリティのものが作成で

きる。ただし、話者の声がしっかりと入るよう音声まわりは気をつけたい。そのためマイクの接続ができるビデオカメラが望ましい。使用場面等は以降のプロセスで説明する。

② 収録前打ち合わせ

ここからは取材当日のプロセスになる。事前に相手と調整をしていた日時と場所に訪問する。挨拶の際に、いきなり本題に入るのではなく、その場所への感想やその日の天気などの話でも良いので少し雑談を挟むことで、ざっくばらんな空気をつくることを心がける。そして、席についたらまず、自分が取り組んでいるインタビュー企画の趣旨や収録までの流れなどを説明しておく。場合によってはサンプルのインタビュー動画を見せてイメージをつけてもらうことも効果的である。

打ち合わせは、前述した研究者図鑑と同様に取材対象に合わせて用意してある質問項目をベースに相手の話に合わせて自然な流れで説明していく。はじめは現在の研究もしくは活動について話をしてもらうところから入る。詳細は前節の質問項目にある。重要なのは相手の話を聴きながら、いかに詳細にメモを取れるかである。後ほど 3 つのフレーズにまとめる際に、文字情報を編集しやすいようパソコンでの速記メモは有効である。メモを取る時は、次のキーフレーズに使えそうな言葉や映像でここはぜひ話してほしいと思う内容が無いか、アンテナを立てておき、そうした話があった場合は、そのメモに星印や太字など分かりやすいように印をつけておく。打ち合わせは対話型で行い、相互理解が深まるように心がける。時間としては 2 時間程度となる。

③ ３つのキーフレーズ作成

収録前打ち合わせで話された内容から、収録で話してもらう内容を圧縮した３つのフレーズを作成する。この３つは大まかには現在・過去・未来の３つを基本としているが、人によってはよりフォーカスしたいトピックがある場合は柔軟に対応する。収録前打ち合わせのメモで印をつけておいたキーフレーズに使えそうな言葉や話してほしい内容を軸にして、３つのキーフレーズの核になる情報を集めていく。それらを一言で表すと何になるかということを中心に念頭において、キーフレーズ案をいくつか書き出していく。最終的にインタビュアーの中で作成したキーフレーズ案を本人に提示し、その内容で問題が無いかということと、キーフレーズの細かい表現を整えて完成させる。

④　映像収録

まず収録に使用するものを準備する。

(1)　キーフレーズの書かれたクリップボード

(2)　ネームプレート（本人の肩書きや名前）

(3)　機材のセッティング（三脚、ビデオカメラ、マイク）

まず完成した３つのフレーズをクリップボードとなる色のついた紙に記入する。次にカメラの機材を準備している間に、ネームプレートを本人に書いてもらうと効率が良い。また、手書きの方が本人の人柄が出るという副次的な効果もある。機材のセッティングについては、まず一番重要なのは音声である。静かな室内であればカメラの内蔵マイクでも問題は無い。しかし、少しでも現場感を出すために外や実験機材などがある場所等で説明を行う場合は、ピンマイクが理想的。ピンマイクを用意するのはハードルが高い場合は、市販の指向性のあるガンマイクもしくはズームマイクでしっかりと向きを設定し、予め音の確認を怠らなければ話声をしっかりと拾うことができる。もう一つ重要なのが、撮影する背景などの演出というのも、映像のクオリティを高める重要な要素である。構図はインタビュアーとインタビュイーが二人並んで、腰より上くらいのウエストショットからバストショットが中心となる。また、背景も何も無い白い壁のみというのは極力避けたい。部屋の奥行きが出るような場所の選択、もしくは植物や、取材対象者のゆかりの小物などを横に置くなどして使えるものは何でも使って演出を行う。

準備が整い、撮影の本番に入る。インタビュイーとインタビュアーが二人並び、カメラに向かってではなく、二人で対話をしているところを撮影する。オープニングはインタビュアーとインタビュイーだけでなく会場に居るスタッフや関係者など、協力してもらえる人がいれば、全員で歌って賑やかにスタートする。オープニングの後は、ネームプレートを使ってインタビュアーの自己紹介に続き、インタビュイーの紹介を行う。少しイントロダクションを使って撮影している場所の紹介などもあると良い。続いて、クリップボードをビデオカメラの画面に向けて掲示し、今回のインタビューの話の流れを視聴者に示す。そして１つ目から順番に話を振って、トークを行っていく。最後には本人から何か宣伝したいことがあれば自由に宣伝してもらって終了する。収録時間は短すぎても必要な情報を話してもらえていない場合があり、長すぎても冗長になっていることがある。最適なのは 15～20 分程度が理想的である。オープニングだけカメラテスト

も兼ねたリハーサルを行うが、その後は基本的に一発撮りで撮り直しも必要ない。場合によってはキーフレーズごとに区切って録画を止め撮影することもある。

収録後は、片付けをしながら配信までの流れを説明し、配信サイトに掲載するインタビュイーの情報を所定のデータシートに記入してもらう。また、次の取材対象者を紹介してほしい旨も伝える。

⑤　インターネット上に公開

撮影した動画をカメラのメモリからパソコンへ取り込み、編集を行う。基本的には収録前打ち合わせで入念に流れや何を話すかも設定しているので、最小限の編集で可能になっている。カメラを回した最初と最後のいらない部分や、少し長くなりすぎた場合は最適な長さに冗長な部分をカットする程度の編集は行う。編集が終わった映像はインターネットの動画配信サイトなどにアップロードする。また、動画以外もインタビュイーのプロフィール等を記載したデータシートの情報も配信サイトに掲載する。

⑥　数珠つなぎによる紹介

先程のデータシートには紹介してもらう人の名前や所属、連絡先が記載されている。その情報を元に連絡をとって①日程調整のプロセスにつながる。この際「魅力的な人が面白いと思う人は魅力的」という仮説に則り、出演者や信頼できる知人から紹介された人の中で、取材対象として適しているかどうかなどの選別をしたりはしない。そしてもう一つ、インターネットや冊子などでリサーチした取材対象者へのアプローチである。これは「このような変わった企画に、面白そうと思う人は、新しいものへの感度が高い」という仮説に則り、同様に返信があった人から選別したりしない。これらにより、企画側が意図的に制御することなく、取材対象について一定の質を保ちつつ、多様性を高めることができるのである。

第２項　　目的

ZUKAN インタビューを世に広めたいという気持ちの基底には、現在の社会に対しての「もったいない！」という気持ちである。筆者は研究者図鑑や 100 人委員会などの取り組みを通じて、職業や地域に限らず、社会の中の身近なところに魅力的な人材は沢山存在していると知った。しかし、そうした人達が最大限力を発揮し、そうした人達同士が相互

に連携をして大きなムーブメントを引き起こすことができているかというと、もっともっとポテンシャルを秘めていると考えている。この「もったいない！」は３種類に分けられる。

１　知られていない！

・身近なところに地域や社会を元気にする人材は存在している。

・既存のメディアでは、ニュース性や知名度のある人物でなければアプローチできていない。

２　気づいていない！

・魅力を持った人も、日々の業務に追われて、自分（たち）のことを振り返られない。

・自分で自らの魅力を人に伝わるようにまとめられている人は少ない。

３　つながっていない！

・魅力的な人物、取り組みは点在しているが、つながれていない。

・継続的に人材を発掘してつなげられる存在、場というものが整備されていない。

そこで ZUKAN インタビューでは、①知られていない人物を発掘し、②その人の魅力を引き出してまとめ、③発信して人と人をつなげ、地域のコミュニティを継続的に形成、発展させていくために、「ZUKAN インタビュー」の手法を体系化し、誰もが取り組めるように磨いていきたいと考え、様々な場所で実践を積み重ねている。

インタビューという言葉は非常に幅広い意味合いで使われているが、ZUKAN インタビューでは、インタビューを 2 つの切り口で定義している。まず１つ目は「お互いに」見る “Inter View”。これはインタビューの語源である中世フランス語　「entrevue」の意味（URL 6）をベースとしている。この言葉は entre(＝between) ＋ voir(＝to see) から成り、直訳すると「お互いに見る」という意味であり、そこから転じて相互の関わりの要素が入っている。つまり、一方的に片方の情報を得るという行為を越えて、相手とのインタラクション（相互作用）から意味や価値を見出していく行為であるというところまで踏み込んだ言葉として捉えている。

２つ目に、「自分ごと」を引き出す “Inner View”。これは筆者の造語であるが、表層的な情報だけではなく、より深い目に見えない内面的な情報まで引き出すという考えである。具体的にいうと、まずインタビューで聴いていく内容としては、相手の活動や研究などの情報から入ることがほとんどであろう。相手の取り組みの詳細や専門用語、手段・手法、独自性、成果など時には最先端の情報まで引き出し、それを読者や視聴者に対して分

かりやすく伝える。これは、インタビューが目指す非常に重要な要素である。しかし、これだけあればある程度インターネットの検索や、文献資料などでも得ることができる。将来的には AI でもできるようになるかもしれない。ZUKAN インタビューでは、その奥にある「人」の情報までアプローチをしていくことを重視する。なぜ（Why）？を問いかけていくことによって、その人の取り組みに対して感じているやりがい、きっかけとなった経験、哲学や夢、その時々に抱いた感情、その他趣味や興味関心まで聴き出していく。そうして得られた情報を元に、相手の「自分ごと」を明らかにし、文脈とストーリーをコンテンツの軸とし、多様な人達に対して理解と共感につなげていく。この部分はインターネット上にもまだ掲載されていないものであり、AI が発達したとしても人間だからこそ引き出せる情報でもある。この二つはいわゆる氷山モデルで表現される。前者は海の上に見えている氷の山であり、後者は海面の下に広がる大きな本体である。海の上からではなかなか見ることはできないが、水面下に潜ってみると、表に見えているものよりも、遥かに大きく魅力的な姿を見ることができる。

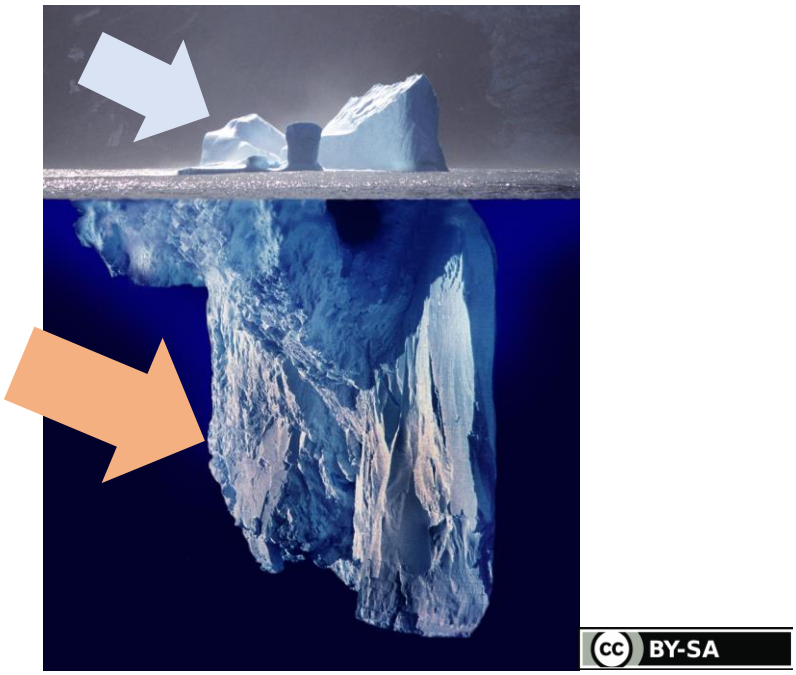

図８：氷山の下を見る Inner View（出典：Uwe Kils and Wiska Bodo (2005), Wikipedia　https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Iceberg.jpg）

時代に限らず、世の中は水面の上に見えているものだけで物事を判断しがちである。そ

れは例えば、職業、分野、業界、国、地域、宗教など自分と異なる山に対してなかなか関心を持つこともできず、場合によってはお互いに敵対視したりしている。しかし、水面の下に広がっている思考や価値観、深い動機や意志、原体験やビジョンなど実は自分と重なり合う情報が沢山存在している可能性があるのである。そうした水面下の情報にアプローチし、コンテンツの形で水面上の人にも伝えていけるのがインタビューという手法なのである。

ZUKAN インタビューは、そうやって氷山の下にまでアプローチした人の情報を、インタビュー映像の形で記録し、インターネット上に蓄積をしていくことによって、有益な人材データベースの構築を目指していくものである。まさに「図鑑」として地域やコミュニティの中の多様な人を知り、自分自身の活動の参考や直接会ってネットワークを構築していく為の社会的インフラを目指している。このデータベースはインタビュアーという第三者により、活動や研究内容の翻訳が行われ、分かりやすく噛み砕かれ、また、原体験や目標、夢、さらには人柄までデータ化されている。

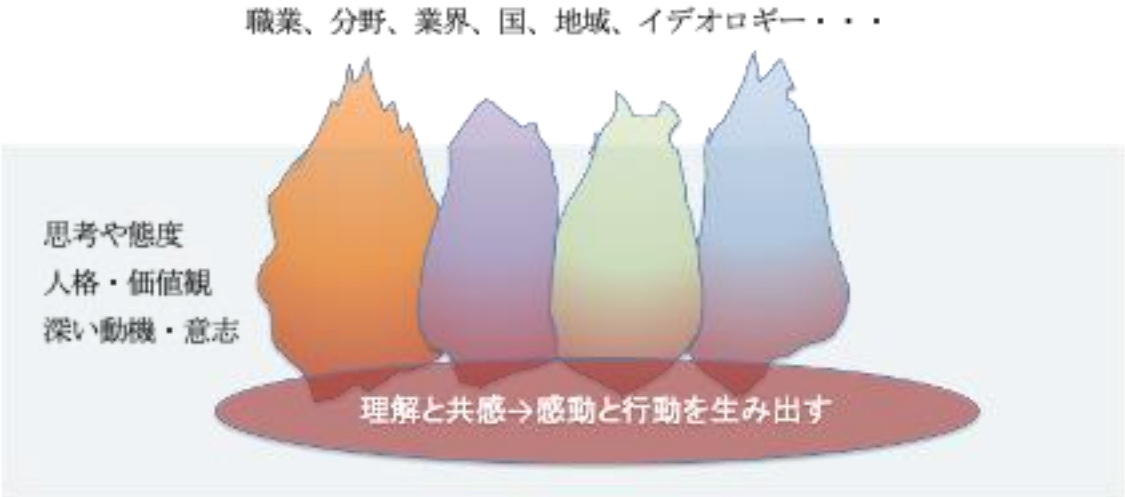

図９：水面下の本体をつなぐ（筆者作成）

第３項　　設計思想

この項では、ZUKAN インタビューの背景にある設計思想について解説していく。2 節で辿ったプロセスや 500 人以上への実践をなど、年月をかけて構築してきたものである。図 10 は、その設計思想を整理し関係性を構造化し、表現した図である。以下、順を追って解説をしていく。

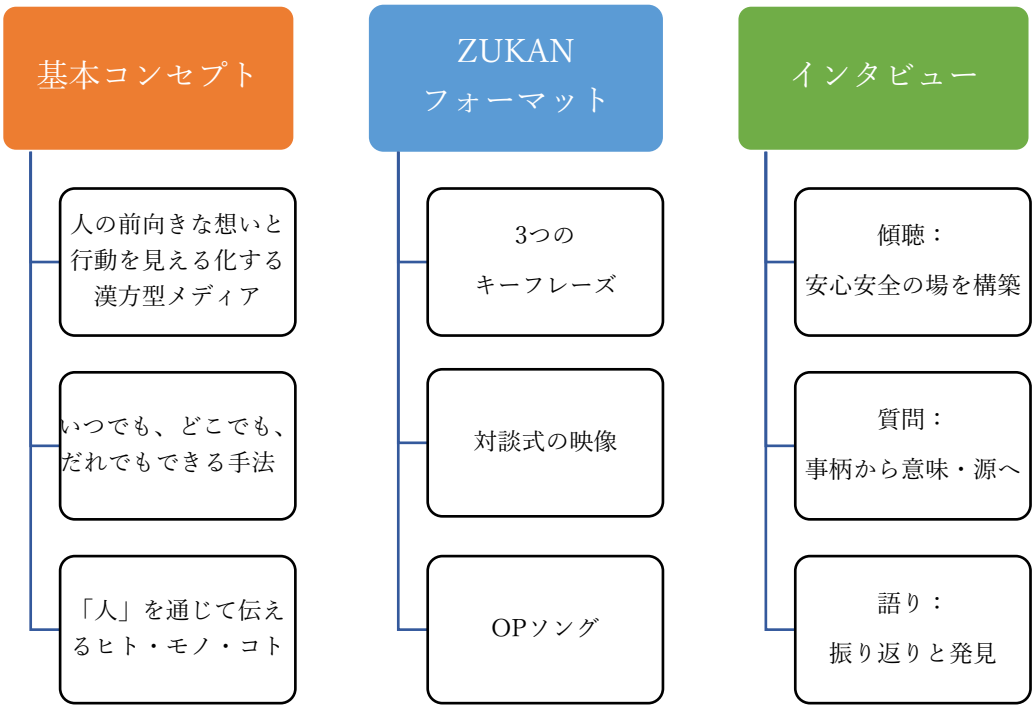

図 10：ZUKAN インタビュー設計思想（筆者作成）

【基本コンセプト】

この ZUKAN インタビューは、単にコンテンツを作成する手段に留まらず、人の情報を映像で発信し、コンテンツが蓄積していく一種のメディアでもある。基本コンセプトは、この ZUKAN インタビューの手法全体に通貫している理念や、この手法を通じて目指したいビジョンのようなものである。コンピューターでいうところの OS のように、このコンセプトの上でプログラムが設計されている。では順番に説明をしていく。

① 人の前向きな想いと行動を見える化する漢方型メディア

地域公共人材図鑑での気づきの中でも述べたように、地域や社会の現場には前向きな思いを持って自ら行動している魅力的な人材が多く存在している。しかし、既存のマスメディアを中心とした商業メディアでは、そうした地域や社会を元気にする存在をひとつひとつ丁寧に紹介していくのは困難である。また、ジャーナリズムは社会に起きている問題や課題について批判的な目で追求していくことも重要な役割でもある。ポジティブな面だけに目を向けるのは難しい。しかし、現在のメディアやインターネット上で目にする情報で

はネガティブな情報とポジティブな情報のバランスが悪くなっているのではないかと考えている。そうした中で、社会の課題にスポットを当てる病原体にダイレクトにアプローチするのを西洋医学型のメディアととらえ、逆に社会の中の前向きな思いや行動を引き出すことで体全体の免疫力を高め健全な状態を維持する東洋医学型のメディアを考案し、そのツールとして漢方型メディアという新しいアプローチのメディアを設定した。

② いつでも、どこでも、だれでもできる手法

専門的な機材や本格的な収録環境などがなくても、一般的に手に入る機材、最近ではスマートフォンでも可能。ペンと紙はどこの文房具店でも、百円均一ショップでも手に入るものである。紹介する人の多様さや紹介できる頻度、場所を選ばず撮影ができることで、地域の色んな現場から届けることができる。地域の権力者や著名人だけではなく、主体的に活動している人を、どの地域でも誰でも紹介ができる仕組みを作ることが図鑑という名前にも即したメディアの構築につながる。こういう図鑑自体が様々な地域や業界や組織で構築されることを視野に入れて設計した。世の中には多くの魅力的な人や取り組みがあるが、知られていないため分断している。そうした人や取り組みを見える化し、いずれはそれを通じて点が線になり、線が面になっていくような形で大きなムーブメントにつなげていきたいと考えているからである。既存のメディアに質で勝つのではなく、数のインパクトで尖らせることで認知度を上げることが肝になる。そのためには、一人でも取り組めて、いつどこで人の情報と出会っても、すぐにアプローチして撮影することができ、そのインタビュアーも特別な機材や技術がなくても、誰でも取り組める形というのを模索したのがもともとの背景である。定型的なフォーマットを使うことで専門家並みのスキルがなくても一定のクオリティのコンテンツを作ることができる。

③ 「人」を通じて伝えるヒト・モノ・コト

研究者図鑑の取り組みを通じての一番大きな気づきは、非常に専門性の高い事柄であっても、取り組む人のストーリーや文脈に乗せて紹介することで、拒否反応を下げ、柔らかく伝えることができるということである。このことは、研究に限らず、世の中でなかなか理解されにくい、もしくは特定のステレオタイプなイメージで捉えられがちな物事についても、同様のことが言える。人々は表面的に見えている違いで判断しがちだが、人にスポットを当てて丁寧に紹介することによって、こうしたコミュニケーションギャップや不要

なコンフリクトをなくし、より人と人が相互に理解し合い協力しあう基盤につなげることを目指している。ZUKAN インタビューでは、「人」にフォーカスをあてて紹介しているが、その語られるストーリーの中に、その人の人柄やパーソナルなヒトの情報はもちろん、研究や活動、分野や業界、製品や成果物などモノ・コトの情報を織り込んで伝えている。

【ZUKAN フォーマット】

ZUKAN フォーマットは、ZUKAN インタビューのオリジナリティの基盤となる部分になる。ZUKAN インタビューの中で主に目に見える形であったり、取り組む際の“型”と言える内容である。主に映像収録のスタイルの特徴をまとめたものとなる。基本的には ZUKAN インタビューといえばこのフォーマットを使ったインタビューであると定義できる。

① 3 つのキーフレーズ

相手から引き出した情報からストーリーを作り 3 つのキーフレーズにまとめ、そのフレーズの書かれたクリップボードを作成する。収録の際も、そのクリップボードを相手や画面（視聴者）に見せながら進めていく。そうすることによって、まずインタビュー相手と自分との間で、話の流れの共有が行われる。そして、第三者であるインタビュアーが、相手のストーリーから重要だと思う話や言葉を使ってコピーライティングのようなプロセスを経て作成するフレーズからは、自分自身について新たな気づき、人生の中で時間的・内容的に散在していた要素が一つの文脈のもとに集約されるような感覚など、自分に対する気持ちを新たにすることができる。さらに、収録の際にはそのボードを見える形で掲示しておくことで、聞き手は話の展開を考えやすく、話し手にとっても自分が何を話そうとしているのか少し脱線した時なども、すぐに本筋に戻ることができる。視聴者にとっても今何について話されているのか分かるため、話が入ってきやすくなる。結果的に大きな編集作業などが必要なく一発撮りでライブ感のある映像とすることができる。

次に具体的に 3 つのキーフレーズを作成するプロセスについて解説する。

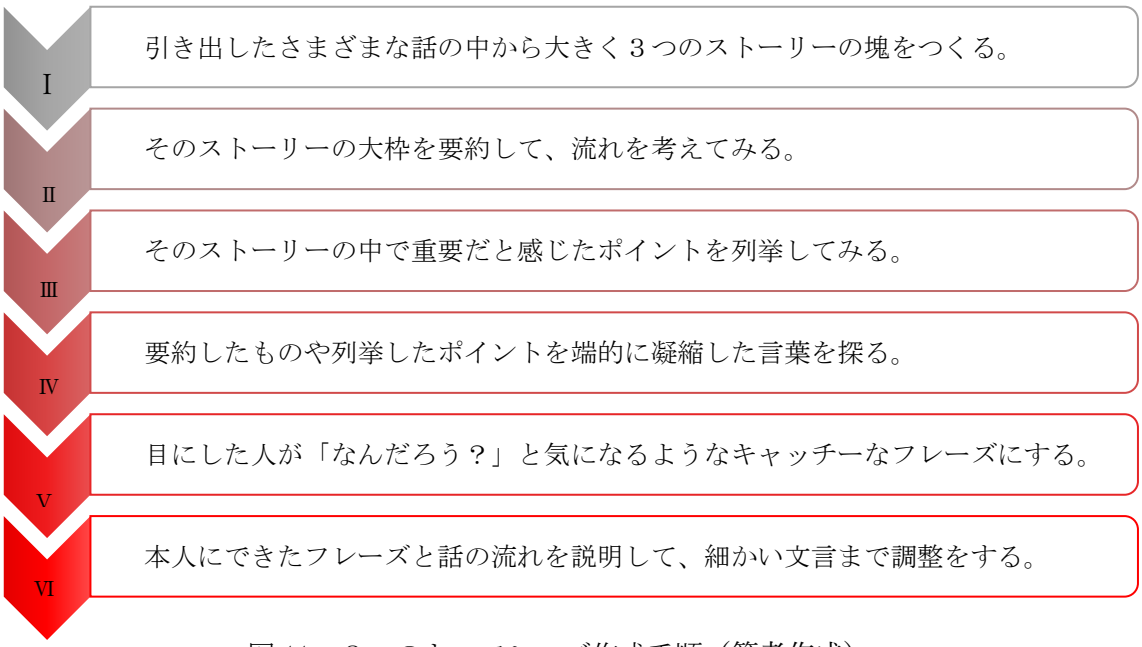

図 11：３つのキーフレーズ作成手順（筆者作成）

Ⅰ. 引き出したさまざまな話の中から大きく３つのストーリーの塊をつくる

まず収録前打ち合わせではその人の取り組みや人生経験など、かなり膨大な量の情報が集まることになる。そのため、最初に大きく３つのストーリーの塊に分けることで少しずつ絞り込んでいく。その３つであるが、以下のような内容をベースにしている。この３つは収録前打ち合わせでも中心に据えている「現在・過去・未来」の流れと対応している。相手の話によっては違う流れにする場合もあるが、このような型があることでまとめる際の迷いを少なくすることができる。

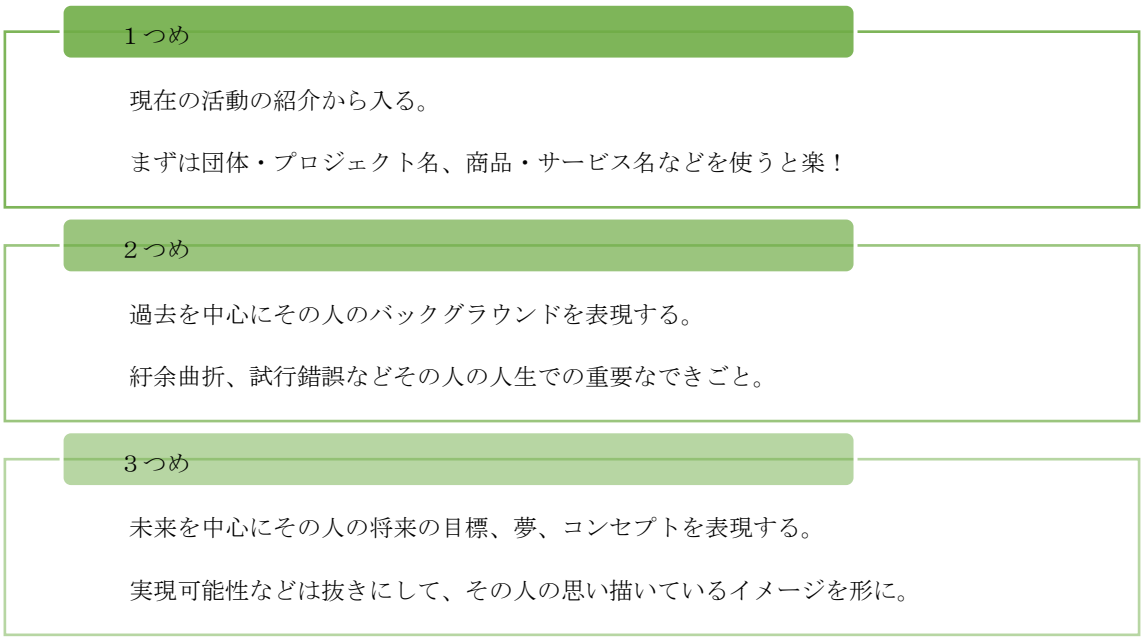

図 12：３つのストーリーにまとめるポイント（筆者作成）

Ⅱ. そのストーリーの大枠を要約して、流れを考えてみる

作ったストーリーの塊をひとまず大枠を要約してみることで、キーとなる言葉を収録前打ち合わせの膨大な情報の中から的確に拾い集めるためのアンテナとなる。

Ⅲ. そのストーリーの中で重要だと感じたポイントを列挙してみる

先程の要約を念頭に収録前打ち合わせの内容の中から重要だと感じたポイント、さらには印象に残った本人の言葉などを列挙していく。その際本人が語った言葉、それは単語だけでなく意図的な言い回しなどにその人らしさが宿っているため、見逃さないようにする。収録前打ち合わせでのメモの段階で、星印などの印をつけておくとこの作業の効率やクオリティが大きく向上する。以下に引き続き例を挙げる。

Ⅳ. 要約したものや列挙したポイントを端的にと凝縮した言葉を探る

２つ目の要約したポイントを骨組みとして列挙したポイントや言葉を組み合わせ、さらに、不要な言葉を削除し、より簡潔な言い回しを探るなどして短い中に文脈が凝縮したような言葉を探っていく。

最初に目に入る情報であるため、目にした人が話を聴いてみたいと思うような、少しで

もキャッチーなフレーズに仕上げていく。 以下にキャッチーなフレーズをつくるコツを列挙する。

・反対の意味の言葉を並べて、ギャップによるインパクトをつける。

・あえて聞き慣れない言葉を使って、「どういう意味なんだろう？」と興味を喚起する。

・難しい内容を柔らかい言葉で親しみやすく表現する。

・経歴などを時系列に並べて、その多様さを強調する。

・イメージ・映像が思い浮かぶような流れをつける。

VI.本人にできたフレーズと話の流れを説明して、細かい文言まで調整をする

最後に作成した３つのキーフレーズ案を本人に提示し、収録で話すストーリーの流れを説明した上で、大まかにこの３つの流れで問題がないか確認する。その上で一つ一つのキーフレーズの内容や細かい文言に至るまで本人が納得の行くものになる表現を共に模索をして完成となる。

② 対談式の映像

インタビュー映像の収録の際には、インタビュアーも画面に映っての対談式の映像で撮影をする。その理由としては、第一にインタビューを受ける人にとって、自分にカメラを向けられながら話をするのは大変緊張し、話したいことがスムーズに話せなくなる可能性がある。特に ZUKAN インタビューが対象としているような地域の中で地道に活動を続けているような人は、メディアによる取材慣れをしている人は少なく、よりその点に関してケアをする必要がある。対談式にすることで、まずインタビュアーとざっくばらんに話をしている様子を、横でカメラで撮影しているというように、フォーカスの当たり方と本人の意識の向き方を少し逸らすことができる。また、カメラを向けられて話をする際には目線の置き場所に戸惑いを感じる人が多い。対談式であれば、目線はインタビュアーに向けるなど、その人が気持ちを少しでも落ち着けられるような形を取ることができる。もう一つは、インタビュアーも入ってインタビューをしている様子をそのまま撮影することで、インタビューの現場感やライブ感の演出にもつながる。ZUKAN インタビューでは、その人物の素の表情や人柄を記録することに重きをおいている。その人の凄さや偉大さを強調するのであれば、それに合わせたカメラワーク、例えばその人を少しアップで下から煽り気味で撮るなど、工夫の仕方は様々あるが、敢えてそうしない。なぜそうするかの理由と

して、ZUKAN インタビューの大きな目的のひとつとして、主体的に行動をできる人を少しでも増やすというビジョンがある。紹介する人物の偉大さや凄さに強調しすぎると、見た人は凄い人が居るなぁという感動や共感を生み出すことができるかもしれないが、自分もやってみよう！もしくはこの人に会いに行ってみよう！というような行動につながりにくいのではないかと考えるからである。

③　OP ソング

映像のはじめにいわゆるジングルの代わりに、決まったメロディーのオープニングソングをインタビュイーとさらには会場にいる人達と一緒に歌ってスタートをする。歌の歌詞は、「●●（収録場所）からお届け、〇〇人図鑑」となっており、最初にその日はどこで撮影しているのかとう場所を知らせるようになっている。全員で歌うようになった経緯については研究者図鑑の成り立ちの項で述べた。オープニングソングを一緒に歌うことにはいくつかの意図が含まれている。まずアイスブレイキングとしての効果である。先程も述べたように ZUKAN インタビューが対象とする人の多くは、メディアによる取材慣れをしていない人も多い。それだけでなく人前で自分の話をするという機会すらほとんど経験が無い人も多い。対談式でカメラの意識を少し逸しているとはいえ、自分のことを上手く話ができるかどうか不安を感じ、緊張をしている状態である。最初にインタビュアーと一緒に少し難しいメロディーに乗せて歌を歌うという行為自体が、簡易なアイスブレイキングのワークとなり、最初に自然な形で声を出すということ自体の効果も含めインタビューの本編に少し心がほぐれた状態で始めることができる。もう一つは、はじめからインタビューが始まってしまうと堅い印象のまま話が進んでしまう。最初に歌を歌って少し恥ずかしそうにはにかんだり、楽しそうな笑顔が入ることで、その人の素の人柄や自然な表情を伝えることができる。

【インタビュー】

ここでいうインタビューとは、収録前打ち合わせと映像収録時の二つのプロセスが該当する。ZUKAN フォーマットは主に収録の型であったが、こちらは主に収録前打ち合わせのノウハウであると言える。ただし、同様のスキルは収録時にも必要なものとなっている。ここでは基本的に収録前打ち合わせでの関わり方について述べる。ちなみに以下の３つは、既存の理論や手法を組み合わせ、ZUKAN インタビューに最適化したものとなっている。

① 傾聴：安心安全の場を構築

この傾聴はカウンセリングやコーチングなどで広く使われている傾聴技法、もしくはアクティブ・リスニングの理論と技術を援用している。インタビューと一言で言っても、非常に幅広く使われており、その使われる目的や媒体などによってアプローチの傾向は大きく異なっている。例えば、ジャーナリズムの世界でのインタビューは、社会の出来事や課題、さらには真実を明らかにするため、鋭く切り込んでいく必要がある。その場合には時に強い言葉や取材者の引き出したい情報が強調される場合もある。ZUKAN インタビューでは、主体はあくまで紹介する相手にある。その人の思いや行動、人柄をいかに引き出して記録するかを重視する。そのため、こちらが何を聞きたいかよりも、相手が何を伝えたいかに重きを置く形となる。そうしたインタビューでは、相手の緊張や警戒といった気持ちを如何にしてほぐし、安心して自分の心や頭をオープンに自分のストーリーを語ってもらえるかが肝となる。そうしたインタビューの場合は、聞く側の姿勢や聞き方のスキルが最重要な要素となる。

話を聞くにも以下のような三種類がある。

1. 聞く→「音」としてのキク
2. 訊く→「尋ねる」意味でのキク
3. 聴く→「積極的な姿勢」でキク

ZUKAN インタビューでは３の聴くに重きを置く。筆者がインタビューをする際に一番重視している姿勢は「聞きたいこと」を「聞く」のではなく、「相手が伝えたいメッセージ、心に抱いている想い」を「聴く」という姿勢である。そのベースとしている手法で、「もっと話したい、もっと聞いてもらいたい」と思わせる聞く側の態度、聞き方である「積極的傾聴」（アクティブ・リスニング）[12]について整理をする。米国の臨床心理学者カール・ロジャースが提唱した、相手の言葉をすすんで“傾聴”する姿勢や態度、聴き方の技術を指す。受容の精神と共感的理解をもって相手の話に耳を傾け、その言葉の中にある事実や感情を積極的につかもうとする聴き方であり、聴く側は話し手とともに感じ、考え、問題の本質を明確にしていくプロセスを共有することで、話し手が自ら解決できるように

[12] Rogers & Farson が 1957 年に同タイトルの論文で「アクティブ・リスニング」という用語を作り出した。その後体系化され、カウンセリング、トレーニング、および紛争地での課題の解決などに使用されている。

支援する。

《傾聴の基本的態度》

来談者中心アプローチの提唱者である Rogers.は、傾聴の基本的態度として、次の３つを示している。

(1)　純粋性（自己一致）

聴き手自身が心理的に安定していて、ありのままの自分を受け入れていること。防衛的になったり、虚勢的にならず、率直な気持ちと態度で話し手に向き合えていること。

(2)　受容的態度

批判や非難の目を向けることなく、受容的な態度で話し手に接すること。話し手をひとりの人間として大切に思いやること。

(3)　共感的理解

話し手がどのように感じているか、考えているかを、できる限り正確に知ろうとすること。カウンセラーが理解したことを相手に伝えること、表面的に同調や同感するのではなく、話し手の「ものの見方・考え方」にそって理解しようとすること。（木村 2010：209）

《信頼関係（ラポール）と２つのスキル》

カウンセリングの成果を左右する要素として、3 つの基本的態度をもとに話し手と聴き手の間に築かれる信頼関係（ラポール：Rapport）の構築をあげている。しっかりとしたラポールが築けると、話し手はカウンセリング関係の中で、安心して自由に振る舞ったり、素直な感情を表現したりできるようになるとしている。ラポール構築のための具体的な技法として、以下の「かかわり行動」と「基本的傾聴の連鎖」があげられる。

(1)　かかわり行動

かかわり行動とは、聴き手の積極的な傾聴の姿勢を話し手に示す手法の総称で、具体的には以下の４つのことをいう。

1.　相手に視線を合わせる
2.　身体言語（身振り手振りや姿勢など）に配慮する

3.　　声の質（大きさ、トーン、スピードなど）に配慮する

4.　　言語的追跡をする（相手が話そうとする話題を安易に変えたりせずについて行く）

（2）　基本的傾聴の連鎖

基本的傾聴の連鎖とは、かかわり行動を土台にして、話を深めて行く手法の総称で、以下の４つのことをいう。これらは、連鎖的に使うことで効果を発揮する。

1.　閉じられた質問、開かれた質問

適度に質問を交えることで、話を深めて行くことを意図する。質問は、閉じられた質問（クローズド・エンディッド・クエスチョン）と開かれた質問（オープン・エンド・クエスチョン）に分けられる。前者はイエスかノーかで答えられるもの（例：今朝は朝食をとりましたか？）であり、後者はイエスかノーかでは答えられないもの（例：今朝の朝食はどうされましたか？）のことである。閉じられた質問は答えやすさはあるが、話が展開しにくいという面もある。反対に、開かれた質問は、話が展開しやすいという利点があるが、連発すると問われた側に負担を感じさせることもある。したがって、両方を上手く使い分けるとよいとされる。

2.　クライエント観察技法

話し手の言いたいことをしっかりと理解するためには、相手の様子を慎重に観察する必要がある。クライエントの様子を観察する際のポイントは、言語的コミュニケーション（バーバルコミュニケーション）と非言語的コミュニケーション（ノンバーバルコミュニケーション）の両方に目配りすることである。言語的コミュニケーションとは、会話のセリフとして具体的な言葉で表わされている内容をいい、非言語的コミュニケーションとは、身体言語（身振り、手振りなど）や声の質（大きさ、トーンなど）のように言葉以外で表現されるレベルのものをいう。両方の変化や矛盾などに気づくことが、話を聴く上で重要な注意点といえる。

3.　はげまし、いいかえ、要約

はげましとは、うなずいたり、相づちをいれるなどして、話し手の発言を促すことをいう。いいかえとは、相手の用いた言葉を別の表現に置き換えることをいう。要約とは話のエッセンスを確認することをいう。こうした技法は、会話を活性化したり、焦点を明確化する働きをする

4. 感情の反映

これは、話し手が「今ここ」で感じている気持ちに焦点を当てていく技法である。例えば、「働きがいを感じて、嬉しく感じているんですね」、「上司に認めてもらえないので、がっかりしているんでしょうか」などのように、話し手の言語コミュニケーションと非言語コミュニケーションの両方を手がかりに、相手の気持ちをとらえてフィードバックしていく。感情の反映は、話し手が自分の心の底にある感情に気づく機会を与え、葛藤に向き合ったり、自己理解を深めることなどに役立つ（福原 2007：6-8）。

カウンセリング（コーチング）とインタビューは一見全く違うように見えるが、ベースとなる「相手の心の声を引き出す」という意味においては同じであり、前者はそれを本人の治療・成長に、後者はライフストーリーのコンテンツとして他者に伝えるという、アウトカムの違いであると考えている。ともに聞き手と語り手の相互作用であり、ライフストーリーは両者の共同制作である。相手を理解し受容・共感しようとする姿勢、表情、しぐさ、視線、相槌の仕方や声の調子と口調などは意識をしつつ、現場では多少の脱線や聞き手の主観なども織り交ぜることで、ジャズのセッションのようにストーリーを共創していくのが、インタビューの醍醐味でもある。

② 質問：事柄から意味・源へ

インタビューの要素としてもう一つ、「質問（問い）」がある。インタビューはインタビュアーがなにかしらの質問を投げかけることから始まるが、上記のように相手のストーリーを引き出すことに重きを置いているため、傾聴を一番に位置づけている。質問もインタビューの目的や媒体によって設定の仕方は大きく異なる。先程と同じくジャーナリズムにおいては、明らかにしたい事実に向かっていくためによりできる限り具体的な質問をそのトピックに関連する範囲にフォーカスをして深めていくことが多い。ZUKAN インタビューでは、相手のストーリーを引き出すために効果的な問いは何かという観点から質問を設定していく。その際、意識しているポイントを以下に紹介する。

1. オープンクエスチョン（拡大質問）を意識

オープン（エンド）クエスチョンは、その名の通り、回答の仕方の自由度が非常に高い

点が「開かれた質問」と呼ばれる所以である。反対語となる「クローズドクエスチョン（限定質問）」は、「はい」ないし「いいえ」もしくは、少ない言葉で返答できる質問である。クローズドクエスチョンは、聞かれた側は答える範囲が狭いため、あまり深く考えなくても回答がしやすい質問となっている。その反面、その人の心の中やじっくりと考えて深い話をしてもらうにはあまり向いていない。オープンクエスチョンは、クローズドクエスチョンに比べて簡単には答えられない場合が多く、回答する際に一度、自分の中で自問自答をするなど思考を伴いながら自分の言葉でストーリーを紡いで語ってもらうことができる。

ZUKAN インタビューでは、オープンクエスチョンを軸にしつつ、その問いから語られた内容に対してクローズドクエスチョンも活用して具体的に深めていく。いわゆるチャンクダウンのプロセスを辿り、その人のストーリーをありありと再現できるように問いを重ねていく。

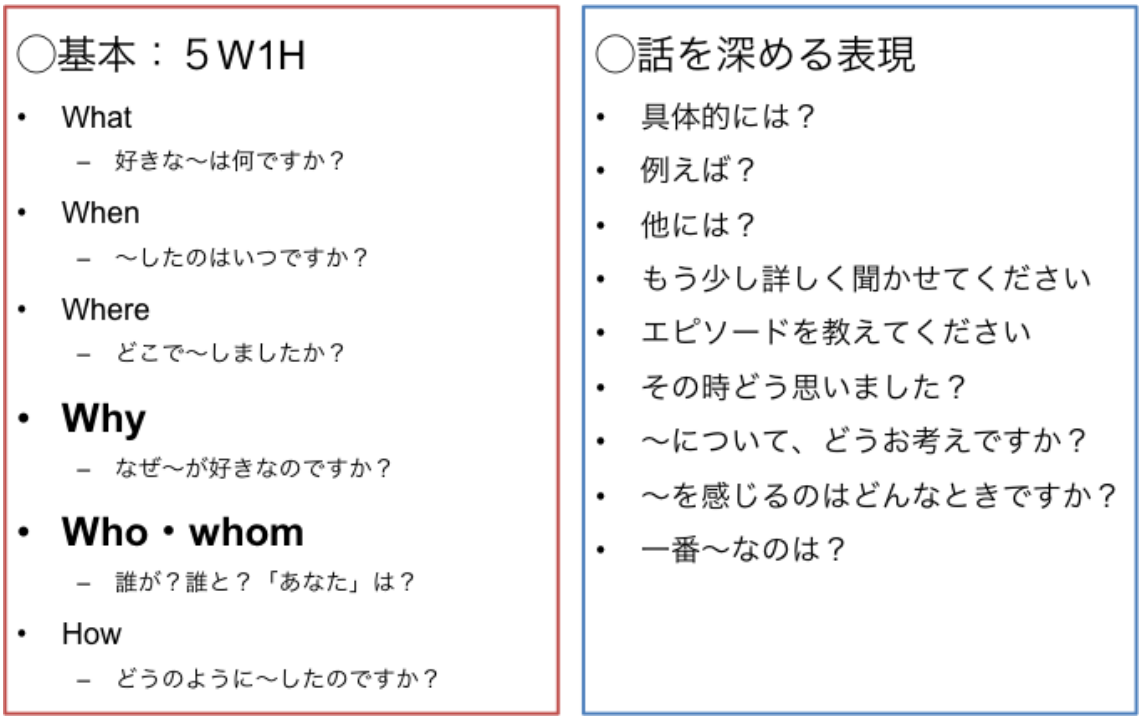

図 13：よく使うオープンクエスチョンの例（筆者作成）

2. 具体と抽象の往復

齋藤（2003）は、以下のように質問の種類の軸の 1 つとして具体と抽象を挙げている。

具体：「具体的に言うと？」「具体例をあげてください。」など

抽象：本質をつく、深く考え込ませるような質問

質問を設定する際に、はじめから抽象度の高い質問をしてしまうと、相手はどう答えていいか考えが定まらず、同じく抽象的な答えとなってしまう。質問のベースは具体的で、上記の通りオープンクエスチョンでありつつも、その問い自体は相手の本質に近づけるような具体的な問いを考えていくことが意識するべきことである。しかし、インタビューが進み、お互いに様々な文脈が共有され理解が進んだ段階になると、敢えて抽象的な深く考え込ませるような質問を投げることで、その人の人生観や仕事に対する哲学、深い意志の在り方などが言語化されて、後の３つのフレーズや収録で語ってもらうストーリーの核となる情報を引き出すことになる場合も多い。大事なのは具体的な質問をベースにして、話を展開しつつ、タイミングを見て意図的に抽象的な質問を投げるなど、具体と抽象の二つを往復することで魅力的なストーリーを導き出していくことである。

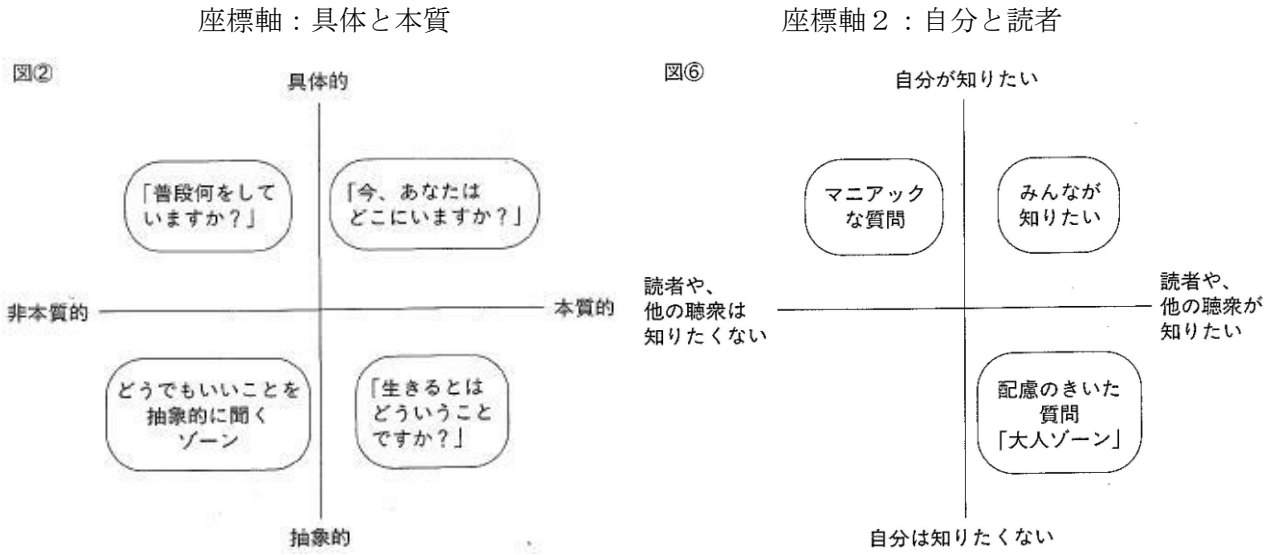

図 14：質問の座標（出典：齋藤（2006：55、145））

3.　相手の内面にアプローチ

オープンクエスチョンおよび、具体と抽象を意識して質問をしていくが、その際質問を展開し深めていく方向性が大切になる。最終的に目指す到達点は、相手の内面のできるだけ核となる部分であるが、はじめからそこに到達することは不可能である。以下のような

ステップで、少しずつ展開しながら、その場所に辿り着いていく。

事柄：５W1H

↓

思考・行動：何を感じ、何を考え、どう行動したのか

↓

深い意志：価値観、哲学、夢、人生

まず、はじめのステップは事柄の情報である。基本的には、いわゆる５W1H をベースに事柄についての詳細を明らかにしていく。例えば、研究者であれば研究や、地域の人であれば取り組みや仕事などについて質問をしていく。事柄を聴く中で、徐々に次のステップである思考や行動にアプローチをしていく。取り組んでいることや人生経験に対して、何を感じ、何を考え、どのように行動をしてきたのか、近い取り組みが複数あったとしても、その過程での思考や行動はその人の特徴が現れてくるのである。さらにその先にあるのが、その人の核心に近いステップである、深い意志である。思考や行動がなぜそのような思考や行動に至ったのか、その源に向けて問いを進めていくとその人の価値観や哲学、夢や人生そのものが浮かび上がってくるのである。理想的には、以下の図 15 のように縦・横へ自在に展開し、それらの情報の要素の結びつきから本質へと辿っていく。しかし、限られた時間の中でこのような状態まで至るには非常に難易度が高く、すべてのインタビューで明確に辿り着けるものではない。しかし、その地点を目指しながら、その「兆し」となる一言でも引き出すことができれば、その後の３つのフレーズや収録されるインタビューの質は大きく違ってくる。

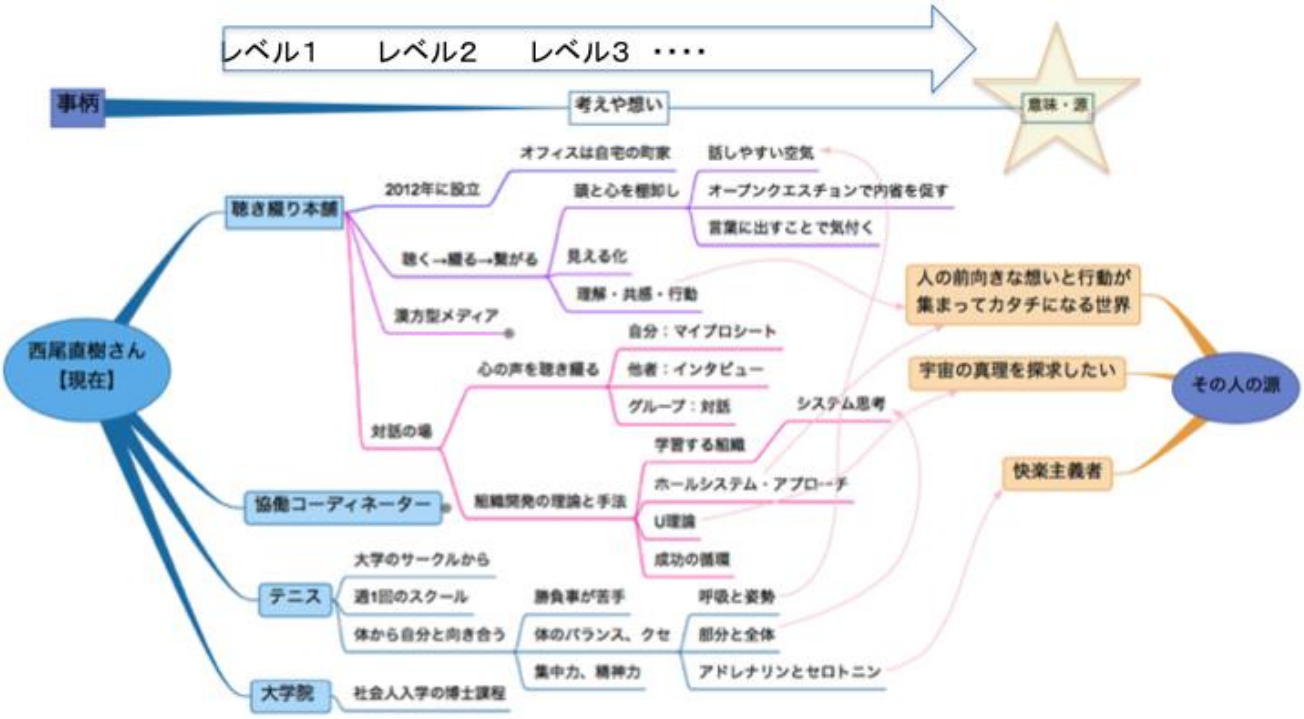

図 15：事柄から意味・源へ（筆者作成）

③　語り：振り返りと発見

傾聴と問いはインタビュアーの関わり方の要素であったが、もう一つ、インタビュイー自身がこのインタビューのプロセスを通じて得られる効果を引き出すという観点も重要な要素である。それは自分自身の経験やビジョンなどを言葉に出す「語り」の要素である。インタビューを通じてインタビュアーからの問いに答えていく中で、徐々に頭や心の中の奥に眠っていた情報が引き出されることがある。人は普段、日常の生活に意識を集中しているため、自分自身を振り返ったり、自分の思いを詳細に言葉にしたりする機会は少ない。インタビューのプロセスによって自分自身を語る行為を通じて、図 16 のように忘れかけていた出来事や現在の取り組みの初心に立ち返り、改めて自分自身が取り組んでいることの意味付けを強化し、モチベーションの向上につなげることができる。また、さらにはこれまで頭の中でイメージとして持っていたが、言葉にはなっていなかったビジョンや価値観などが何かの拍子にポロッと言語化されて出てくることもある。重要なことは、インタビュアーという第三者との相互作用によって、その語りがその場限りで流れてしまわず記録として残り、相手の反応によって自らが語った内容の価値に気づくということもある。

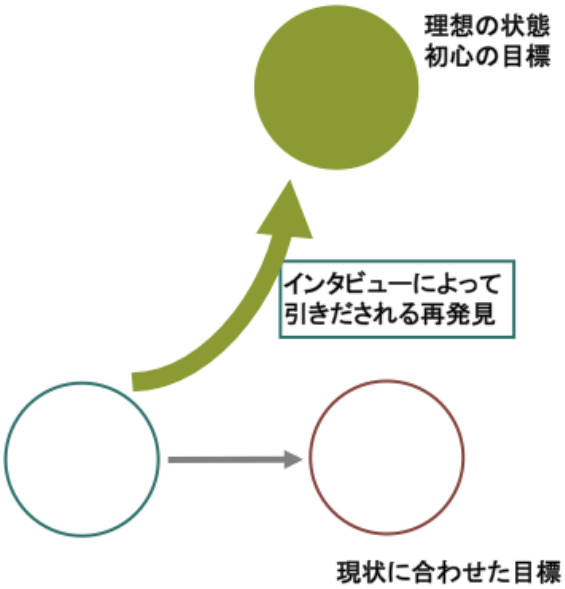

図 16：インタビューの力（筆者作成）

第３節　　図鑑インタビューの展開

第１項　　インタビュアーの育成

２項でも述べたように、COLPU の人材育成プログラムの中で、受講生に ZUKAN インタビューのノウハウを伝授し、実際に京都各地で活躍する地域公共人材に対し、取材とインタビュー映像の撮影を行い、ウェブサイトで配信まで行った。もともと筆者が 300 人以上へのインタビューを行った経験を通じて蓄積していった暗黙知がほとんどであった。それを主にカウンセリングやコーチングで使われている傾聴の技法および、ファシリテーションや対話の場づくりで使われている問いのデザインの考え方を中心に言語化を行い、他者でも実践ができるようなプロセスに落とし込むことを試みた。COLPU では、3 年で述べ 49 名の受講者を指導。まず ZUKAN インタビューのプロセスやインタビュースキルについての基礎的な考え方などを座学で指導し、受講生同士による相互インタビューを行って模擬的な実践を経験してもらった上で、受講生一人につき年間 2～3 名の地域公共人材に対するインタビュー実践を行ってもらった。その際の取材対象者は、各自取材したい希望者を選定しアポイントメントを取るところから実践してもらった。受講者はプログラム終了後、それぞれ異なる地域や公共的なキャリアを歩んでいく。ZUKAN インタビューの取材対象は、今後自分が進みたいフィールドでの先駆者や、自分が目指したい生き方を

しているロールモデルである人々を選択してもらった。この ZUKAN インタビューの実践を通してそうした人々とのコネクションや関係性の構築にもつながった。

実際にやってみて気づいたことや反響について以下に述べる。当然のことながら人それぞれのコミュニケーションの癖が如実に出た。また、それぞれインタビュー手順の段階にそった気づきや課題は以下の通りである。

収録前打ち合わせ：スムーズに話を引き出せる人もいれば、自分のことを話しすぎてしまう人、逆に相手の話を深く聞きすぎて次の質問が出てこなくなる人、質問はあまり多くはないが、落ち着いた雰囲気でスムーズに会話を進められる人などが居た。一番多かったのは、やはりいざインタビューの実践の段階になると頭が真っ白になって何を聞いていいか分からなくなり、長い沈黙が生まれてしまうということがあった。

３つのキーフレーズの作成：相手から聴き出した話を俯瞰的に見てストーリーをまとめていくことの難しさがあった。その人の活動の内容に引っ張られて、狭い範囲の内容しかつなげることができないケースもあった。また、話の流れを端的にまとめる、一種のコピーライティングのスキルに関しては別途トレーニングの必要があると気づいた。

映像収録：やはりカメラが回ると緊張して質問が出てこなくなるということはあった。そうした課題については、その後の指導内容に少し盛り込んだり現場で一言アドバイスとして伝えたりした。収録については３つのフレーズの書かれたクリップボードをしっかりと活用することで大きく改善は進んだ。

第２項　　地域展開

地域公共人材図鑑以降、地域で活躍する人材を発掘し可視化することに一定の手応えを感じることができた。そこでその後、以下のようにいくつかの地域で現地の地域活性に取り組む組織や人と連携し、その土地の ZUKAN インタビューの実践を行ってきた。以下は主な事例である。

- ふくしま人図鑑（福島県）
- にしあわじん図鑑（岡山県西粟倉村）
- 未来フェス人図鑑（イベント関係者）
- がんばってはる人図鑑（全国各地）（URL 7）
- さきがけヒューマン図鑑（独立行政法人 JST さきがけ『情報環境と人』研究領域）（URL 8）

・　北大人図鑑（北海道大学）（URL 9）

ここでは、それらの中から、『ふくしま人図鑑』を取り上げて紹介する。ふくしま人図鑑は、2011 年の 12 月頃から活動がスタートし、合計で 50 名ほどのインタビューが行われた。その経緯から説明する。

2011 年 3 月 11 日東日本大震災が起き、福島県は福島第二原発事故も含め甚大な被害が出た。その震災からの復興に向けて、地域内外の人材が集い、様々な取り組みが行われてきた。筆者はインタビューのスキルを通じて何か貢献できないかと、震災後から強く考えるようになったが、相手のライフストーリーを聴くインタビューでは震災の傷を深めてしまうのではないかという懸念があり、発災後半年は別の形での関わりを模索していた。そのような時に震災前から交流のあった福島の友人から、震災復興のプロジェクトの 1 つとして福島で ZUKAN インタビューに取り組みたいという依頼があった。そのプロジェクトの趣旨としては、これから福島が復興していくに当たりキーパーソンとなる人材への取材を通じて、彼らの見える化とネットワークの構築につなげたいというものであった。筆者は前述したような懸念を持ちながらも少し注意深く現地に入り何名かの福島人にインタビューを行った。実際にインタビューをして大きな学びがあった。それは、震災という大きな逆境の中で未来に向けて新しい歩みを始めている人たちの志と行動するエネルギーの高さである。例を挙げると、福島で有機農業に取り組んでいる農家の男性の場合、確かに被害は甚大だが、逆に福島が全国的・世界的に注目されていることをプラスに捉え、新しい商品の開発やアグリツーリズムのようなサービスを通じて地域の資源の活用や魅力の発信、新しい産業の構築を目指していた。もちろん、非常に多くの人達が辛い状況に置かれているのは事実だが、中には新しい福島の姿を描いて実践している人達がいるということに、取材に行ったこちらの方が元気をもらうような体験が毎回のようにあった。震災に限らず現在の日本の地方は人口減少や自然災害等によって疲弊していると言われているが、そんな中でも次の時代に向けて活動を続けている人がいる。

このふくしま人図鑑での経験から、ZUKAN インタビューがそのような人々を多くの人に知ってもらうことの意義や使命のようなものを強く持つきっかけとなった。ふくしま人図鑑は筆者が 3 回ほどインタビュー講座を開催し、また、取材現場に何名かの現地のスタッフにも同行してもらい ZUKAN インタビューのノウハウの伝達を行った。その後は現地のスタッフが自分たちで取材対象の選定からインタビューの実践、映像コンテンツの配信まで取り組んだ。地域公共人材図鑑では、ほぼすべての取材現場に筆者が立会い適宜

サポートを行っていた。しかし、ふくしま人図鑑では筆者が関わった最初の 10 名の後は、筆者は一切関わらずに実践は積み重ねられた。

第３項　　暖簾分けとしての札幌人図鑑

概要

ふくしま人図鑑は最初のスタートアップと講座の開催を通じたノウハウの伝授を筆者が行った後、筆者の手を離れ現地のスタッフのみでインタビューの実施・配信まで継続的に取り組まれた事例となった。しかし、それらは、さまざまな成果物や人材のネットワークの構築に寄与することはできたが、その後何年も継続する活動には至らなかった。

次に紹介する札幌人図鑑（URL 10）は最初から筆者によるシャドーイング無しで、「暖簾分け」として新しく立ち上げられ、継続的にインタビューが実践され地域に定着していった事例となる。さらにはケーブルテレビのＴＶ番組として契約家庭に配信されることになり、全国の支局ごとに独自の図鑑が立ち上げられ、地域のキーパーソンが紹介されるメディアとなった。つまり、研究者図鑑からの暖簾分けからさらに暖簾分けが進み、ZUKAN インタビューというフォーマットがスケールアウトをしたと言える。

札幌人図鑑は、コミュニティ FM のラジオパーソナリティー＆局長をしていた福津京子が、研究者図鑑の「暖簾分け」として 2012 年 5 月 1 日より開始した動画インタビューの番組である。札幌でする人をインタビューし、図鑑フォーマットで映像を撮影。企画・撮影・編集・掲載までを一人でこなし、1 年 365 日毎日アップ。2015 年 3 月 27 日には 1000 人を達成した。 現在は週 3 回のペースで継続し、2019 年内に 1600 人に到達する。

2015 年 11 月からは、ケーブルテレビ通信事業を行う株式会社ジェイコム札幌が、「札幌人図鑑.TV」としてテレビ放送を開始。放送日の翌週には WEB サイトにアップしてアーカイブし、ジェイコムの番組が見られない地域でも引き続き視聴することができる。

さらには、J:COM の各地域局が、札幌人図鑑の「暖簾分け」として図鑑フォーマットの番組制作と放送を行っている。それらは札幌人図鑑も含めすべて、「ご当地人図鑑」（URL 11）として J:COM ホームページ内にアーカイブされている。以下、その設立から他地域への展開の流れを整理する。

図 17：札幌人図鑑ウェブサイト（左）とご当地人図鑑のスクリーンショット集（右）

札幌人図鑑立ち上げまで

2011 年 11 月に所属していた KGC へ、札幌で ZUKAN のフォーマットを使ったインタビュー企画をしたいと問い合わせがあった。フォーマットをそのまま使ってもらうことはもちろん歓迎をしたが、配信されている映像の裏には事前の収録前打ち合わせを含む、様々なプロセスがあり、各プロセスにも様々な意図がある旨を伝えた。そして翌年の年明けに企画立案をした福津京子が京都を訪れた。京都ではいくつかの地域活動の現場を案内した上で、ZUKAN インタビューのプロセスの意図について、COLPU のインタビュー講座の内容をベースに解説を行った。その後、ふくしま人図鑑の収録が一件たまたま札幌で行うことになり、その収録現場を見学してもらうことで実際の収録の流れや機材のセッティングなどについて伝えた。そして福津自身が企画を練った上で、2012 年の 5 月 1 日、

札幌人図鑑の配信がスタートした。

札幌人図鑑からの暖簾分け

札幌人図鑑は 1 年 365 日毎日配信を実際に有言実行し、その多様な分野や職業の札幌人の紹介を積み重ねていった。その過程でインタビューを受けた人が「今度は自分がインタビュアーになっての新しい図鑑をやってみたい！」という相談を福津にする人が現れるようになった。今度は福津からその人達に対してノウハウを伝授し、その人達を中心に実際にいくつかの図鑑が立ち上がった。

- 足立人図鑑（URL 12）：2013 年 7 月スタート。札幌人図鑑を見て感銘を受けた東京都足立区の学生が、大学のゼミ仲間と「足立人図鑑」を立ち上げたいと札幌を訪れ暖簾分けを申し出た。制作主体、概要、開始の経緯、札幌人図鑑と同じスタイルで 2013 年 7 月より開始した。不定期更新で現在も継続中である。地元コミュニティ FM でも同名の番組がスタートした。メディアミックスによる地域の魅力を発信する。学生団体による東京都足立区のキラリと輝く方を学生が紹介する図鑑（その後後述する JCOM による足立人図鑑が立ち上がったため、足立人図鑑（学生）と改名した。）
- 稲生会図鑑（URL 13）：2015 年 2 月に医療法人稲生会の院長土畠智幸と事務職員の武部未来が「札幌人図鑑」のゲストとして登場したのをきっかけに制作が始まった。障害当事者や同医療法人に関係する人々の、人となりに触れるインタビュー動画である。2015 年 5 月から同会のウェブサイト内のニュースのページで公開された。
- 北海道ママ図鑑（URL 14）：2016 年 5 月スタート。 子育てママの支援のための自宅開放型ママ向けサロン「来 mama ルーム」のウェブサイト内で、北海道の「元気ママ」を紹介する動画として製作・公開される。代表の越後久美子が司会を務める。

J:COM との連携

また、札幌人図鑑は 2015 年 3 月 27 日に第 1000 回・1000 名を達成し、約半年間の休止を挟んで、第 1001 回からはジェイコム札幌にて『札幌人図鑑.TV』として先行放送され、その 1 週間後にウェブサイト『札幌人図鑑』で公開されるようになった。テレビ放

送開始後も福津が企画・撮影・編集を兼務する。

スタート時より 1 週間に 5 回・5 名のペースで続き、2019 年 10 月 2 日現在で総計 1654 回・1654 名を超えた。

J:COM 札幌の番組『札幌人図鑑.TV』の放送開始後、J:COM の各地域局が効率的な制作方式に注目して、相次いで同一フォーマットの番組制作と放送を始めた。制作済みの番組は全て J:COM ホームページ内の『ご当地図鑑』で視聴できる。

2017 年 1 月現在、J:COM で放送・公開しているご当地人図鑑とそれぞれの放送開始年月日は以下の通りである。

- 札幌人図鑑（第 1001 回以降、2015 年 11 月 2 日）
- 熊谷・深谷人図鑑（2016 年 1 月 1 日）（URL 15）
- 足立人図鑑（2016 年 2 月 1 日）
- 横浜人図鑑（2016 年 2 月 1 日）（URL 16）
- 八王子人図鑑（2016 年 4 月 1 日）（URL 17）
- 仙台人図鑑（2016 年 4 月 19 日）（URL 18）
- たまろくと人図鑑（2016 年 6 月 1 日）（URL 19）
- 神戸人図鑑（2016 年 8 月 1 日）（URL 20）

この章では ZUKAN インタビュー手法の形成のプロセスから、その構築したコンセプトの解説、そして手法の拡大という流れで ZUKAN インタビューの全体像を解説した。次章では 2 章で述べた地域人材リゾームの構築のはじめの一歩として、この ZUKAN インタビューがどのような効果があるのかを、札幌人図鑑の出演者や関係者へのヒアリング調査による質的研究を通じて分析とプロセスモデルの作成を行う。具体的には、M-GTA の手法を用い、概念やカテゴリーの抽出、それらのつながりの可視化とストーリーラインの作成を行い、札幌人図鑑による出演者の変容と地域の人材データベース形成のプロセスを明らかにする。そして地域人材リゾームに至る前半のプロセスの実践に必要な要素や、その後の展開への「兆し」となる要素を提示する。

第４章　　札幌人図鑑の研究

第１節　　研究内容

第１項　　研究目的

3 章までの内容とリサーチクエスチョンを踏まえ、本章では ZUKAN インタビューの地域における具体的事例として札幌人図鑑を取り上げ、その取り組みを通じて起きている事象について調査・分析を行う。それらを通じて、札幌人図鑑実践プロセスの理論的モデル生成につなげることにする。

第２項　　調査協力者

まずは、1 つ目のリサーチクエスチョンへの回答に向けて、図鑑インタビューの実践を通じて、地域内で主体的に活動している人々にアプローチをし、彼らのストーリーを引き出してコンテンツ化しデータを集積させていく中で、どのような効果を生み出しているのか。具体的には出演者へのヒアリング調査を通じて、図鑑インタビュー出演前から出演後にかけての気づきや意識の変容を詳細に追う中で、浮かび上がってきた要素からプロセスモデルの形成につなげた。2 つ目のリサーチクエスチョンに対しては、主にインタビュアーや現在提携しているテレビ局担当者へのヒアリング調査を通じて、スタート時の様子、取り組んでいる中での出来事、その中で出てきた困難など、主に経験を振り返ってもらう形で要素を収集した。

調査は後述する M-GTA での分析を想定して行った。M-GTA における、インタビュー調査の対象者を限定した集団として設定する分析焦点者は、「札幌人図鑑の実践現場に関わりのある札幌人」とする。「実践現場に関わりのある」としたのは、今回は視聴者は対象とせず、札幌人図鑑の展開プロセスに焦点を当てるという趣旨のためである。

また、これまでに述べてきたように、図鑑インタビューを起点とした地域人材リゾームの形成プロセスは、個→集合→全体の 3 つのフェーズがある。それぞれのフェーズでは、関与する人や関わり方が異なっている。また、それらは完全に分断しているものではなく、複雑に重なりあっている。

本論では地域における人材リゾーム形成への「はじめの第一歩」にフォーカスをしているため、基本的には個→集合のフェーズまでを対象とする。特に第一歩としてのインタビューに重点を置いているため、1 つ目のフェーズにまずフォーカスを当てる。

前述の通り、2 つのリサーチクエスチョンに対応して、それぞれヒアリング対象者を設定していが、出てきた話の内容は両者で重なるものもあり、また、カテゴリー間やストーリーラインの流れを接続する際にも有用であったため、融合した形で分析を行った。

調査は 2 回に分けて行った。1 回目は 2018 年 6 月～9 月にかけて、札幌人図鑑インタビュアーである福津京子、札幌人図鑑をテレビ番組にした J:COM の担当者 1 名、札幌人図鑑出演者 4 名、そして比較のため今は更新が止まってしまった「ふくしま人図鑑」のインタビュアーの計 7 名にインタビューを行った。7 名から話された会話データを、ひとまず KJ 法の援用によって分類。そこで方向性を整え、不足している視点を加えた上で、2019 年 9 月～12 月にかけて 2 回目のヒアリング調査を、札幌人図鑑出演者のみ 5 名に対し行った。方法は半構造化の調査面接を用い、時間はひとり 1 時間半～2 時間程度、録音したデータは全て文字に起こした。大まかなヒアリング項目はそれぞれ以下の通りである。

1. 出演者
   - ・出演前と後での意識・意欲・状況などの変化
   - ・インタビュー映像の活用方法
   - ・インタビューを受けた時の感想、エピソード
   - ・その後の反響、影響
2. インタビュアー
   - ・始めた経緯
   - ・スタート前に持っていたリソース（スキル、人的ネットワーク、機材等）
   - ・スタートから地域に根付くまでのプロセスでのエピソード
   - ・外の組織との関り
   - ・その他、取り組んでいての試行錯誤や気づきなど
3. テレビ局担当者
   - ・企業として、札幌人図鑑および福津さんと連携することの経緯、意義
   - ・実際に放送していての反響、影響
   - ・他地域への展開、今後の展開について
   - ・その他、スタートしてからの気づきなど

地域人材リゾームプロセスの前半（データベース形成まで）を視野に入れて行ったが、結果的にそれ以降のプロセスへの『兆し』となるような、人と人の関係性やネットワーク

に関わる要素も抽出することができた。

表２：調査協力者プロフィール一覧

対象者	プロフィール（札幌人図鑑記載・撮影当時）	性別	属性 （登場回※出演者のみ）
小川恵子	札幌新川高等学校　教諭	女性	出演者（1454 回）
朴炫貞	北海道大学 CoSTEP　特任助教	女性	出演者（1290 回）
竹垣吉彦	イオン北海道株式会社　取締役常務執行役員	男性	出演者（1191 回）
越後久美子	来 mama ルーム　代表 「北海道ママ図鑑」インタビュアー	女性	出演者（607 回）・ インタビュアー
浅野目祥子	NPO 法人手と手　代表	女性	出演者（1210 回）
鈴木卓真	TED x Sapporo　代表	男性	出演者（1199 回）
古賀詠風	キャリア学習プログラム「カタリバ」	男性	出演者（1377 回）
山崎翔	旅と音楽の研究所　所長	男性	出演者（1576 回）
大澤夏美	ミュージアムグッズ愛好家	女性	出演者（1575 回）
福津京子	札幌人図鑑　主宰 「札幌人図鑑」インタビュアー	女性	インタビュアー
中島隆	株式会社ジュピターテレコム 札幌メディアセンター事務局	男性	テレビ局担当者
小笠原隼人	株式会社エコライフ代表 「ふくしま人図鑑」インタビュアー	男性	インタビュアー

第３項　　分析手法

質的研究

以下の 3 点の理由から、本論の研究は、ヒアリングを通じて調査者と対象者による相互作用の中から引き出されたデータを使用する質的研究の手法で行う。

1. 札幌人図鑑の性質上、客観的データより主観的ストーリーが重要

一般的なコンテンツは、視聴数や満足度に価値を置いているが、札幌人図鑑は、その取り組みのプロセスの中で生まれる潜在的な価値に重きを置いている。具体的にはインタビューの実践の中で生まれる気づきや変容、活動の蓄積によって構築される経験、人の縁などである。それらは客観的なデータではなく、主観的なストーリー（文

脈、語り）として引き出される。

2. 「暗黙知」の中に重要な情報の多くが存在している

札幌人図鑑は、インタビュアーである福津京子個人のパーソナリティーによって成立している部分が非常に大きい。また、福津だけでなく、出演者も含め、札幌人図鑑に関わってきた人々の経験や意識など、まだ言葉として表出していない暗黙知の中に、重要なヒントとなる情報が眠っている。

3. 各自の現場で実際に「使える」理論を目指したい

この研究は、札幌人図鑑の効果を正確に詳細に明らかにする研究ではなく、札幌人図鑑のように、図鑑フォーマットを使って、自身の地域やコミュニティの中で浸透して効果を生み出していくために必要な要素を明らかにする研究である。客観的データより、現場で実際に「使える」詳細な記述を重視したい。

M-GTA

また、収集した質的データの分析手法としては、M-GTA（修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ）を用いる。M-GTA とは GTA（グラウンデッド・セオリー・アプローチ）をベースとして、木下康仁（2007）が提案した手法である。まず GTA とは、1960 年代に Glaser と Strauss によって考案された質的研究法で、「データをもとにして分析を進め、データの中にある現象がどのようなメカニズムで生じているかを『理論』として示そうとする研究法」（戈木 2016：2）である。さらに、理論は概念同士の関連を文章で表現したものであるという意味から、GTA は「データから概念を抽出し、概念同士を関連づけようとする方法」（戈木 2016：2）とも言える。GTA が結果として示すのは、個別の事例がどうであるかではなく「データに含まれる現象の構造とプロセス」（戈木 2016：3）である。では、M-GTA はどのような点で「修正版」なのか。木下康仁（2007）は M-GTA の特性として、以下のようにまとめている。

【オリジナルで示された基本特性の継承】

（1） 理論生成への志向性

（2） grounded-on-data の原則

（3） 経験的実証性（データ化と感覚的理解）

（4） 応用が検証の立場（結果の実践への還元）

【課題点の克服】

(1)　コーディング方法の明確化（分析プロセスの明示）

(2)　意味の深い解釈

(3)　60 年代の限界（素朴な客観主義）と近年の質的研究動向に対して独自の認識論（インターラクティブ性）

（木下康仁 2007：28）

端的に言うと、grounded-on-data など根底にある研究法としての思想やスタンスは保持しつつ、わかりにくさや不明瞭な点を改善してプロセスを明確にし、オリジナルが提唱されてからの学術的議論の蓄積を反映させている。特に顕著なのが、オリジナルではデータの分析に際し可能な限り主観を排除して客観的に切片化を行うが、M-GTA では、「研究する人間」を明記させ、主観を中心においている。誰が何を何のために明らかにしようとして行う研究であるのか、また、研究結果をどのように実践活用していけるのかを徹底して意識化させるのである。それを木下は「研究者を研究方法論化する」「研究者を社会関係にロックする」（木下康仁 2016：2）と表現し、研究者の役割と社会的活動としての研究を強調している。

本研究は、札幌人図鑑に出演したことによってどのような変化が生まれたのか、また、それらが蓄積してどのようなプロセスで人材のデータベースが構築されていったのか、そのプロセスを明らかにし、図鑑インタビュー実践のための理論的仮説をまとめたいということを目的としている。さらに、扱っているテーマに筆者自身が考案した手法を設定しているため、実践の現場からデータをあつめ、そのデータを元に新しい仮説を生み出していく GTA、さらにはオリジナルであるグレーザー・ストラウス版の手法から発展し研究の前提として「研究する人間」を設定するなど、誰が何のためにという主観や意図の反映をプロセスの中に内包する M-GTA の手法を選択した。

第４項　分析プロセス

ヒアリングの音声データをすべて文字起こしを行った後、M-GTA の手法プロセスに従い、一人ずつワークシートの作成を進めた。ワークシートは概念名、定義、ヴァリエーション（関連する会話内容）、理論的メモで構成される。まず、小川のヒアリングデータを最初の分析対象として、概念作成をスタートした。小川が ZUKAN インタビューに出演する前、当日打ち合わせ、収録、配信後と時系列でその時その時の意識や気持ちを丁寧に拾っていき変化や変容につながったポイントにフォーカスを当てて発言を抽出した。その

中で、意識の変容やその後の人間関係や行動の発展につながる概念を作成することができた。その後続けて、出演者のヒアリングデータ分析を行った段階で作成した概念を整理した。前に作成したワークシートの概念と重なる内容があればそこに追加した。概念は異なるが近い内容がいくつか集まった場合は、概念名や定義を見直し、それらを集合的にあらわす新たな概念に書き換えた。理論的メモには、ヴァリエーションについての解釈や理論的な枠組みなどのメモのほか、対立する事例についても記録して検証し、できるだけ多様な視点を取り入れるように留意した。1 回目に収集したデータをもとに分析をスタートし、その進捗に合わせて 2 回目のヒアリングを進めた。分析と同時進行でデータの追加収集を行い、最終的にほぼ新しい概念がでない理論的飽和に至った。

第２節　　分析結果

第１項　　結果図

このようなプロセスでの分析を通じて、全部で 100 の概念案が抽出され、それらをリサーチクエスチョンに沿って統廃合や取捨選択を行った結果、最終的に 32 の概念にまとまった。また、各概念の類似性や相互関係などを検討して 10 のカテゴリーを作成し、さらに、各カテゴリーと 2 章のリゾーム形成プロセスを統合的に検討することで 3 のコアカテゴリーを作成した。それらの関係を整理しまとめたものが図 18 の結果図である。

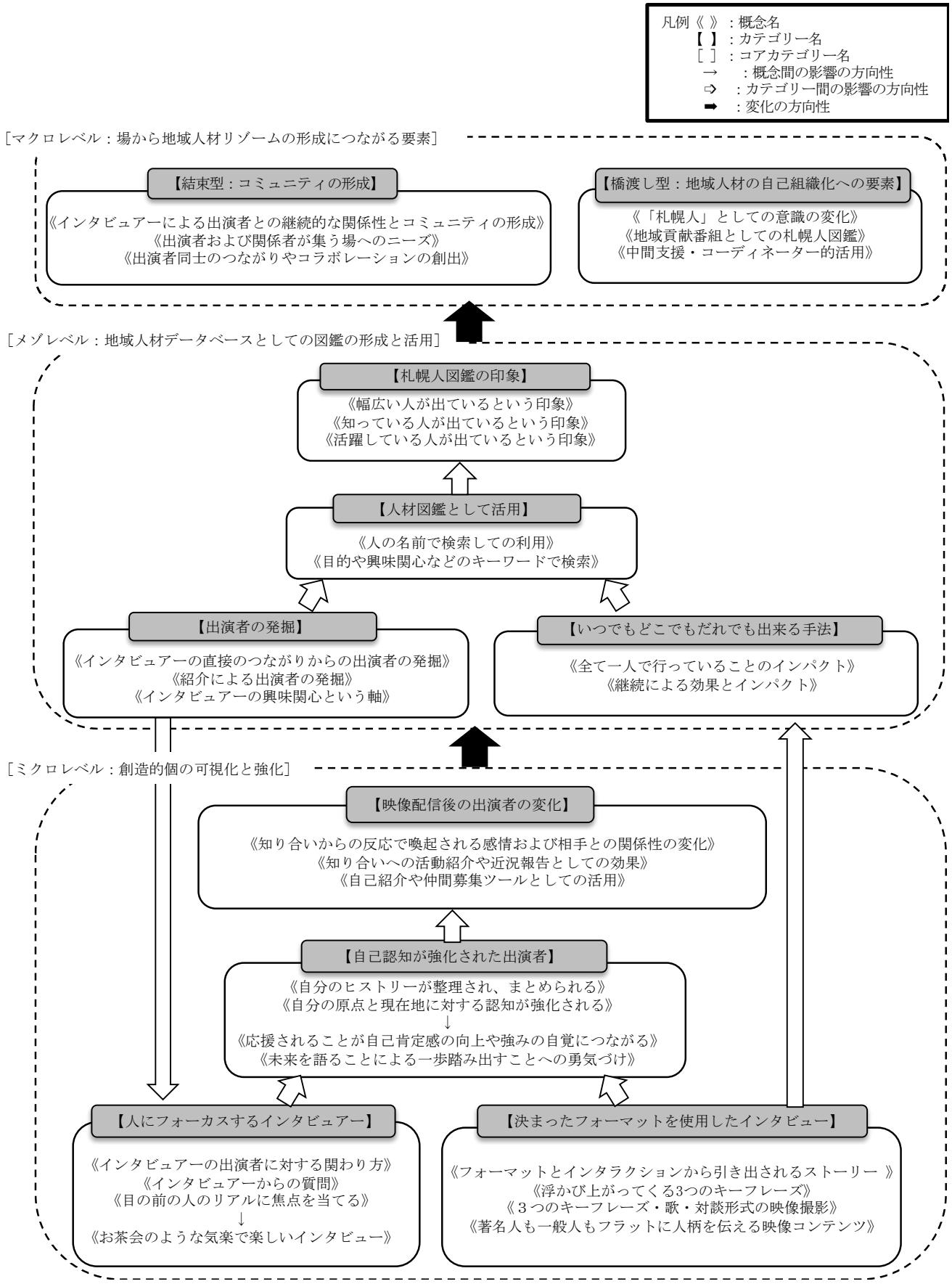

図 18：札幌人図鑑による出演者の変容とデータベース形成のプロセス（筆者作成）

第２項　　ストーリーライン

以下はそのストーリーラインである。ストーリーラインも自己組織性理論に則り「創造的個を優先」の原則からスタートをしており、コアカテゴリーは順に［ミクロレベル：創造的個の可視化と強化］［メゾレベル：地域人材データベースとしての図鑑の形成と活用］［マクロレベル：場から地域人材リゾームの形成につながる要素］という流れになっている。まずはそれら抽出したカテゴリーの流れを示すストーリーラインを記述し、各カテゴリー内の概念の内容や関係性は、次節にて詳細に述べる。

札幌人図鑑では、打ち合わせから映像の収録まで、【人にフォーカスするインタビュアー】が【決まったフォーマットを使用したインタビュー】を行って実施している。出演者はそれらの働きかけによって、ほとんど人に話さないような内に秘めた思いや、忘れかけていたエピソードなどが引き出され、自分の経験や心の中が整理・言語化されて【自己認知が強化された出演者】となる。そして撮影された映像がインターネットやテレビで配信されることで、さまざまな反響や効果があり、【映像配信後の出演者の変化】につながる。

札幌人図鑑は、1000 人到達まで 1 年 365 日毎日を標榜していたため、インタビューの実施と次の【出演者の発掘】を同時進行で行っている。発掘した人材を【人にフォーカスするインタビュアー】が上記のプロセスでインタビューを行い、また、次の人材を発掘しインタビューするというサイクルを毎日のように回しているのである。そのために【いつでもどこでもだれでもできる手法】によって 1 人で全て実施し、1 年 365 日の配信を積み重ねていくことができる形となっている。そこには【決まったフォーマットを使用したインタビュー】であることも含まれている。そして、それらのアーカイブによるデータベースが形成されていくことで【人材図鑑として活用】されるようになり、数のインパクトと多様さのインパクトを通じて独特の【札幌人図鑑の印象】を見る人に与えることで、地域の中で認知が広がっていった。

札幌人図鑑の人材発掘とインタビューのサイクルによる人材図鑑形成を通じて、出演者だけで 1000 人以上の人との出会いとなっている。また、【映像配信後の出演者の変化】にあったように、出演者にとっても、映像配信を通じた新たな人のつながりや関係性の変化が生じた。こうしたインタビュアー、出演者、など札幌人図鑑関係者のネットワークや出会う場、関係性の変化は【結束型：コミュニティの形成】へとつながっている。さらには、札幌人図鑑を通じた視聴者の意識変化や、札幌人図鑑を活用して地域に対して働きかけていく動きなど、札幌人図鑑ネットワーク外の人やコミュニティとつながっていく【橋

渡し型：地域人材の自己組織化への要素】へと発展していく。

第３節　　各要素の詳細と考察

本節では、前節で作成した結果図とストーリーラインの各要素を、コアカテゴリーごとに説明をしていく。まずコアカテゴリーを構成するカテゴリー、概念とその定義を表にまとめて示す。続いてカテゴリーの概要、カテゴリーに含まれる各概念の詳細を記述する。概念については、定義・関連するヴァリエーション、理論的メモの順に記載していく。M-GTA では、grounded-on-data の原則に則って概念形成過程で質的データであるヴァリエーションを重視して詳細に検討していくが、概念作成後は最小限の表記にする。本論でも、特に印象的なもののみ 1～2 例抜粋して紹介をする。一部、個人の意識の変容や重要な示唆につながる発言など、その内容自体に意味のある概念については、別途取り上げて紹介する。

各概念の説明については、《》は概念名、枠で囲っている部分は定義、斜体となっているのは代表的なヴァリエーション例、その下に理論的メモをもとにした説明という形式で記述する。

第１項　　［ミクロレベル：創造的個の可視化と強化］

このコアカテゴリーは、主に地域の人材に対するインタビューの実施と映像コンテンツ作成に関する、創造的個にフォーカスを当てたミクロレベルの概念群である。構成するカテゴリーは【人にフォーカスするインタビュアー】【決まったフォーマットを使用したインタビュー】【自己認知が強化された出演者】【映像配信後の出演者の変化】の 4 つとなっている。時系列でいうと【映像配信後の出演者の変化】はデータベースの内容になるが、ミクロレベルという基準や出演者自身に関する内容であることを優先し、このコアカテゴリーに配置した。

表３：［ミクロレベル：創造的個の可視化と強化］の構成カテゴリーおよび概念

カテゴリー	概念	定義
【決まったフォーマットを使用したインタビュー】	《フォーマットとインタラクションから引き出されるストーリー》	現在・過去・未来の構成とインタビュアーとのインタラクションによって、ZUKAN インタビューだからこそ話した内容があること。
	《浮かび上がってく	福津からの問いかけに合わせて話をして

	る 3 つのキーフレーズ》	いたら、自然と３つのキーフレーズが作成されたこと。
	《３つのキーフレーズ・歌・対談形式の映像撮影》	３つのキーフレーズを使う対談形式でのインタビュー撮影のため、素人でもスムーズに話をしやすいこと。
	《著名人も一般人もフラットに人柄を伝える映像コンテンツ》	著名人も一般人もフラットに同じ形式で紹介し、インタビュー映像を見ることで人柄や意外な側面を知ることができたこと。
【人にフォーカスするインタビュアー】	《インタビュアーの出演者に対する関わり方》	インタビュアーから自分の話を受け入れてくれているという安心感や、自分に対して興味を持ってくれている姿勢を感じると、その気持ちに応えたいと思って一生懸命話そうという気持ちになったこと。
	《インタビュアーからの質問》	最初の質問の入り方によって、その後の話し手の話やすさに影響があること。
	《目の前の人のリアルに焦点を当てる》	過去の実績に引っ張られず、また、活動や商品の紹介ではなく、その人自身のリアルを引き出すインタビューであること。
	《お茶会のような気楽で楽しいインタビュー》	お茶会やおしゃべりのような楽しい雰囲気で行われることで、心理的な安心感や話やすさにつながったこと。
【自己認知が強化された出演者】	《自分のヒストリーが整理され、まとめられる》	人に聴いて整理してもらって、自分を振り返ることができたこと。
	《自分の原点と現在地に対する認知が強化される》	何のために自分は今これをやっているのか、という源泉に立ち返ることができたこと。
	《応援されることが自己肯定感の向上や強みにつながる》	聞いてくれる、認めてくれることが自己肯定感につながったこと。
	《未来を語ることによる一歩踏み出すことへの勇気づけ》	最後に未来を語ることで、やっていけそうな気持ちになり、一歩前に踏み出す後押しとなったこと。
【映像配信後の出演者の変化】	《知り合いからの反応で喚起される感情および相手との関係性の変化》	身近な存在だが普段改めて深く話す機会のない人たちにも、自分の近況や取り組み、背景を知ってもらう機会となったこと。
	《知り合いへの活動紹介や近況報告としての効果》	周りの知り合いからさまざまな反応があり、そのことが自身のエンパワーメントや、さらに、その人との関係性の変化にもつながること。
	《自己紹介や仲間募集ツールとしての活用》	知り合って間もない人に対して自分自身のライフストーリーも含めて知って貰う機会になったこと。

カテゴリー【決まったフォーマットを使用したインタビュー】

このカテゴリーに該当する概念は《フォーマットとインタラクションから引き出されるストーリー》《３つのキーフレーズを使った対談形式》《浮かび上がってくる 3 つのキーフレーズ》《著名人も一般人もフラットに人柄を伝える映像コンテンツ》の 4 つである。

出演者は、《インタビュアーの出演者に対する関わり方》や《インタビュアーからの質問》によって、リラックスして自然と話をすることができた。また、《目の前の人のリアルに焦点を当てる》ことを大事にしたインタビューであるため、普段の学生向けのスピーチや活動プレゼンなど人前で話す場や、近しい人との間の会話でも話さないような話をしていた。そしてそれらを通じて、最初はうまく話ができるか少し緊張していたが、打ち合わせが進む中で《お茶会のような気楽で楽しいインタビュー》となった。

このカテゴリーは、ZUKAN インタビューの最も独自の要素であるフォーマットに関する概念をまとめたものである。機能的・構造的な要素であるが、それが創造的個に作用することで、相手のストーリーや気づきを限られた時間の中で引き出されていることが見て取れる。

概念《フォーマットとインタラクションから引き出されるストーリー》

現在・過去・未来の構成とインタビュアーとのインタラクションによって、ZUKAN インタビューだからこそ話した内容があること。

・札幌人図鑑でしか話してない内容ってのは、当然ありますけど。…（中略）…（西尾：札幌人図鑑出演の以前に登壇した TEDxKobe でしゃべりきれなかった部分って、どこに入っていました？）2 番（過去）とかは比較的そうじゃないかな。ほとんど。3（未来）とか 1（現在）は、ある程度、神戸で話していると思います。ある程度ですね。そんな細かくないですけど。（鈴木 17 項）

・一番上（現在）のメッセージは、多分、当時そのサンプリングで出してたようなメッセージとほぼイコールじゃないけど、ほぼ一緒なんですよね。だから、お誘いいただいた時も、あ、いいねって。今、言っていた話をちょっと図鑑でもしてよみたいなぐらいな感じだったので、それは伝えようと思っていた。そこは決めていて。ただなんかその、これからの事みたいなところで言えば、高校生に対するメッセージ、兼、過去から今までを伝え

られるメッセージなので、願望とかではあんまりない訳ですよ。だから、そういうところとか、3 番（未来）とか、2、3 番（過去、未来）とかは、サンプリングでも触れてないし。（古賀 11 項）

上記ヴァリエーションでは、札幌人図鑑以前にも、人の前で自身のストーリーを話す機会の会った 2 人のものである。TEDx は「アイデアを共有する」ものであり、事前に何ヶ月もかけてスタッフのサポートもうけながらシナリオを練って準備を整えた上で、多くの聴衆の前で発表をする。アイデアの発表ではあるが、そのアイデアの文脈としてその人のストーリーも重視されるが、現在・過去・未来全てを網羅はしない。2 つ目の「サンプリング」は高校生に向けて大学生が対話の場を提供する「カタリバ」のプログラムの一つで、大学生が高校生に向けて自身のヒストリーをプレゼンし、いろいろな生き方があるということを伝えるものである。この場合は自分のストーリー自体がメインとなるが、主に過去の経験からの学びと現在地であり、同じく現在・過去・未来を網羅するものではない。それぞれ明確な目的があり、それぞれに最適化されている。

このように、色々なメディアや登壇する機会があっても、特定のトピックやテーマについて語る場面が多い。それに対して ZUKAN インタビューはトピックの説明だけでなく、そこに至った過程や未来の話など、その人のライフストーリー全体を話してもらう。

多くの人は普段、自分が属している業界、人、相手にしか自分の取り組みを話す機会は少ない。このインタビューは普段話さないような相手や対象に向けて話をするので、共有されている前提が非常に少なく、そもそもの部分から改めて言葉にする機会となっている。そのことで、インタビュアーからの反応も含め、いつもと違う角度から自分を認知できる機会にもなっている。

さらに、興味深いことに、インタビュアー自身も、旧知の人へのインタビューにおいて普段では語られなかった知られざるストーリーを知り、非常に大きな発見や驚きを得られることもある。

・何が言いたいかっていうと、私娘を 50 年やっていて、そんな話が出てくるとは思ってないわけ。すごく近く、実家なんか私ずっと札幌だからね。もう親のことなんてなんでも知っているって思っていたのに、振り返ってどうですか？って聞くと、二人同時に「区画整理！！」って。びっくりした！！何の話！？と。何出てくるのと。だからすごく近い人でも、ちゃんと話を聞く機会って無いなと思うんですよ。親であっても、兄弟であっても。その時にどんな気持ちだったかとか、どういうことがあったのかっていうのをね。ざっく

りとは知っていても、その時の心の動きとか、背景とか、そういうようなことって、聞いたことが無いなっていうのをね。これちょっとたまに講演でネタにする話なんですけどね。だから一回聞いてみるとおもしろいよっていう、身内の話ね。でもこれも、ただ正月とかにお酒飲みながらなら出てこなかったって思うんですよ。私が「図鑑ですけど、じゃぁ取材します。お願いします。」ってパソコンを広げて、聞き始めたら、二人からジャララララララっと出てきた話。インタビューっていう、ちょっとした緊張感、ちょっとしたフォーマル感も、もしかしたら、一生懸命話そうっていうサービス精神を引き出すというか。そういう気持ちになるのかなぁって思いましたね。（福津 11 項）

身近な人でも日常の会話では話されないようなエピソードを持っておりそれがインタビューという少しフォーマルなフォーマットだからこそ引き出される。ZUKAN フォーマットというフォーマル感と傾聴するインタビューだからこそ知らなかった話を聴くことができる。

概念《浮かび上がってくる３つのキーフレーズ》

福津からの問いかけに合わせて話をしていたら、自然と３つのキーフレーズが作成されたこと。

・あの３つのタイトルとか福津さんが決めてくれた時に、私ってあの３つ自分で書けなかったから、福津さん話を聞き取った後に書いてくれたんですけど、私をまとめると私の話からこんな言葉が出てくるんだって凄く感激して。…（中略）…（福津さんが）まとめてくれたっていう感じです。そうだったそうだった！って自分で喋ったことが、３つ書いていただいて、自分で自分のことはまとめられないものなんだなって思いました。なんか、当事者すぎてよく分かっていないっていうか。（西尾：じゃあこれ出されたときに、そうそう！みたいな感じですね？）そうだった！そうだった。みたいな。納得しました自分で。（小川 12 項）

・普通に、その何話すかみたいなのは、多分福津さんがもう事前準備してくれていたのかな？ここんなのどうですか？みたいな。ある程度話して、ほぼほぼその通りに、なんかパパパッとなったので、あんまり苦労した感じはしてなかったですけどね。（鈴木 4 項）

ここで明らかになったことは、自分のことを他者が３つのフレーズにまとめてくれることの効果である。小川のように、自分で自分のことを３つに表すことは難しい分、自分のライフストーリーを聴いた第三者の視点で言語化されることのインパクトは大きいと言え

る。また、他人の目線からの言葉で表現をされることで得られる気づきや、ちょっとした驚きみたいなものがある。これは、後に説明する概念《自分のヒストリーが整理され、まとめられる》とも関連する。話す側は聴かれたことを話していると、インタビュアーがそれを聴きながらキーフレーズにまとめる。調査では、まとめられた３つのキーフレーズを見て、話している間に自然とまとめられたと感じる人と、こんな風に自分自身についてまとめてくれたのかと驚きを感じる人がいた。もともと自己内省が進んでいる人は自然とと感じて、自分のことを人に話す機会が少なかった人の方が驚きを感じているようだった。

概念《３つのキーフレーズ・歌・対談形式の映像撮影》

３つのキーフレーズを使う対談形式でのインタビュー撮影のため、素人でもスムーズに話をしやすいこと。

・収録の時はもう３本柱を立ててから始めているので、あとは福津さんがそっちに流してくれるので、全然困らないというか。（西尾：では本当に特に苦労することなく楽しく？）はい。隣にいて画面に３本柱が見えているので、３本柱がちらちら見えているから、あんまり困らないというか。（小川 12 項）

・研究者図鑑をみて、一番良いなと思ったのは、スケッチブックを持ってこうやってやっているっていう。それを一目見た時に「あ、打ち合わせが終わっているんだ。」って。打ち合わせが終わっていて、もしゲストの人が素人で話あっちゃこっちゃ飛んでも戻せる。これこれ、二つ目にいきますって。これだったら子どもでも爺ちゃん婆ちゃんでも話せるなって。これはきっと自分がコントロールしやすいっていうのは直感的に、最初見た時に思って。一番好感を持ったのがスケッチブック。これだったら誰でも話しやすいだろうなーって。自分も安心して素人相手に話ができるだろうなーって。あとは歌が面白いのと NIPIO 君がチャーミングだったのと。（福津 7 項）

３つのフレーズがあることで話がしやすいという感想は多く語られた。この３つに沿ってインタビュアーが事前打ち合わせで聞いた話を振っていくことで、「次はあの話ね」という暗黙の意思疎通が交わされる。そのことが、話慣れていない素人でも、展開をあまり気にしなくても比較的迷わずに話しすることができる形になっている。歌とまた以下のヴァリエーションのように、フォーマットに対するメタな視点で収録の仕組みへの関心を持たれる。

・あの雰囲気が穏やかじゃないですか、歌いながらやるのは。なんて言えばいいんだろう

な。凄く…いわゆる、例えば今、NoMaps とかイベントがあるじゃないですか。NoMaps 的なものとは、また違う感じの見せ方だなと思っていて。とりあえず、プレゼンテーションとか、能動的にプレゼンテーションをして、わーって喋っているリビドーみたいなものを伝えるような場じゃなくて。あえてちょっと穏やかな感じの雰囲気をつくることで、札幌人っていうものが、間口が広いけど面白いことをやっている人がいるみたいな…イメージを作ってくれているのかなって気はするんですけど。（山崎 18 項）

・国語塾の先生が来て「いやぁ私図鑑出たかったんです。福津さんに会いたかった。」って、3 つのキーワードのことを大絶賛していましたね。国語専門塾。「子供に作文書かせたりするんだけど、必ず「現在・過去・未来」時間軸を入れるように教えるんですよ。」って言っていて。ほんと福津さんのインタビューはそういうスキルがちゃんとできているなぁって思って、福津さんご自身がどういう背景の人か今日聞きたかったとかって逆取材をされて。（福津 8 項）

明確なフォーマットがあること自体が印象に残りやすい。システマチックな型があることの意義や意図から、この企画の趣旨の理解にもつながっている。

概念《著名人も一般人もフラットに人柄を伝える映像コンテンツ》

著名人も一般人もフラットに同じ形式で紹介し、インタビュー映像を見ることで人柄や意外な側面を知ることができたこと。

・最初の頃はある程度、社会的に成功した人みたいなイメージがあったんですよ。何となく。傍から見てる時は。でも、自分も出させて貰ったし、ラインナップを見たら色んな人が出ていたりするので、そうじゃないんだなってことを気付いたり、っていうのはありましたね。（山崎 18 項）

・昔大学にいた時に、映画の…中学生が映画を作るワークショップっていうののアシスタントプロデューサーをずっと五年ぐらいやっていて、その時に広報の一環みたいな形で、まだできたてだったぐらいの図鑑に子供たちをバッと送り込んで出演させて貰ったことがあって。…（中略）…子供達何人もで押しかけて。やらせてもらえたことがあって。（西尾：取り組みの紹介をした感じですか。）そうです、そうです。そのとき、子供達ひとりずつインタビューしてもらって。四人もいたのに。（西尾：順番に？）順番に。（西尾：毎回違う映像として？）そうだったかな…それでなんかそれをつなげたのか、ちょっと忘れちゃったんですけど。とりあえず、でも四人まとめてじゃなくて、その時ひとりずつ撮

って貰ったりとかしてて。それで、いい番組だなーっていうのはずっと思ってて。まさか自分が出るとは全然考えもしないまま。八年が過ぎ。それで、知り合いを通じて声を掛けていただいて。出演しませんか？っていう形で。それこそなんか、中小企業の社長さんが出たりだとか。でも高校生で頑張っている人が出たりとか。幅広！と思って。凄いなと思っていて。でも札幌で頑張ってる人だったら、誰でも何かみんな。福津さんがいい意味で見境がないから。先入観もないから。それでなんか取り上げてるので。そういう意味では凄いフラットで、いい番組だなと思って見てましたね。（大澤１項）

現在過去未来の流れに乗っ取ることの効果。ビジネスやプロジェクトなど実利的な情報を想定して見たら、趣味やプライベートな活動など意外な話をされていて驚いたという声もあった。想定していなかったような情報だったとしても、人柄がわかることは、実際に会ったときのコミュニケーションの潤滑として有用である。このように著名人だけではなく一般人の人柄までを発信するメディアというのはかなり少ない。その理由は、以下のヴァリエーションにて語られている。

・一般の人が 20 分自分のことを話していくっていうのは、「たとえ有名人が出たとしても、福津さんみたいなやり方はできない。」って（テレビやラジオ、新聞など）権益メディア人から羨ましがられるのは、数字が取れないから。例えば小学生、中学生が何か凄いことをやったからと言って来たとするじゃないですか。テレビだったらせいぜい 30 秒、1 分、せいぜい 2 分。だから 5 秒に対する金額がまるで違うわけですね。ラジオだって。ましてや札幌人図鑑は一般の人を撮っても、数字が取れなくても、J:COM っていうのはコミュニティチャンネルなので、地域の人にどれだけ親しんでもらえるか、っていうお題を札幌人図鑑でクリアできているので、もちろん数字は取れた方が良いんでしょうけど、権益メディアとはちょっと違うメディアにいるから、ほんとにちょうど良いところに納まったんですけど、ほんとにテレビの人からは、「あれはできないなぁ、数字の取れないものはできない。」って。ラジオの時も当然言われていたことですけどね。そこを気にしないで自分が取材したいっていう人に会って、聞きたいことを聞くっていうわがままを通せる、自分が好きに作れたメディアだった魅力がありますね。…（中略）…あとそれこそ数字、もしかしたら他のところでやったら、徹子の部屋っぽく、きちんとした番組にしていただいて、図鑑ではなくなっちゃったかもしれないですね。結果的にやっぱり今も人選も含めて自分でさせていただいているんで。やっぱり徹子の部屋みたいに、がっちり、きちんとした番組にしていただく半面、人選とかも自分ひとりじゃ当然できないでしょうし、

スポンサーのことを考えて、数字の取れる番組を作る人に、もしなったとしたら、半分素人テレビキャスター的な、半分タレント的な、そういう感じの位置づけで、札幌人図鑑主宰の今みたいな動きになってはいないと思うので。自分としては今の方が自分らしく働けているかなぁと思いますね。（福津 3 項）

このように一般的な民放では様々な制約があり、ZUKAN インタビューのような形式でインタビューの番組を作成することは困難であることがわかる。ZUKAN インタビューが持つ市民メディア的側面が表れている。

カテゴリー【人にフォーカスするインタビュアー】

このカテゴリーに該当する概念は《インタビュアーの出演者に対する関わり方》《インタビュアーからの質問》《目の前の人のリアルに焦点を当てる》《お茶会のような気楽で楽しいインタビュー》の 4 つである。ZUKAN インタビューに関わらず、インタビューはインタビュアーからの問いや関わりが無ければ始まらない。札幌人図鑑の調査においても、インタビュアーの能力や姿勢、人柄などによる影響を示すヴァリエーションが多数出てきた。それらの中から出てきたのは、インタビュアーによる質問、関わり方、焦点の当て方、雰囲気の 4 つの切り口である。中でも一番多くのヴァリエーションがあったのは、《インタビュアーの出演者に対する関わり方》であった。出演者にとって一番印象や影響が大きいことがわかる。

概念《インタビュアーの出演者に対する関わり方》

インタビュアーから自分の話を受け入れてくれているという安心感や、自分に対して興味を持ってくれている姿勢を感じると、その気持ちに応えたいと思って一生懸命話そうという気持ちになったこと。

・いや、すごく話しやすかったです。多分受け入れてくれて、そのまま受け入れて「そうなんだね。」っていう。だから自分からどんどん最後は喋ろうっていう気分で。（小川 15 項）

・キラキラしてたんですよ。わかりますよね、あのんーってなってるその顔も、ハイトーンで落ちなかったんですよね。ずっとお話が、そこでさらに上がるっていう感じだったので、これはすごいと思いつつ。（福津さんが私を）好きでしたね。だからすごい嬉しかったし、私結構乗っちゃうので、どんどんどんどんしゃべっちゃって、それで打ち合わせが 1 時間以上掛かっちゃったっていうこともあるんですけど、やっぱりそこは面白かったな

って思います。（朴 14 項）

多くの人がインタビュアーからの関わり方について言及をしている。まず、『話を受け入れてくれる』『好奇心や興味を持ってくれている』という姿勢を感じることで、ついつい自分から話をしてしまったという、受容的態度による効果が見て取れる。その他、インタビュアーの質問や相づちの打ち方やテンポといった関わり技法が出演者の安心感や、質問に対してできるだけ答えようとする前向きな気持ちにつながっていた。それが土台となって、《インタビュアーからの質問》がどのように作用したかを見ていく。

これらは Ivey（1978）のマイクロ技法、特に基本的かかわり技法に一致する。かかわり技法とは具体的には、受容的態度、好意的関心、ポジティブな姿勢、話すスピード、相づち、聴き方など。特に傾聴の受容的態度の効果が顕著に出ていた。

同じ話し手でも、インタビュアーが違うと映像で話される言葉や見た人からの話し手の印象は違ってくる可能性がある。カウンセリングでは話し手の声のトーンや大きさ、速さに合わせることを重要視している。インタビューにおいては、インタビュアーのキャラクターもメディアとしてのインパクトを考えると重要なので、インタビュイーの素の情報を伝えることも大事だと捉えると、どこまで研修をしたり統一を試みるかは検討が必要である。しかし、インタビューであっても、カウンセリングの基本的関わり技法に示されているように、インタビュイーへ好意的関心を持ち、傾聴しているという態度を表すことが、インタビュアーの自己言及に影響を与え、創造的個の強化へとつながる。また、そもそも声をかけてくれたという事自体に、自分に興味を持ってくれているから応えようというも心理になっていたという例もあった。つまり、インタビュアーのインタビュイーへの関わりはとても重要であると言える。実際、インタビュアーの福津も、以下のように相手との関わりや関係性の構築を重視している。

・だから私のインタビューここしたいんだっていうのも、ゲストの人と、最初のカメラが回る前のインタビューのところでどれだけ仲良くなれるかっていうのもほんとにキーで。だからほんとに気持ちが通ったって思う瞬間になるまで待つ。そしてそれをちゃんと待ってから、なんとかかんとかなだめて、お話したい、ここお話したいだろう、っていうところを掴んでから回すようには、頑張ってきたんですけど。（福津 17 項）

上記のように、これは専門的なスキルの部分もあるが、必ずしもその熟達がなければ実現できないというわけでもない。以下は、小川による札幌人図鑑ではない機会でのインタビューの経験についてのヴァリエーションであるが、紹介する。

・札幌人図鑑の１年前だから、去年の春先なんですけど、高文連の放送の大会に出る生徒の、私、インタビューを受けたんです。…（中略）…一所懸命私のこと１時間ぐらい、ずっと私の話を聞いてくれて、その時に人に聞いてもらうと、普段目の前のことにいっぱいいっぱいで、全然考えてなかったことを。そこで初めてなんか自分を振り返ると私がこういうものってできた原稿を読んだ時も感激したというか。私ってこういう人だったんだな、この子からみてこういう風に見えているんだっていうか。そういう文字になっているものを見ることがないから、なんかものすごくそれが自己肯定感につながったりとか、整理につながったりとか、今聞かれた項目のことが、ばっと一気に高まるじゃないけど、なんかそういう経験をしました。その時。つたないですよね。あんな上手な福津さんみたいなのじゃないけど、すごいあれの倍以上の時間をかけて生徒が一所懸命私の話聞き取って、聞き出そう聞き出そうとして、…（中略）…聞き出そうって一所懸命してるから、こっちもしゃべらなきゃしゃべらなきゃって、なんか一生懸命自分の、今まで考えてなかった自分のことをまとめようとまとめようってして、向こうは聞き出そう聞き出そうってなんとか頑張っていて、なんかそれが、ものすごい自分の自信につながった記憶にあります。（小川５項）

インタビュー経験もなく、社会的コミュニケーションの経験もおそらく多くはないであろう高校生によるインタビューだが、相手の一生懸命さに心を動かされ、答える側も一生懸命答えてあげようという気持ちになった様子が伺える。さらには自分自身の気づきや自己肯定感、自信にまでつながった。ここからインタビュアーとしての姿勢の大切さを見出すことができる。

概念《インタビュアーからの質問》

最初の質問の入り方によって、その後の話し手の話やすさに影響があること。

・「これ何ですか？」って言われて、「これは…。」って喋る方が得意。自分のことを話すより。もののことを話すほうが得意なので。（西尾：それは面白いですね。まずは物とか、もしかするとか活動とか。）そうですね。そう思いますね。いきなり自分の深い話をされると、ちょっと全然言葉が出てこなかったかもしれないですけど。それはあるかもしれない。（大澤10項）

・聞かれました。あのホームページの、そのイベントのプロフィールにそういう風に書いてあったので、それを見ながら、たぶんここを抜き出していけばいいじゃないかみたいな

感じで。多分、本当にそういう「過去・現在・未来っぽいことをまとめていこう。」って、福津さんが仰ってくれていたような気が。（山崎９項）

ここでは、インタビュアーが出演者について、以前から知っていたり、事前に調べたりした情報を基にした質問からインタビューがスタートし、最後までスムーズに話ができたというヴァリエーションが多かった。現在・過去・未来のうち、現在の活動内容や関連する物品など自己紹介的なところから入ると、話をしやすいと答えている例もあった。

反面、生い立ちなど過去のヒストリーから質問がスタートしたことで、過去のどこから話せばいいのか迷いが出たり、その後の展開が広がりすぎたりして、少し戸惑いが生じたというヴァリエーションもあった。

インタビュー開始時の話しやすさは、その後の話の展開に大きく影響する。そのため、過去から質問をスタートするとしても、問いのオープンさ（抽象度の高さ）を抑え、話し手が話す内容や的を絞りやすいように問いかけていく方が、話し手にとっては気楽に話ができる。

概念《目の前の人のリアルに焦点を当てる》

過去の実績に引っ張られず、また、活動や商品の紹介ではなく、その人自身のリアルを引き出すインタビューであること。

・（西尾：例えば、その知り合いの人のを見た時に、どうですか？意外に知らなかったこととかありました？）知らなかったこともあるけど、知っていて、何かこの人のこういう部分、みんなに知ってほしいなって思っていたのが、ちゃんと紹介されているっていうのが、逆に嬉しいというか。この人こんな魅力的なのに、どうやったら知ってもらえるだろう？って思っていたところが、引き出されてたりすると、そっちの方が嬉しかったりとかしましたね。そう、それが一番…木村さんの時とかも、その活動を頑張っているので、それが凄い嬉しいなと思って。（西尾：じゃあ、個人でコツコツ頑張ってやってるけど、なかなか大きく知られる機会がなかったりする人が取り上げられるので。）そう、そうなんですよね。それが嬉しいなと思って見ていました。（大澤３項）

ここでは、会社の社長も中学生も誰でも変わらず、過去の実績や肩書などに引っ張られずに、今目の前に座っているインタビュイーであるその人自身にどれだけ焦点を当てられるかということが、その人自身のリアルを引き出せるかにつながるということが言える。それにより、他では話さなかった内容や事柄だけでなくその人自身についての新たな一面

など、引き出される情報や札幌人図鑑だからこそ話してしまう内容が生まれてくる。この要素はインタビュアーである福津も重視しており、いくつもの関連するヴァリエーションがあった。

・私みんな自分の宣伝に使いたがるだろうって思ったんですよね。営業営業したら嫌だから、ちょっと営業っぽい感じになりそうだったら、最初にちょっと釘を刺して、「人物図鑑なので、人となりに触れますので」って。そこのとこを中心に話してくださいってお願いしてから取材に入るのね。今こうだってことが宣伝になってもいいんだけど、そもそもそういう風になったのはなんで？っていう原体験のところを図鑑的には厚めに聞きますというのを最初に釘刺すんですよね。そしたら「そうですよね。分かりました。分かりました。」って言って、そこのところを一生懸命話してくれるので、結果的にホームページに貼りたいものにならないのかもしれない(笑)。あんまり人にね、嫁にも話したことないようなこと言っちゃったとか。できれば誰にも見られたくないみたいに言いながら去っていく人もいるから。（福津 11 項）

・意外とだから過去のことは毎日だから調べてないからね。過去の名誉を取材してないところも逆に良いのかもしれないね。目の前のリアルだけを追いかけるっていうか。ちゃんと遡って調べたにしても、基本やっぱり目の前の最新の話、他のメディアでしゃべってないようなことを引き出そうと思うわけじゃないですか。だからやっぱり目の前のリアルをねと思うので、あんまりだから、「昔偉い人だったんですってねー。」って言って 5 分が 10 分に伸びたところでね。（西尾：出演者の人をあらかじめリサーチするというのはあんまりしないで、目の前で聞いた話を大事にするということですね。調べるとそれに影響を受けて、ウェイトのかかりかたが変わったりもしますし。）まぁ良し悪しで、終わってからね、「あー、この人が来て、なんであの話聞かないのー。」って言われて、調べたらいや本当に大事な話聞かなかったとかそういうことはある。そういうこともあったし、色々だよね。怒られたこともあったし。（福津 12 項）

また、札幌人図鑑で話したリアルな自分の話を聞いてくれた知人と、その後の関係性が変わったというヴァリエーションもあり、カテゴリー【映像配信後の変化】にもつながっている。

概念《お茶会のような気楽で楽しいインタビュー》

お茶会やおしゃべりのような楽しい雰囲気で行われることで、心理的な安心感や話やす

さにつながったこと。

・なんかやっぱり慣れてないねって感じで。やっぱりずっと裏方だったので。しゃべり慣れてない感じはあったんですけど。でも何か凄い楽しかったですね。（西尾：緊張もしつつだとは思うんですけど、話しやすさとかそういうのはいかがですか？）凄い話しやすかったし、あれ、福津さんお一人で全部収録されてるじゃないですか。だから余計おしゃべりみたいな感じで。それが良かったですね。（西尾：じゃあ、福津さんとおしゃべりしてる感じ？）そうです。いきなり、スタッフさんがいっぱいいて、お客さんもいて、みたいになったら、もうヤバかったかもしれない。福津さんも自由に、ちょっとカメラ止めたりしながら。「ちょっと今のエピソードをもうちょっと膨らまして、もう一回話しよう」とか。二人で。そういうのもやったりしながら。結構自由にやれたので。次この話何分で撮ろうみたいな感じとかやったりとか。それはすごく楽しい…なんか楽だったというか。（大澤 9 項）

・福津さんと楽しいお茶会をした気がしました。その前はどちらかというと取材みたいな印象だったんですけど、そういう風に結構がっつり取材を受けてやるんだろうなと思っていたところが、ハードルが良い意味で下がったというところはあります。楽しいお茶会を 2 時間位スタジオでやったっていう感じの、たまたまその様子が放映されたっていう気持ちですかね。（朴 16 項）

ここでは、福津とのインタビューがまるでお茶会のような楽しいものであったというヴァリエーションが多かった。「取材」や「番組収録」に対するフォーマルなイメージから、最初は緊張をしている人が多い。しかし、打ち合わせが始まると、インタビュアーの明るい雰囲気や好意的関心といった態度などを通じて、心理的に安心安全な場となり、「お茶会」や「カフェ」のようなインフォーマルな空気感となる。収録に置いては、インタビュアーが一緒に映り、インタビュアーとのインタラクションで語ることが同様の効果を生み出している。加えて事前打ち合わせでの関係の質と文脈の共有が高まっている為、お互いに何を聞いて何を話せば良いのかが、ある程度阿吽の呼吸でできるようになっている。それらを通じて、スピーチのように意図や目的があるのではなく、自然体な人柄を伝える映像を撮影することができる。

一方で、テレビの番組になる、インターネットを通じて人に見られることを意識して、「どう見られたいか」ということを考えて話をしたというヴァリエーションもいくつか見られた。そうでなくても、撮影となると、どうしても 100%その人の素の表情や言葉とは

ならない。しかし、そうしたフォーマルとインフォーマルの間にあることも、人それぞれの反応や思考を引き出し、広い意味でのその人らしさにつながっていると捉えることもできる。

カテゴリー【自己認知が強化された出演者】

このカテゴリーに該当する概念は《自分のヒストリーが整理され、まとめられる》《自分の原点と現在地に対する認知が強化される》《応援されることで自己肯定感の向上や強みの自覚につながる》《未来を語ったことによる一歩踏み出すことへの勇気づけ》の 4 つである。

ZUKAN インタビューのフォーマットとインタビュアーの関わりを通じて自身のストーリーを語ることで、さまざまな気づきや効果、変化が生まれ、自己認知が強化された。

概念《自分のヒストリーが整理され、まとめられる》

人に聴いて整理してもらって、自分を振り返ることができたこと。

・あんまりそんな自身を深く振り返るというか、今いる私はどうやって作られたのかとか考えたことって無いです。だから逆に福津さんに色んなことを整理してもらって、自分がすごいなんか「自分ってこうだったんだ。」って見えてきたのが凄く面白かったです。話聞いてもらった時に。（出演する前は）自分を知ってる度合いは 1 です。…びっくりするほど、自分のことなのに自分が知らなかったから、本当にそのことが一番の収穫でした私。札幌人図鑑に出た時。私ってこうだったんだみたいな。（小川 3 項）

・研究に対する発見はあんまり無かったように思います。作品とかも、作品に対するものよりかは、自分への発見ていうと今までのやった経験とかが、点だったのがすぐに私が自分なりに線で引いてたんですけど、それがもっと強くなったっていうか、別のつながりが見えた位で、過去と現在をつなぐ線が強くなったようなイメージはあるんですけど現在の点が大きくなったっていう感じではない。（朴 20 項）

第三者に話を聴いてもらって、整理をしてもらうことが、自分を振り返り、自分を知る機会になる。自分で自分を振り返る機会というのは普段あまりない人が多い。また、自分だけで振り返っても気づかないこともある。インタビューを受けることで、ライフストーリーや人生という自分が持つ文脈の強化になる。文脈の中で肯定したり、今の立ち位置が分かったり、文脈の延長線上で未来への道筋がみえ、エンパワーメントにつながる。やっ

ていることそのものへの気づきよりは、ひとつひとつの点在している経験をつなぐ文脈、一貫性が明確化される人もいる。

概念《自分の原点と現在地に対する認知が強化される》

何のために自分は今これをやっているのか、という源泉に立ち返ることができたこと。

・話をまとめてもらった時に、気づいたというか。あ、そうだったんだみたいな。（西尾：例えばどういったところですか。）なんで自分はダンスとずっとかかわってんのかなとか、すっごい正直に言ったら、自分が赴任した時に、今の学校でダンス部立ち上げてもらったから、私転勤するまでダンス部やめられないんですよ。だからやっているんですけど、「辞めたい。」って言ったら「ふざけんな。」ってみんなに言われちゃうんだけど、だからやっているって感覚で毎日過ごしていたけど、そうじゃなかったなって気分になるというか、「教育的に意味があるからダンス部やりますよ。」って言って、ダンス部の設立書を確か８年前に書いたなと思って、でも教育的意義とかって毎日教育的意義はとか考えることは一切なくて、明日の練習どうしよっかとか、もっと体幹つけるにはとか、この間練習あれが上手くいかなかったから、明日絶対あれ入れなきゃとか、始まる時間いつも遅いからそのことちゃんと伝えなきゃとか、そういう具体的な話しか、普段考えないで生きているよねと思ったけど、じゃあなんで結局何のためにダンスやっているんだろうみたいな、部活で、学校でダンスやることに意味があるっていうかそこでしかできないことをやろうと頑張っているはずだったよね、私は。そういうのが見えるというか。（小川 11 項）

・これ、意外と昔なりたかった自分に、現在過去未来で話して、あの時なりたかった自分になれていたなとか。「意外と自分の人生は悪くないよね、福津さん。」って言われることはあります。それはよくある。SMAP みたいだねって言うと笑われるんですけど。「あの頃～の未来に～僕らは立っているのかな～」っていいながら(笑)。でもほんとにそういうのを振り返るっていうのって、スガシカオがさ、テレビで、ほんとは国語の先生になりたかったんだってね、あの人ね。高校の国語の先生になりたかったんだって。だけど僕はミュージシャンになったけど、でも若い人に言葉でね、言葉を教えてあげる、元気づけたり、言葉で元気づける仕事がしたくて高校の教師になりたかったんだけど、僕はミュージシャンになって、違う形で言葉で若い人に元気を勇気を与えているって考えると、僕は若いころなりたかった自分に、夢が叶ったってことになったって言えるのかもしれない

ねって言っていて。で今までのゲストが言っていた話と合致して、「そう！そうだよ。スガシカオ！」って思いながら聞いてたところはあるね。その類のことはよくゲストの方が言ってくれるし、自分の夢の叶え方って色々だなって思うんですよ。それがその通りじゃなくても、形を変えて、やっぱりみんな自分の夢を叶える方に自然と向かっていくんじゃないかな。掻き立てられるものがあって、こう動いていく、何かきっかけがあると、たまたまそこがばぁーっと開けていくみたいな。やっぱりその、先生になりたかった人が先生になるのだけがゴールじゃなくて、スガシカオだとミュージシャンになれたっていう、その類のことってあるよねって、ゲストの人と盛り上がったことがありましたよ。（福津 10 項）

自分の原点や自分がなぜ今これに取り組んでいるのか、という本質的なことに気づく。話しながら気づく場合と、３つのキーフレーズという形となったものを目にして気づく場合がある。

前者は【人にフォーカスするインタビュアー】からの質問や関わりを通じて、自分の過去や心の中を振り返り言葉にして語ることでの効果である。これは、札幌人図鑑以前に、自分のことを話す機会（たとえばメディア出演や TEDx への登壇など）があった人は、すでに経験をしているため、札幌人図鑑で改めての気付きというものは少ない。

後者は【決まったフォーマットを使用したインタビュー】により、語ったことがフレーズとしてまとめられ、可視化されることの効果である。これは ZUKAN インタビュー独自の型であるため、札幌人図鑑以前に自分のことを話す機会があった人でも、気づきにつながることは多い。特に 2 つめや 3 つめのような内容まで全部という機会は ZUKAN インタビューならではという感想が聞かれた。

また、新たな気づきだけでなく、もともと自覚をしていた自分の考えや意識についても、インタビュアーによってフォーカスされることでより強化されるという効果もみられる。特に人生やキャリアのターニングポイントのタイミングで取材された人にとっては、その意味が強調されエンパワーメントされたということの分かるヴァリエーションもあった。

概念《応援されることで自己肯定感の向上や強みの自覚につながる》

聞いてくれる、認めてくれることが自己肯定感につながったこと。

・そうですよね。でも、結構私の言葉を拾ってくれたので、有り難いなと思って。それこそなんか、その 3 つのキーワードの中に、確か『身銭を切る』みたいな。あれを凄く面

白がってくれていて、福津さんが。「それ絶対言った方が良い。」みたいな感じで。あ、そうですかって。そういう、何か自分がどうやったら客感性を担保できるか？みたいなところで、私は「身銭を切ってやっているんだ。」っていう話をしたら、それは絶対言った方がいいみたいな。あ、そうなんだって。逆に、自分の売り出しポイントじゃないですけど、どういうところを大事にしたらいいのか?みたいなのを教えてくれた感じがしますね。（西尾：それは話しながら、そこ大事みたいな？）うん。「そこは凄い大事だと思うよ！」みたいな話とかをしてくれて。そういうことなんだと思って。それって強みになるんだと思って。（西尾：たまたま、ぽろっと言ったぐらいな感じですか。）あぁ、ぽろっと。これ、どうやって買っているの？って言われて、「自腹で。」って言ったら、そういうの絶対言った方がいいよみたいな。あ、そうなんだ…と思って。（西尾：提供されるのではなく。）そうです。自分で買って、いいと思ったものしか、自分の薄い本には載せないだみたいな話をして。買ってよかったっていうもの。自分の価値観を信じているみたいな。そういうのは凄く大事にした方がいいみたいな。そうだなーと思って。（大澤 6 項）

・それこそ、帰りの車で、斜めの…2 つ目のメッセージの斜めの関係の部分とか、あとはマイプロの話とかをしたんですよね。古賀はやりたいと。そしたら、なんかそれに対して、「応援するよ。」みたいなことを福津さんが言ってくれた。でもって、モチベーションとさっき最後に出た部分で言えば、上がったところはあったとは思います。実際関係はつながっていきましたしね。（古賀 17 項）

自分自身の取り組みや経験といった事柄や、自分のパーソナル全体に対して興味を持ってもらい、受け入れてもらえることが、これまでの人生や自分自身を肯定されたという気持ちになる。また 1000 人以上にインタビューをしているインタビュアーから「それ、あなたの強み！」と言ってもらえることは大きな励みになり、その後の活動でも強調されるようになる。概念《自分の原点と現在地に対する認知が強化される》での自ら語ることや文字を目にすることを通じた能動的なエンパワーメントに対し、インタビュアーからの好意的関心および価値観や能力に対するお墨付きを通じた受動的なエンパワーメントと整理することもできる。

概念《未来を語ったことによる一歩踏み出すことへの勇気づけ》

最後に未来を語ることで、やっていけそうな気持ちになり、一歩前に踏み出す後押しとなったこと。

・あとは言ったら変な言い方だけど、言うと実現するというか、言ったものに対して自分がぐいぐいぐいぐい歩き出すなと思って。それが自分でもびっくりしているというか。具体的には、私学校教育の中で、ダンスってどうしたらいいのかって一生考えていきたいなと思っていて、そのためには、今勤務している高校の中のダンス部をどうしようかばっかり一生懸命考えていたけど、そうじゃなくって、学校全体とか、北海道全体となんかそういうことをやがては考えられたらいいなと思っていた。薄っすらそういうこと考えながらこれ出ていたんですけど、そういうことを自分はするんだなって気分になって、あそこでいろいろ喋っているうちに、今年北海道のいつも出ているダンスドリルの大会の北海道事務局を引き受ける今やってくれている人がすごく年齢が上の方なので、それを引き継ぐ。ダンスドリル大会があって、北海道大会の事務局をやっている方がもう引退、教員引退した方がやってるんですけど、今度 70 歳になるから、緩やかに誰かにバトンタッチしたいって言って、引き受けませんかって何人かに声をかけた、その人が声かけたうちの 1 人が私だったんですけど、なかなかみなさん校務が忙しいからって引き受けなかったんだけど、なんかこれって私の多分やりたかったことっていうか、やったら色んなことが実現するのかもしれないと思って。迷っても最後には勇気がでて引き受けられたから、引き受けたら全国大会の全国大会のお手伝いに行きませんかって話がきて、今年駄目だったんですよ、全国。うちの学校出られなくて自分が引率教員になれなかったから、全国縁がなかったなって思っていたら、役員として視察に来ませんかって言われて、でも今 3 年生の担任だから面談があったり講習があったりとか、夏休み中書類作成とかなんかいろいろあって、いけないっていうか、行ったら忙しくなっちゃって嫌だなあって気分、うーんって考えていたけど、でも行ったらまた向こうで、ほかの地区はどんな風にやっているよとかって話も聞けるかもしれないしとか、なんかちょっと自分はこういうことやりたかったんだっていうのを、まとめてもらったことも私多分後押しされて行くこと決められたりとか。結構勇気をもって自分で決断できたことが、春からこの夏にかけて培ったもので、勇気をもって行動する原動力になったなっていう気分になっています。（小川 16 項）

・私、手帳をつけてるんですけど、その手帳が三年後の、三年間の目標みたいなのが書けるのがあって、一年後何する、二年後何するみたいな、それも自分で何となく書いてたんですけど、図鑑に出てバーッて言っちゃったし、これはもう叶えなきゃいけないもんだみたいな。夢がただの夢じゃなくなったみたいな。目標になったみたいな。そういうきっかけになったかもしれないです。ぼんやりあぁやろうか、テレビ出たいなーと思っていたり

とか。もっと頑張りたいなって思っていたのが、これはもうやらねばならないっていう風になったなと思って。輪郭がビシッと決まったって感じになりましたね。（西尾：日記にもそういう書き方が変わったっていう…？）すごい具体的になりました、書き方が。誰誰に会うとか、どういうメディアに出る、みたいなのとか。こういうグッズを取り上げるとかって。書き方が具体的になったような気がします。（大澤 15 項）

未来の話をして終わると、心が定まった気分や、具体的に決まっていなくてもやっていけそうな気持ちを持ち帰ることができる。３つのキーフレーズの最後が未来であることにも意味があり、映像の終了前に宣言をする形に近い。そのことで出演後、入ってくる情報に対する感度も高まる。実際に新たなチャンスが舞い込んだという事例もいくつかみられた。その際、《自分の原点と現在地に対する認知が強化される》ことや《応援されることで自己肯定感の向上や強みの自覚につながる》ことによるエンパワーメントが、勇気を持って一歩前に踏み出す後押しにもなった。

小川のヴァリエーションには、このカテゴリー全体の各概念の流れも含め、具体的に表れている。自身のヒストリーが整理されて３つのフレーズにまとまり、自身の日常の原点、源を再認識し、自分自身について応援してもらったことで、臆せず未来を語ることができた。そして未来について語ったことで、その目標へのチャンスとなる情報へのアンテナが立ち、実際にチャンスが訪れた際には、勇気を出して足を踏み出すことができたのである。大澤のヴァリエーションでは、未来を語ることで、目標が明確になり行動まで変わってきたことが表れている。どちらも ZUKAN インタビュー出演したことで、一歩を踏み出すことにつながり、未来も変わってきていると言えるであろう。

カテゴリー【映像配信後の出演者の変化】

このカテゴリーに該当する概念は《知り合いからの反応で喚起される感情および相手との関係性の変化》《知り合いへの活動紹介や近況報告としての効果》《自己紹介や仲間募集ツールとしての活用》の 3 つである。インタビュー映像が配信されたことによる、周りの人たちからの反応や効果、活用などにまつわる概念群である。

概念《知り合いへの活動紹介や近況報告としての効果》

身近な存在だが普段改めて深く話す機会のない人たちにも、自分の近況や取り組み、背景を知ってもらう機会となったこと。

・反応はありましたね。それこそ Facebook に、多分すぐ載せたですよね。今調べていたんですけど。多分、その日に載せたら、割と反応が。この当時、そんなに何か反応ある人…Facebook のアカウントじゃなかったですね。ある程度くる時もあったけど、そんなにそこまでだったので、札幌人図鑑に出たたみたいなのを載せたらかなり反応も来たし、なんか内容に関しても、色々…普通になんか、いいね、凄いね、みたいな反応とか。それこそ…悪い顔している。みたいなのもあったりして。結構反応はあったし、SNS ではこういうのも。直接見た人から、なんか、見たよみたいな…ていうのもありましたね。（古賀 15 項）

・韓国の人は何なのかよく分からないのに出演されているっていう話になっているわけで、結構韓国の学生時代からの友達とか先輩後輩とかに、札幌人図鑑を説明するようになったっていうところがあります。「地域のそういうメディアで、実は研究者図鑑というところから来ていて、札幌の色んな人がインタビューを受ける、自分の話をするメディアであって、それを札幌人図鑑て言うんです。」って言ったら、みんな「えー！札幌人になっているー！」っていう感じで伝わったんですけど、それに出たっていうことで、みんなちゃんと落ち着いて活動しているっていうか、地域に根付いた活動しているんだなっていう安心感を与えたらしいです。それは全然狙ってもなかったし考えてもなかったですけど、そうですね。（朴 17 項）

ここでは、朴のように、遠方にいる久しぶりの知り合いに対して近況の報告や過去の思い出の振り返りになったというヴァリエーションが複数見られた。多くの人は Facebook を通じて配信を知り、Facebook を通じて感想を伝えていることも分かった。一般的に、「身近だからこそ自分の話をする機会がない。」「親子のような近い存在でも知らない話は多い。」「自分からは気恥ずかしかったりする。」というようなことも、第三者のインタビューという形を通して自然と伝えることができたという結果につながっていた。

映像だから伝わる様子、時間を越えたその人の変化や、逆に変わっていないこと、元気そうだという様子を、久しく会っていない人に対して、非常に効果的な近況報告スタイルになる。場合によっては言語を超える。言葉がわからなくても元気そうだなとか、そういったものが伝わる。

札幌人図鑑収録の際に「札幌人図鑑に出演」という記念撮影のボードがあるので、それを使って出演しますという告知ができ、また、見た人が見ましたよという反応も Facebook を通じてコメントをされる場合が多い。ZUKAN インタビューのシェアのツー

ルとしての Facebook のウエイトが大きいのではないかと考える。対して Twitter を通じて知らない人から反応があったという事例もある。SNS でも種類によってアプローチできる層や反応の返り方が違っているのかもしれない。

概念《知り合いからの反応および相手との関係性の変化》

周りの知り合いからさまざまな反応があり、そのことが自身のエンパワーメントや、さらに、その人との関係性の変化にもつながること。

・札幌人図鑑って、結構多分、社会人には浸透している気がするんです、札幌の。なので、その、そこに出たよって言うと、これから頑張っていくんだな、一人で、みたいなイメージを持たれました。だから、札幌商工会議所に当時一年間いたんですけど、「図鑑出たんです。」って話をしたら、もう着々着々とじゃあ…みたいな感じで。一人でやるステップみたいな印象みたいな感じ。当日、結構ドタバタしていて、あんまり直接的な反響を聞いてないですけど、でもなんか北大の学生って、多分そこまで知らないと思うんですけど、でも社会人の人には凄く浸透しているみたいなので、そういう人からはそういう風な反響をいただきましたね。（山崎 13 項）

・あと、周りの人の話なんですけど、部活の自分のダンス部の生徒たちがすっごい宣伝したわけでもないですけど、みんな見てくれて、それが凄く良かったっていうか嬉しくて、こういう思いをもって顧問やっていますよって知らない時よりも、「あの話を聞いたよ。」って生徒が言ってくれた後の方が、生徒たちが一生懸命取り組むっていうか話を一生懸命聞こうとしてくれたりとか、そこに関わってる人の思いを生徒が知るっていうのも悪いことでないような気がしたっていうか、意味のあることかもしれないなっていう風に思えました。（西尾：特に「見なさい。」って言ったわけでもないのに見てくれていたんですね。）全然です。（西尾：でもそれも普段からの関係性がいいというか、それこそ信頼関係があるから、小川先生が出ているみたい感じで。）誰かが貼り付けたんでしょう。ツイッターに貼り付けてバーッてなって。（西尾：そういう意味ではなにか伝えたときの意図も組み取ってもらいやすくなって。）それです。それだ！肯定的に嫌なこと厳しい要求をする時とかに嫌なこと言う人とは違う受け取り方をして、なんでこの人これ言ってるんだろうって一応みんな考えるようになるというか。その方が楽だから、この人言っているとかそういうこともちょっと違うところの何かを探るようになったと思いますね。（西尾：それ凄く大きい変化ですね。）有り難いなと思いました。（西尾：すごい良いですね。す

ごいな。凄く嬉しいですこういうの。）多分一生懸命やらないと、生徒も一生懸命やらなくて、でも伝わりきらない何かが多分、言葉にしないと伝わらないこともいっぱいある部分を、色々この札幌人図鑑を見たよの後の生徒の様子を見ていると、助けてもらったんだなって思って。私がこう思ってやっていますみたいに言い切れないところを。（小川 22 項）

配信された記事や映像を見た人から、さまざまな反響がある。まず札幌人図鑑に出演したこと自体について、その人が地域や社会に対して意味のある活動をしている、もしくは人生の中でなにかしら前に進むステージにたどり着いたという印象を与える。そして映像の中身まで見た人は、普段よく知っている人の意外な一面、普段の言動の背景や意図、将来の目標などを知ることができる。

それは相手への理解や共感につながり、いくつかの事例ではさらに関係性の変化までみられた。たとえば小川のヴァリエーションでは、映像を見た生徒の小川の言葉に対する信頼感や部活動での自発的な規範の形成が見られる。これは Patnum 概念における結束型のソーシャル・キャピタルの強化もしくは性質の変容ということができる。

概念《自己紹介や仲間募集ツールとしての活用》

知り合って間もない人に対して自分自身のライフストーリーも含めて知って貰う機会になったこと。

・（西尾：自己紹介がわりに？）そうです。これちょっと見て貰ったら、みたいなことが分かるかなとか。あとはやっぱり、それこそ、あれってでも、北大生も道外から 6-7 割来てるから、ああ言えば伝わるのかな。道外から来て、こういう来歴があって、こういう研究始めたみたいなのって、多分あんまりああいう感じのパターンで研究を続けていきたいっていう人はあんまりいない気がするので。本当はもっといた方がいいって、僕は思っているので。そういう仲間ができたらいいなって思っているので。北大の中で若手研究者レーベルみたいな（笑）。思っているので、そういうのに使いたいなって気持ちは。（西尾：直接研究の内容というよりは、その研究のバックにある文脈みたいなものを…）そうです。そういうたどり着いた、こういう研究の仕方とか、研究者の生き方とか、姿勢とかっていうので、こういうのもあるんだよ、みたいに。でも、こういうことを思っている人、多分いるんだろうなみたいな人のことを思っていて。そういう仲間が見つかるんじゃないかな、みたいな気持ちはあるので。そういうときに、ああいうのがあるといいのかなと。

（山崎 16 項）

・わざわざここに来なくても、ママ図鑑見ました、でどっかで誰かがつながったりできるかもしれないし、私が本当は性格的にはあんまり、引きこもりとか好きなんですよ。だから逆にここでやるのが自分的にはいいというか。でもあまりにも引きこもりすぎていると、人としゃべらないとどんどん、特に赤ちゃん時代の子育てをしている時っていうのは大人としゃべりたいっていう欲望があって、大人と言っても夫じゃなくて同じ立場の人としゃべりたいっていうのがあって。なのでこういう活動をしている人いるんだって知ってもらえたらいいし、来 mama ルームのことも知ってもらえたらいいしと思って、けっこう私も普通だと思っているんですけど、自分で。普通の人がちょっと踏み出せば、いろいろできるんだなとか思ってもらえればいいかなと思っていますね。（越後 11 項）

ここでは、ZUKAN インタビューの収録映像をコミュニケーションの潤滑油としての活用したいということがヴァリエーションから明らかになった。初対面の人や短い時間など、普段は語れないような過去やビジョンといった氷山の下の部分を、収録映像を見ることで知ってもらうことができる。自分の紹介の一つのツールであるとも言える。

しかし、自分のウェブサイト等に掲載して積極的に活用する人と、できるだけオープンにしたくしない人がいる。能動的に自分自身のブランディングを考えている人の方が活用しやすいのかもしれない。もともとは自分の個人的な情報を広く見てもらうことへの慎重な姿勢を持っていたが、地域色を出そうというタイミングを期に地域の中での自分を示すことに活用しようと意識が変化した例もあった。

コミュニティスペースやイベントなどリアルな場を持っている人が図鑑を取り組むことによって、相互作用を見出していく可能性もある。越後の場合は、リアルな場に足を踏み出すことに心理的ハードルを持っている人でも、インターネット上で自分と同じような人が一歩踏み出している姿を見ることで、ちょっと踏み出してみようという気持ちになってもらえたらという思いから、自ら ZUKAN インタビューに取り組んだ。

第２項　［メゾレベル：地域人材データベースとしての図鑑の形成と活用］

このコアカテゴリーは、地域に点在する人材のインタビュー映像を 365 日毎日配信して情報を蓄積していくことと、また、その情報にアクセスして活用することをあわせた、人材データベースにまつわるメゾレベルの概念群である。構成するカテゴリーは、【出演

者の発掘】【いつでもどこでもだれでもできる手法】【人材図鑑として活用】【札幌人図鑑の印象】の 4 つとなっている。ここでは、地域の人材のデータベース「図鑑」がどのように形成され、人から認知され活用されているのかを明らかにした。

表４：［メゾレベル：地域人材データベースとしての図鑑の形成と活用］の構成カテゴリーおよび概念

カテゴリー	概念	定義
【出演者の発掘】	《インタビュアーの直接のつながりからの出演者の発掘》	インタビュアーの知り合いや何かの場で出会った人など、直接のつながりから出演者を見つけていること。
	《紹介による出演者の発掘》	出演者の開拓をインタビュアーだけでなく、地域のキーパーソンのネットワークも活用して行われたこと。
	《インタビュアーの興味関心という軸》	インタビュアーの興味関心という軸から広がるアーカイブとなっていること。
【いつでもどこでもだれでもできる手法】	《全て一人で行っていることのインパクト》	出演者の人選も打ち合わせもカメラも出演も全て一人で行っていることに対して衝撃をうけたこと。
	《継続による効果とインパクト》	毎日継続していくことが、聞いた人へのインパクトやスキルの向上につながっていったこと。
【人材図鑑としての活用】	《人の名前で検索しての利用》	会う前の勉強や人となりを知りたい時に、相手の名前を検索して利用していること。
	《目的や興味関心などのキーワードで検索》	コラボレーションしたい分野や興味関心などのキーワードで検索して、どんな人がいるのかをリサーチするのに利用していること。
【札幌人図鑑の印象】	《幅広い人が出ているという印象》	札幌人図鑑に対して、札幌に長く住んでいる人だけではなく、札幌に関わる幅広い人を取り上げているという印象を持たれること。
	《知っている人が出ているという印象》	札幌人図鑑に対して、いろいろな知り合いが出ているという印象を持たれていること。
	《活躍している人が出ているという印象》	札幌人図鑑に対して、活躍をしている人が出ているサイトという印象を持たれていること。

カテゴリー【出演者の発掘】

このカテゴリーに該当する概念は《インタビュアーの直接のつながりからの出演者の発掘》《紹介による出演者の発掘》《インタビュアーの興味関心という軸》の 3 つである。

まず【出演者の発掘】をどうするかであるが、札幌人図鑑をスタートした当初は《インタビュアーの直接のつながりからの出演者の発掘》として候補者をリストアップし、そしてその出演者やまわりの紹介によって、自分のネットワークの外の人材が《紹介による出演者の発掘》につながる。また、この取材は 1 年 365 日毎日紹介を一人で行っている。その大変さもありつつ、この図鑑の形は特別な機材を使うわけではなく、取材を受けた人や見た人が自分も取り組みたいと始めることが有るが《全て一人で行っていることのインパクト》と《継続による効果とインパクト》という社会的インパクトとなって多くの人に認知される要素ともなっている。毎日続けて数が増えてくると、徐々に図鑑としての特徴が現れてくる。それは《幅広い人が出ているという印象》や《知っている人が出ているという印象》、《活躍している人が出ているという印象》につながっていく。このデータベースは継続的に形成が行われていくが、同時に様々な形で活用が行われている。

概念《インタビュアーの直接のつながりからの出演者の発掘》

インタビュアーの知り合いや何かの場で出会った人など、直接のつながりから出演者を見つけていること。

・取材したい人は、私札幌人図鑑スタートする前に、何も見ないでばぁーっと名前書いて、200 人書けたので、あとでゆっくり思い出せば、その友達も含めたら 300 人、400 人いるだろうなーと思ってスタートして、ほんとに最初の 365 人は、そんなに人選では苦労してないんだけど、とにかく 365 日だったから、盆暮れ正月も取材に行けないじゃないですか。年末のね、29、30、31、1、2、3 ね、取材させてってできないじゃないですか。そこで撮り貯めって、毎日出しているのに厳しいじゃないですか、そこでお盆と正月、盆暮れの前のまとめ撮りっていうのは、頑張ったかな。我ながらそこは頑張って。でも今にして思えばできるかな。あの時は頑張った記憶だけど、今にして思えば別に。（福津 3 項）

・札幌ラウンドテーブルっていう教育実践者の集いみたいなのがあって、当時、福津さんが、えーっと札幌市立高校コンシェルジュみたいなのをやっていたんですよね。その関係もあって、その会に来ていて、二日目に何かこうラウンドテーブルって、班になってやるんですけど、なんか絶対話した方がよさそうだから同じ班にしといたみたいな感じで、福津さんと一緒の班にしてくださって。かつ、自分の事例発表みたいな、発表者二人、聞く人二人、なんか、ま、そういう人二人みたいな感じだったんですけど、話す人にしていた

だいたんですけど、なんか「今、カタリバで…。」みたいなのとか、なんか「カタリバに結び付けてマイプロで…。」みたいなことを話したら、「ああ、いいね！ちょっとおいでよ。」みたいな感じで誘っていただいたみたいなところがありましたね。（古賀 4 項）

出演者の発掘にもさまざまな形があるが、この概念はインタビュアーが直接出会って話をした中で、出演者の発掘につなげているパターンである。ZUKAN インタビューをスタートする際は、まず自分の知り合いや身の回りのキーパーソンをリストアップして始めた。その後は、インタビュアーと同じ場になったことがきっかけで出演依頼を受けたという例も多い。一方で、ある人を取り上げると、近い活動をしている他の人から、自分は依頼されていないことに対しやっかみのような感情を持たれる可能性という留意点はある。

概念《紹介による出演者の発掘》

出演者の開拓をインタビュアーだけでなく、地域のキーパーソンのネットワークも活用して行われたこと。

・当時キュレーターシステムっていう、福津さんの知り合いばっかりじゃなくて、第 1 期、第 2 期って分かれていましたよね。第 2 期は福津さんの直接の知り合いとかに声をかけていたらしいんですけど、それだとあんまり広がりがないからって言って。ホームページで見たときは第 2 期にキュレーターシステムで何人か先行する人たちがいて、その人たちが進める人たちをインタビューしていくみたいなことが書かれていて、多分その中の 1 人が私の知り合いだったので、多分その方が紹介してくださったんだと思うんですよね。（越後 1 項）

・だいたい出た人は図鑑のことすごい大事に思ってくれて、なんかの話に図鑑が話題に上ったり、福津が話題に上ったりすると、語れるというか。私がいないところでもね、図鑑を語ってくれたり、福津を語ってくれたりしているみたいで。だから私全然あったことない人も、私と初めて会った気がしないみたいな。（福津 18 項）

3 章で述べた出演者が次の出演者を紹介する数珠つなぎは、札幌人図鑑においてはシートへの記入などの定形の仕組みとしては導入されてはいない。しかし、信頼できる人に出演者を推薦してもらうキュレーター制度を導入し、自身のネットワーク外の人の情報が届くような仕組みを設けていた。また、出演した人は札幌人図鑑に愛着がわき、他の場所で話をして興味を持ちそうな人を紹介してくれるなど、自然な形での数珠つなぎがおきている。そして地域の中での認知が上がるに従い、出演することへの箔がつきステータスとな

ってくることで、自然と人の情報が集まってくるようになった。

概念《インタビュアーの興味関心という軸》

インタビュアーの興味関心という軸から広がるアーカイブとなっていること。

・ただもうちょっとその軸にあるのは、どういうものなのか知りたいなって気持ちはありますね。あの札幌人とは？みたいなことを。ちょっと聞きたいなって気持ちはありますけど。福津さんなりとかに。それは今ありますかね。札幌人図鑑ではあるけど、福津さんの中の個人的に刺さる人だと思うんですよ、最初は。（山崎 18 項）

・いっぺん彼女（福津）にね、「誰に向かって話ししてると思ってる？」って聞いたことある。「それはあんまり意識してない。」って。でも、よくよく聞いてみると自分なんですよね。例えば家族連れみたいな人が向こうにおると思う、それは思わんなと。これ私が面白いと思うように聞いてる。要するに「あんたの目の前におってあなたの話聞いているあんたなんやろ？」って。「そういやそうだわ。」って。（西尾：人に向かって語っているようでいて、実は自分と対話してるという。）彼女自問自答しているんですよ。たまに相づちいうとき、なんとかなんですってって言うときあるじゃないですか。あの相手先自分なんですよ。（西尾：それは面白いですね。）うん。普通千何百人も話ししていたら影響されてくじゃないですかなんらかの。きっと黒柳徹子もそうだと思いますよ。自分に喋ってんですよきっと。（竹垣 11 項）

札幌人図鑑も、完全に札幌の人の縮図ではなく、インタビュアーの興味関心やネットワークの影響を受けたデータベースである。実はインタビュアーは視聴者に向けて質問をしているようで、実は自分に向けているのではないかという指摘は興味深い。もちろん、画面の向こうも意識をしているのだが、インタビュアー自身が聞きたいこと、気になったことも大きく反映される。それは問題ではなく、インタビューの醍醐味でもある。同じ人に対して違う人がインタビューをすれば、当然違うコンテンツになる。3 章でもインタビューの語源について述べたように、インタビューは相互作用を通じてその人の内面を見るものであり、それこそがコンテンツとしての面白さにつながっているのである。

そして以下のように、インタビュアーのこうした傾向は、活動が蓄積していくほど他者からもわかるほどのカラーとなっていく。

・そこをこう、楽しんでくれたり、相手がこう、発見してくれたりすると、距離が近づいたり、向こうにとって何か、大事にしてもらう存在になる、なってくるんですよね。で、

なんかの時に「福津さんに紹介したい人がいる。」とか「福津さん、すっごい図鑑っぽい人がいるんだけど。」とか「福津さん絶対好きだと思うんだけど。」とか。図鑑っぽいって誰やねんって思って、どういう意味やねんって思って会うじゃない。ほんと図鑑っぽいの(笑)。私がさも喜びそうなことをしている人なのよ。絶対テレビとかに出なさそうな。変なことしてる人が出てきて、面白いなぁって。やっぱり一回自分が取材されると、どういう人だと図鑑向きかみたいな、なんとなく、私説明してないのにイメージするものがあるらしく、そういう風に言ってくれてて。（福津 20 項）

ZUKAN インタビューは継続し数を蓄積していくことで地域の中のメディアとしての効果を発揮していく。そのためには、インタビュアー自身にとっても何かしら楽しい、興味をそそられるなどモチベーションとなる部分がないと毎日のように続けていくことは難しい。

そうしたインタビュアー自身の「楽しい」や「面白い」という感情は、出演者にも伝わり、さらに各コンテンツやそれらが蓄積したウェブサイトなどにも表出していく。単に地域の人が集められた無機質なデータベースではなく、つくる人の思いや人となりも感じられる図鑑となる。そのことで、多くの人の印象に残り、本人はなにも言葉にしていなくても「札幌人図鑑っぽい人」「福津さんが好きそうな人」をそれぞれのイメージで思い浮かべることができるようになる。

カテゴリー【いつでもどこでもだれでもできる手法】

このカテゴリーに該当する概念は《全て一人で行っていることのインパクト》《継続による効果とインパクト》の 2 つである。札幌人図鑑は（テレビ配信がスタートする以前は特に）ZUKAN インタビューのフォーマットを用いることで、取材のアポイントメントから撮影、編集、配信までインタビュアーが行ってきた。《全て一人で行っていることのインパクト》は多くの人の興味を引き、また、1 年 365 日の《継続による効果とインパクト》も大きく、明日はどこにいるのか、誰に会っているのか、まわりの人は気になってしまう。

概念《全て一人で行っていることのインパクト》

出演者の人選も打ち合わせもカメラも出演も全て一人で行っていることに対して衝撃をうけたこと。

・もう、とにかく、福津さん凄いなと思って、なんか憧れで見ていたのと、なんか自分のことよりも、そっちの方が…こうやって続けてきているんだなとか。そっちの方が凄く私は興味があったので。J-COMさんの中でね、こうやってやっているのだって、ちゃんとネットワークとかがないとあそこのスタジオを借りてやれたりもできてないだろうし。それもね、ここを借りて、こうやって出せているのを、一人でこの人はこうやってやってたんだなみたいな、なんかそういう背景の方が面白くて。そっちばっかりで、自分のことより、そっちを観察してたかな。うん、だからやっぱりそういうとこからも、現実ね、それを何年もやってる訳だから、それはすごいと思うし。こうやって続けてるのは、きっと構造のこれができてるというか、その前にもっと凄いこともあったんだろうなとか。というのを見ながら。話してた。（浅野目８項）

毎日違う人に一人から話を聞いてインタビューを配信していることに対して驚きを持って見られている。出演者の中でも特に、大きなプロジェクトの運営を経験してきた人にとっては、自身の経験と照らし合わせて札幌人図鑑が実際どのような仕組みで取り組まれているのかへの関心が高い。自分が出演した際も、インタビューを受けながら、札幌人図鑑の一連のプロセスをつい観察してしまったという声がいくつかあった。

概念《継続による効果とインパクト》

毎日継続していくことが、聞いた人へのインパクトやスキルの向上につながっていったこと。

・なんか凄いことやってる人がいるなみたいな感じですかね。その本当に福津さんがこう人を呼んで、僕らはその TEDxSapporo で一年間かけて準備をして、スピーカーとしても七人ぐらいの感じなので、それをほぼほぼこう毎日のようにやっているというんですかね、イメージ的に言うと。この状況で凄い数の人をどんどんどんどん呼んで、話して貰ってとかって、いや凄いなあって思いましたけどね。凄いことやってんだみたいな。（鈴木３項）

・あと一年 365 日、毎日お送りしますっていうフレーズで「うそだぁー！」っていう、「ほんとかいな、明日も見るで！ほんとだろうな！」みたいな。そういう面白さ。でも札幌人図鑑がスタートした時は、ほぼほぼ同じ感想で見てたと思う。あたしが一年 365 日って言ったら「ほんとかいな、明日も見るで！」って思って、見てたと思う。私の友達がそうだった。「一年 365 日って、そんなんできるわけないじゃん。一人で無理無理。」みたいな。「なんでそんなこと始めたの？」って、友達がそうだったから。私に直接、面

識のない人で、どっかで誰かの知り合いの知り合いの知り合いくらいで、WEB をたまたま見た人なんかは、途中からそうやって、見だして、はらはらしながらずっと続けて見て、最終的に「がんばれ！がんばれぇ！！」って言ってみてたと思う。（福津 8 項）

1 年 365 日毎日のキャッチコピーはインパクトがあり、最初の注目を集めるのには効果的であった。最初は好奇の目が多いが、実際にそれを続けていることでリスペクトの反応に変わってくる。また、毎日続けることは、以下のようにインタビュアー自身の学びや成長にもつながっている。

・だんだん。最初の頃は知っている人っていうかラジオ出た人の方が多かったから、この人ならこういう話できるっというのを逆にフィルターがかかっている感じ。多分この人ならこの話したいだろうっていうのが分かっていて呼ぶ。で、だんだん初対面の人が増えてきたら、そういう事前情報がないから、人間関係ができてないから、お互い探り探りになるでしょ。だからそこのところは、なんかほんとにスタートの頃より今の方が、頑張っているところかもしれないです。欲が出たし。やればやるほど、そっち方面で。「福津さんだから、ちゃんと話できた」って言ってほしいっていう欲も出てきて。そうそう。そう言われると、こうして話をしていながら、ずいぶん成長させてもらったんだな私、図鑑に。（福津 17 項）

しかし、まさに言うは易く行うは難しであり、継続していくことの難しさは、他の図鑑に取り組んだインタビュアーからも顕著に語られた。

・きついですよね。すごい、モチベーションがすごいなと思って。私も子供 3 人いて、今中学生小学生、幼稚園もちょっと行ったりしていたんですけど、幼稚園も行ってデイケアも行っていたりしたんですけど、あまりにもスケジュールのすり合わせがめちゃくちゃ大変で、週の半分以上、だから幼稚園やめちゃったんですよね。やめちゃって、これはなんかこっちがやっぱり余裕がないと、他の人のためにっていう時間とかお金とかもなかなかかける気にならないというか…（中略）…やっぱり自分が満たされてないと、人のための活動ってなかなかそういう気にはならないので、今年さすがにすごく忙しくて、中学校入学っていうのがあって、なんかこう、私自身もなかなかリズムがつかめないところとかがあったりしたので、ちょっと体調崩しちゃったっていうのもあるんですけど、なので 48 回で止まっているっていうのが実情なんですよね。（越後 6 項）

・多分、自分がインタビューさせてもらって、Web で発信して、多分、Web で発信しても手応えが足らないのかな、自分の場合。見た人から感想とかをもらうとやる気が出るじ

ゃないですか。今はインタビューした相手の人が「ありがとう。」って言って、さっき言ったみたいに宣伝で使ってもらえたりするとそれはそれでやりがいがあるんですけど、実際にそのインタビューを見て、すごく感じたものがありました、みたいな声を欲しているんだと思うんですよね、自分が。（小笠原５項）

長く継続するためには、ある程度経済的・時間的余裕はもちろん、自分自身に満たされる要素、もしくはその活動に専念できるような環境のどちらかが必要不可欠である。また、まわりからの反応や反響も大きなモチベーションとなる。そうした手応えが返ってくるまでの壁が存在する。札幌人図鑑はそれを超えたことで、企業との連携にまでつながった。

カテゴリー【人材図鑑として活用】

このカテゴリーに該当する概念は《人の名前で検索しての利用》《目的や興味関心などのキーワードで検索》の 2 つである。その名の通り、図鑑としての活用が行われている。まず自身の興味や、取り組みたいと思っている分野などに関して地域の中で活動している人を調べたい時に《目的や興味関心などキーワードで検索》して活用する。もう一つは、知り合いの映像を見たいときや、初対面の人と会う予定があり事前にどのような人かをインターネットで調べたい時などに《人の名前で検索し利用》する。

概念《人の名前で検索しての利用》

会う前の勉強や人となりを知りたい時に、相手の名前を検索して利用していること。

・僕が北海道きてから、北海道きてこの会社入って、5、6 年経って、営業本部長とかやりだしてから、これではあかんと地域とやっぱり結びつかないかんということで、ほとんどみんなが出てなかった道庁やいろんなとこからの誘いに出だしたんですよ。でもみんなイオンってなんですか？北海道に会社あるんですか？みたいでしたよ。名前も覚えてもらえないし、どうしようか思っていくつかやったうちが、ちょっと目立つ格好していこうと、みんな情けないほどスーツなんで、この感じで行くと目立つと、いろいろ知り合いもできると、Facebook でもそういうあんまり商売商売したことじゃなくて、少しちょっとお茶目な、入れつつやっていこうと。会う人と面談があれば、必ずその人のことを勉強していこうと。それが札幌人図鑑やったんですよ。…（中略）…だから毎回見てるというよりもアーカイブみたいにこの人と会うからっていうことで、あ、いる。みたいな見方です。百科事典みたいな見方ですね。（竹垣６項）

・今その札幌の有名人とか企業人っていますね。そういう人を検索する時札幌人図鑑を使われてるわけじゃないですか 。例えば青年会議所会頭の誰々とか 図鑑といれたらパッと出てきて動画を見れるわけじゃないですか。人となりがわかるわけです写真だけじゃなくて 検索サイトとしてもね使われてるぐらいのところなので。そういう意味でもやっぱりこう、図鑑になりましたよね。図鑑ですよね。人を調べるためのツールにもなってる気がします。すごいなーって思いますよね。（中島 9 項）

札幌の人の図鑑として、知りたい人の名前で検索して映像を探すという使い方が表れている。具体的に、竹垣は札幌の外から赴任してきて、地域との結びつきをつくるための、事前調査のツールとして活用している。また、誰か特定の人のことを調べようと思って名前でインターネットを検索して、札幌人図鑑のサイトや動画が表示されたことで、札幌人図鑑にたどり着く人もいる。地域の外と中の人をつなぐ媒体ともなっている、インターネット上の図鑑である。図鑑というものの存在を知らなくても人の名前などの検索からたどり着く。出演者の人数が多くなるほど図鑑にたどりつきやすくなるという検索確率があがる。

概念《目的や興味関心などのキーワードで検索》

コラボレーションしたい分野や興味関心などのキーワードで検索して、どんな人がいるのかをリサーチするのに利用していること。

・（浅野目は）図鑑とか色々見て下さって。色々見て、この人に、みたいな感じで。さっきお話しした雑貨じゃないミュージアムグッズみたいな。あえて、そういうちょっと…何だろ、もののバッググラウンドを大事にしたい人たちみたいなので、ミュージアムグッズってのに目を付けたらしいんですけど、それを語れる人があんまり首都圏にまだいなくて、ネットで探したら、図鑑を含め私にたどり着いたみたいな。（西尾：いくつかの情報の中に図鑑もあって？）多分、私のワークスのところ載せてるので。出演情報みたいな。それで何か気付いてくれたのかなと思って。（大澤 13 項）

・ほんと、ほんと。それはやっぱり人だから。もうとにかく人がいないと、そうならないのを。お金積んだってね、そういう、人ってできない。作れないから、だからちょっと戻っちゃうけど、その人図鑑とか、ああいうのって、すごい財産だと思うし。あれにね、出た後ちょっと思ったのが、そうやって知ってる人のは結構見るし、Ｊ－ＣＯＭとかでこう発信してたら、その時は、その人のがちょっと見えるけど、百人も超えちゃうと、全部は

どっちみち見れないし、探しようがない時に、何かキーワードで検索できたり、例えばなんか不動産やってる人とかで、不動産って、どんなやり方やってる人いるのかな?とかって、どういう思いの人がいるのかなとかって検索したら、そこが見れるようになったりすると、私はそういうのがみたいなーと。（浅野目 12 項）

これらは、自分の興味関心や活動分野のキーワードで検索し、気になった人の情報を見るという使い方である。「誰がなにを知っているか」というトランザクティブ・メモリーのような使われ方となっており、目的ベースの図鑑の使い方といえるだろう。

カテゴリー【札幌人図鑑の印象】

このカテゴリーに該当する概念は《幅広い人が出ているという印象》《知っている人が出ているという印象》《活躍している人が出ているという印象》の 3 つである。まず何かのきっかけで札幌人図鑑にアクセスした際、まず《幅広い人が出ているという印象》を受ける。また、Facebook のシェアや本人の話を聞いたりして《知っている人が出ているという印象》を持つ人も多い。さらに、自分と同じ分野の著名人なども掲載されていることで、《活躍している人が出ているという印象》を持つ人もいる。

概念《幅広い人が出ているという印象》

札幌人図鑑に対して、札幌に長く住んでいる人だけではなく、札幌に関わる幅広い人を取り上げているという印象を持たれること。

・収録前に予習のつもりでいくつか見たんですよ。福津さんが市立高校のコンシェルジュをやってるからだと思うんですけど、市立高校の教員も何人か出てたりとか、本当に私みたいな一般人の札幌人もいれば、私の前の回は旭山動物園の園長さんの小菅さんだったんですけど、小菅さんみたいなすごい人が出てたりとか、いろんな人が出てるっていうのが面白くって。面白いなって思ったのと、それが一番面白いなって別に有名な人ばっかりじゃなくて、私みたいな人もいっぱい出てたっていう。（小川 17 項）

・「わー広い！」っていうイメージがありました。で、それこそ出演のオファーが来た時に、私でいいのかっていう気持ちはあったんですけど、その気持ちが逆に、みんな出るからいっかって思っちゃって。…（中略）…私はどっちかというと結構国籍がついてる感じで、韓国人とかそれこそ在日朝鮮人とかっていう所で、割と札幌人って言われると、すごいこう、なんて言いましょう。札幌で生まれ育って、札幌にもすごい詳しいしっていう人

を思い浮かべたので、私でいいのかって最初思ったところは、その札幌人という言葉のチョイスにちょっと、なんて言いましょう。ハテナがあったので。私ほんとによそ者なので、位置づけとしては。ソウルも長かったし東京も長かったから、どちらかというともっと知りたいから可視化も始めたし、っていうことなので。札幌人図鑑でのるくらいのあれかな？っていう心配はあったんですけど。で、「わー広い！」はポジティブに働いて、まいっかってなって、そういうところを含めて札幌なのかなって思って。結構いろんな人が外からきて、今の札幌を作っていくっていう意味で、入ったっていう感じですかね。（朴 3 項）

札幌人図鑑にアクセスして、非常に多様な人が出演しているのを目にすることで、札幌歴の短い人や、これまでメディアに取り上げられた経験の少ない人でも、「札幌人」として取り上げられることに対してハードルが下がったという声が複数あった。札幌の外から来た人は自ら札幌人と名乗るのは遠慮があるが、出演者の多様さを見ることでこの「多様さこそが札幌人」であると認識が変化する。もしかしたら新しいアイデンティティや帰属意識につながっているかもしれない。

概念《知っている人が出ているという印象》

札幌人図鑑に対して、いろいろな知り合いが出ているという印象を持たれていること。

・札幌人図鑑は知ってたんですよね、知ってました。いろんな方が出てるんだなって言って、ネット上で知り合いのはちょこちょこ見てましたね。…（中略）… 結構長いじゃないですか、3 部に分かれていて、10 分 10 分 10 分で、本当に知り合いじゃないと、全部は見なかったんですよね。最初の方ちょこっと見て、あんまり知り合いじゃないと、ちょこっと見てっていう感じだったんですけど。私には別世界というか、すごい活躍してる人がいっぱいいるんだなとは思って見ていたというか、そして知り合いがちょこちょこ出ていたのは、いや、でもじっくり全部は見てなかったな。何かしながらとか聞き流しながらとか、そんな感じで見てましたね。（越後 3 項）

・大体、みんな知ってる人の見ちゃうから。相変わらずやってんだなとか、知ってることを言ってるだけだから。なんか内容は、こういうことやってる人がいるんだっていう人のとこまでは、私は行きついてなくて。知ってる人の分しか聞いてないので。大体、知ってて。相変わらず頑張ってるなぐらいのところで。はい。でしかなかったですね。そういうのもありました。今はこういうのもやってるんだなとか。あ、そこからそっちに行ったん

だなっていうのも、勿論ありますけど。あと、私も頑張ろうと。みんな頑張ってるし、自分も頑張んなきゃなとは、もちろん思ってますし。それは見なくても、噂で聞くだけでも、みんな頑張ってるし、みんなそれぞれ大変な時期とか、ま、今も大変なだろうけれど、それでも続けてるのを聞くことで、その続けなきゃ、頑張ろうって思う。元気は貰ってる。いつも。うん。（浅野目３項）

知り合いが SNS で札幌人図鑑出演の投稿をしているのを通じて知る、目に留まる機会が多いということが分かった。知っている人が札幌人図鑑に出演したということを、SNS で知ったことで、気になってアクセスをして札幌人図鑑の存在を知った事例が多い。近しい人や尊敬する人などが出演をしていることで、メディアとしての信頼感や出演することへの心理的ハードルが下がっているかも知れない。意外な知り合いが出演し、オープニングの歌を歌っているインパクトは強いようだ。

概念《活躍している人が出ているという印象》

札幌人図鑑に対して、活躍をしている人が出ているサイトという印象を持たれていること。

・本当に活躍…活動してる人たちが紹介されているから、凄いなと思ってました。やっぱり古くからやってる人達なので、こういうところにね、その百人に選ばれるだけの活動になってるんだなと思って、凄いなと思って。何か凄い客観的に見てたので、凄いなーと思って、頑張ってるなって感じでしたね、はい。（浅野目２項）

・それこそ、カタリバの今村久美さんだとか、ある程度、こうやられたりしてるような人も出てたイメージがあったので、そこでの抵抗の方がもしかしたら。大丈夫かよ、みたいな。話す事あんのか、みたいな。のは、ちょっとあった。（古賀６項）

先ほどの概念とつながっているが、自分の知っている活躍している人が出演していたり、図鑑の存在自体の社会的認知が高まるほど、出演者することのブランドイメージは高まるが、その分身近な人を紹介するという本来のコンセプトとのトレードオフの関係が生まれてくる。実際に札幌人図鑑は、映像配信後の反応で「すごいね」と言われるケースが覆うなっている。図鑑フォーマットの「手作り感」などが、ブランドイメージが行きすぎないようにブレーキの役割をはたしているかも知れない。

第３項　　［マクロレベル：場から地域人材リゾーム形成につながる要素］

このコアカテゴリーは、実際に地域の中の人の出会いや関係性、コミュニティ形成、プロジェクト創出など、ネットワークや創発といったリゾームにつながっていく要素をまとめたマクロレベルの概念群である。ネットワークとリゾームという区分にまでは至っていないが、ソーシャル・キャピタルにおける「結束型」と「橋渡し型」の 2 つに分けることができた。【結束型：コミュニティの形成】として《インタビュアーによる出演者との継続的な関係性とコミュニティの形成》が成され、《出演者および関係者が集う場へのニーズ》や《出演者同士のつながりやコラボレーションの創出》も見出された。さらには図鑑のネットワークの外との関わりにまで広げ、《地域貢献の番組としての札幌人図鑑》や《中間支援・コーディネーター的活用》として札幌という地域の活性につながるような【橋渡し型：地域人材の自己組織化への要素】もいくつか見出された。

表５：［マクロレベル：場から地域人材リゾームの形成につながる要素］の構成カテゴリーおよび概念

カテゴリー	概念	定義
【結束型：コミュニティの形成】	《インタビュアーによる出演者との継続的な関係性とコミュニティの形成》	インタビュアーと出演者に継続的な人間関係が構築され、インタビュアーの存在がハブとなって新たな人のつながりやコミュニケーションが生み出されたこと。
	《出演者および関係者が集う場へのニーズ》	札幌人図鑑の多様な出演者や関係者を集めたイベントの開催に対するニーズが高いこと。
	《出演者同士のつながりやコラボレーションの創出》	出演者同士が同じ場で出会った時、共通の話題があることで盛り上がり、新しい取り組みも生まれたこと。
【橋渡し型：地域人材の自己組織化への要素】	《「札幌人」としての意識の変化》	札幌人図鑑の出演者の多様さから札幌人の地縁的なイメージが変化し、さらに、出演したことで、自分自身も札幌人なんだと思えるようになったこと。
	《地域貢献番組としての札幌人図鑑》	地域ローカルのメディアだからこそ、内容の質ではなく地域貢献の役割や新たな価値を探求することができること。
	《中間支援・コーディネーター的活用》	新しい●●図鑑の立ち上げや、出演者が集う場、企業との連携など、地域の中の主体をつなぐ新しい仕組みへの活用の動きが生まれていること。

カテゴリー【結束型：コミュニティの形成】

このカテゴリーに該当する概念は《インタビュアーによる出演者との継続的な関係性とコミュニティの形成》《出演者および関係者が集う場へのニーズ》《出演者同士のつながりやコラボレーションの創出》の 3 つである。

インタビュアーと出演者は、もともとの知り合いの場合もあるが、大半はインタビューの現場もしくは出演依頼につながる場が初対面である。しかし、打ち合わせから収録の流れの中で密なコミュニケーションが行われることで、出演後も《インタビュアーによる出演者との継続的な関係性とコミュニティの形成》につながっている。また、出演者同士の出会いにつながる《出演者および関係者が集う場へのニーズ》も多く、実際に何かの機会に出会っての《出演者同士のつながりやコラボレーションの創出》に至った事例も存在している。これらは「札幌人図鑑コミュニティ」といえるゆるいネットワークとなっており、その中で結束型のソーシャル・キャピタルに通じる交流が生み出されている。

概念《インタビュアーによる出演者との継続的な関係性とコミュニティの形成》

インタビュアーと出演者に継続的な人間関係が構築され、インタビュアーの存在がハブとなって新たな人のつながりやコミュニケーションが生み出されたこと。

・福津さんとすごい明るく挨拶ができるようになったことかな。ほんとにどこ行っても福津さん大体知ってるので皆さん。話題が、話題になれるアイスブレイキングになれるっていう。懇親会とか全然知り合いのいないところに行ったりして、札幌のネタとかになると、それで雰囲気は柔らかくなったりしたことがありました。札幌人図鑑出たんです。あー福津さんのねみたいな。そういう小ネタになれるというか。すごい言い方悪いですけど。でも皆さんに親しんでいるっていう。（朴 25 項）

・そうですね。あとはやっぱり、あの福津さんが作ってくれているであろう札幌人コミュニティ、多分あるじゃないですか。その社会人っていうか、あれは多分、僕が札幌に住み続けたいと思う理由の一つかもしれないなっていうか。札幌って枠の中でコミュニティがあるし、それは多分、いい意味も悪い意味もあると思うんですけど、でも何か凄く僕の中では、イメージですけど、まぁなんかトライしても温かく見守ってくれるようなコミュニティがあるイメージなので、なんかその札幌人図鑑って、そういうものとも関係してるのかな?っていう気がしてますけどね。（山崎 6 項）

インタビューを通じてインタビュアーと継続的な人間関係が構築された。何かの機会に新しい人と出会った際に福津の紹介でつながりができたり、本人がいなくても図鑑に出演したという話題でコミュニケーションが生み出されるたりするなど、インタビュアーがコミュニティ内のハブになっている。

また、以下のように、一生懸命聴いてもらうと逆に相手のことを理解しようという気持ちになり、結果的に態度の変容や深い相互理解につながるということも起こる。

・*（西尾：それを受けた前と後で、その２年生の子とのなんていうんですかね、関係とかって変わったりしました？）その子が一生懸命やろうとしていることを、私も理解しようとしたし、そのインタビュー受けて、放送局ってこんなことやってるんだとか。だからそのなんかどうでもいい会話の中でその子に放送局こういうこと頑張ってるんだねとか、あんな風に原稿作ると思わなかったとかそういう、なんか、励ましの言葉が湧いて来たりとか、こっちもなんかそばにいる生徒だけど何をしてるかわからない子だったのが、そういうインタビュー受けたことで、その子たちが何を頑張っているのかが見えたので、こっちも応援したい気持ちになるし、応援、自分のことを応援してくれる私のことをその子も私が部活をやってる姿とかなんかこう働く、一生懸命クラスのためになんかやろうとしてることを、なんかいろいろなことを受け入れようとしてくれるのがわかりました。（小川 8 項）*

このヴァリエーションは札幌人図鑑ではないインタビューでの話であるが、インタビュアーの姿勢やインタビューを通じたコミュニケーションを通じて、短い時間の間に関係性がかなり近いものになったのが見てとれる。インタビューをした側だけでなくインタビューを受けた側も、相手のことを理解しようという姿勢や取り組みに対する応援の気持ちとなっている。札幌人図鑑の場合も、1 年 365 日毎日、1000 人もの地域の人をインタビューし続けていることへの敬意を表す言葉も多く見られた。それはインタビュアーとインタビュイーの間の双方向の理解や信頼関係、何かあったら力になりたいという互酬性に近い感情にもつながっており、Putnam 概念のソーシャル・キャピタルの要素との共通点を見出すことができる。

概念《出演者および関係者が集う場へのニーズ》

札幌人図鑑の多様な出演者や関係者を集めた場やイベントに対するニーズが高いこと。

・*逆にどうやって出会えばいいのかな?っていうのはありました。その、出た人と。あそ*

こに、ソース…場は作ってるじゃないですか。場は作ってるけれども、何かそんなに毎回そこに行く感じでもないし。でもそれが一番あれですかね？どうやってそこから、ネットワークと出会ってみたいって気持ちは、福津さんが選んだ人と出会いたいって気持ちはあったけど、でもなんかちょっとあそこに行くまでにはいってないですよ。なんかもっと出会いたいって気持ちは、聞かれて、思います。すぐ思ったりもしました。（山崎 17 項）

・（西尾：1000 回パーティーによって化学反応が起きたりしました？その後意気投合して何かうまれたとか？）小さくはあったみたい。後で聞いたのでいうと、1000 回のパーティーの時はほんとにその、いまだにいろんなこと言われるんですけど、みんな一人で来てるじゃないですか。友達と誘い合わせとかじゃないので。知り合いいる人はいるよね。でもすっごい偉い人もみんな一人でピンで来て、知らない一般の人たちに囲まれちゃったりして。一般の人たちも偉い人見ても誰だかわかんない。でなんとなく佐藤先生の挨拶があって、みんなで乾杯、とりあえずここに出た人は全員が出演者です！と、共通項としては、「第何回で出たの？」「何で出たの？」とか共通項で盛り上がれるはずだからっていって、微妙な中で乾杯したんです。全然知らない人とかんぱーい。5 分でざあー、ざわざわってなったんです。すごい会場が盛り上がって、あっちもこっちもわーわーわー。「キャー、会いたかったんです！」「あー、あの人ですか！」「見た見た！」とか「見る見る今度！」みたいな。その場で見だして「あーこれですねー！」みたいな（福津 9 項）

出演者は、他の出演者との出会いや交流に対し大きな関心を持っている。出演者には非常に幅広い職種や分野の人がおり、彼らが集まることで自然とマルチステークホルダーの場となる。そうした場があることで自然と異分野・異業種ネットワークが生まれる。その際、札幌人図鑑出演という共通の話題があることから、話が盛り上がりやすい。

概念《出演者同士のつながりやコラボレーションの創出》

出演者同士が同じ場で出会った時、共通の話題があることで盛り上がり、新しい取り組みも生まれたこと。

・やっぱり「生きた図鑑」ですよね。図書室に保管するんじゃなくて、その中で動いてる生態系みたいなのってありますよね。それが僕は面白いのかなと思っていて。今リアルな場所…ミヤスタでしたっけ？ああいうのも、そういう延長線上にあるのかな。やっぱり出た人がもっとつながって、ただそこでインタビューして、それが残っていくだけじゃなくて、そこからさらに派生していく流れって、実際に影響を与えていくみたいな部分では、

大きいのかなと思って。（山崎 16 項）

・それこそ図鑑…福津さん、スナックやってるじゃないですか。都通りに遊びにいくと、出た人ばっかり色んな人がいて。あ、出てたよね？みたいな感じで。逆に言ってもらえることが多くて、あのグッズの人でしょ？みたいな。今日も実は持ってきてて…みたいな感じだから。私自身が話しかけるよりも前に、興味を持ってくれる人の方が多くて。それが凄い面白いなぁと思いますね。（西尾：そういうところで人の知り合いが増えたり？）増えましたね。見ましたよみたいな感じで。それで都通りスタジオの放送の時とかも、大澤さん、ちょっと出て！みたいな感じで出て、話しして。で、席に戻ったら、ちょっとフェイスブック、友達になりましょみたいな感じで話しかけてくれたりとか。面白いなと思って。（西尾：一種の福津さんを中心としたコミュニティでもありますね。）本当にそうですね。福津さんの友達なら信用できるみたいな。そういうところはあるかもしれない。（大澤 16 項）

ここでは、何かの集まりで札幌人図鑑に出演した経験のある人に出会うと、出演した時の話題になる。自分が出演した経験があることで、他の出演者がどうだったのか、他にどんな人が出ているのか少なからず気にかけるようになる。図鑑にアクセスしなくても Facebook で受動的に流れてくる情報でも、常に目に入るようになるというのが明らかになった。ヴァリエーション内の「ミヤスタ」「都通り」「都通りスタジオ」というのは、福津が構える拠点である。図鑑出演者も含めた福津の知人が集えるコミュニティスペースとなっており、そこで図鑑出演者に出会い話が弾むこともあるようだ。

出演者同士がなにかのきっかけで出会うと、札幌人図鑑に出たということが共通の話題となり、会話の潤滑油となっている。さらに以下のように、具体的な連携につながった事例もある。

・そうですね、浅野目さん。浅野目さんも、その、都通りのオープンの時に来てて、私も出て、ちょっとミュージアムグッズのこと喋って言われて、プレゼンテーションみたいな感じで放送で喋って、席戻ったら、浅野目さんがとなりにいて。ちょっとあなた、会いたかったのよ！みたいな感じで来てくれて。そうなんだ、そうなんだって話して。それで仲良くなって。私、実はあそこのショップのみたいな話だったので。（西尾：もともと知り合いじゃなかったんですね。）そうですね。店長の…車椅子の犬飼さんのてん…前の店長さんとは仲良かったんですけど、浅野目さんとはあんまり知らなかったんですよね。たぶんお互いあんまり知らないまま。何となくみたいな感じだったのが、ちょっと知り合いに

なって。それでこないだ、ミュゼっていう雑誌にインタビューする時も、ちょっと浅野目さんインタビューさせてくださいって、バッて言いやすかったりとか。いいよ、いいよ、みたいな感じだったので。図鑑のつながりが大きかったですね。浅野目さんは。（大澤 17 項）

・たまたまね、あの福津さんので見たときに、博物館の出てた、えーっと、博物館グッズ…（西尾：大澤さんですかね。）そうそうそうそう。も、たまたまそれで見て、これはつながらないとと思って。（西尾：元々知り合いだった訳じゃないんですか。）ないんです。で、色々意見聞いたりさせてもらってるし。（西尾：それは札幌人図鑑で知って、検索して知ったのですか。）たまたまね、なぜかその札幌人図鑑を、動画のなんかおすすめみたいなので、博物館の。実はね、パスポートみたいなのを売ってくれてたらしいんだけど、私は滅多にいないので、置いて貰ってるのも、ちゃんとその彼女とそれがつながってなかったのが…（西尾：それで、浅野目さんから連絡されたんですか。）たまたまね、連絡しようと思ってたら、すすきので、ほら…スタートした、福津さん始めたじゃないですか。あそこにオープンの時に、ちょっと行かせてもらったら、隣にいて！！私、連絡したかったのーって言って、そこから。（西尾：なるほど。へー、すごい。）そう、だからもう運命だと思うな。こないだ見たのよって言って。（浅野目 12 項）

ミュージアムグッズ愛好家の大澤と大学博物館のショップを経営している浅野目は、そうした機能を通じて出演者同士が実際に出会った例である。浅野目がこういう人と会いたいと探していた中でさまざまな情報を検索していて大澤にたどり着いた。そのタイミングで福津による都通スタジオでの交流会で直接会う機会があり、話がスムーズに進んだ。

カテゴリー【橋渡し型：地域人材の自己組織化への要素】

このカテゴリーに該当する概念は《「札幌人」としての意識の変化》《地域貢献番組としての札幌人図鑑》《中間支援・コーディネーター的活用》の 3 つである。

札幌人図鑑の出演者の多様性は、移住者など札幌市民歴や地域との関わりの浅い人にとって、「自分みたいな人も札幌人でいいんだ」という《「札幌人」としての意識の変化》にもつながっている。自分自身と札幌市という地域との間の文脈の発見にも繋がると考えられる。さらに、直接的に、地域にはたらきかけている人や活動にスポットをあてることで《地域貢献番組としての札幌人図鑑》という役割もある。そうした図鑑は、地域で何かしらの取り組みをしている人にとって、《中間支援・コーディネーター的活用》も可能な

ものとなっている。これらのことから、多様な人やコミュニティをつなぐ「橋渡し型」ソーシャル・キャピタルに向けて実践する際のツールとしての活用可能性を見出すことができる。

概念《「札幌人」としての意識の変化》

札幌人図鑑の出演者の多様さから札幌人の地縁的なイメージが変化し、さらに、出演したことで、自分自身も札幌人なんだと思えるようになったこと。

・結構札幌人っていうくくりがあって、札幌人・非札幌人みたいな感じで、私はどちらかというと非札幌人なのかなって思ってたところが、札幌人っていうふうに見ている人がいるっていうところで、まあまあっていう。そういう風に見られるんじゃないかって思う位のところで、広くなったっていうこともありますし、それこそ札幌人っていう気もちょっとありました。なので、先ほどお話ししてた、その自分がいることで周りに良い影響で、よくして前に一緒に進みたいっていう気持ちがあって、そういう私のスタンスと今の札幌人という意識の変化はちょっと近いのかもしれないですね。で自分が出ることによってっていうようなこともあって。（朴 22 項）

・ありますね。札幌だから、私、この活動をできてると思っていて。東京に行ったら、いろんなすごい人がいっぱいいるし、私じゃなくてもとか、もうやってる人いるかも…みたいな感じでやらなかったかもしれないですけど。札幌でやってたら、たった一人なので。そういう意味では、すごいありがたい。札幌でやってて良かったと思っていて。そういう意味で、札幌人図鑑に出るっていうのが、なんていうのかな…一個、認められたって言ったらあれですけど、そういう活動が。自分の頑張りが。やってて良かったんだなっていうふうに、面白がってくれる人がいるんだっていう喜び。そういうのがあるかもしれないですね。（西尾：元々、憧れの土地だったわけじゃないですか。）そうなんですよ。憧れの土地で、私の変なかつ面白いって言ってくれる人がいて、それをメディアで流そうって思ってくれてる人がいるんだっていうのは、すごいうれしかったですね。（西尾：じゃ、そういう札幌っていうのが、あこがれの土地っていうところから、自分の活躍の場みたいに。）舞台になった感じ。か、シャキッと決まった感じはあるかもしれないですね。（大澤 16 項）

概念《幅広い人が出ている》より、札幌人図鑑を初めて見たときの印象として、札幌人の多様さが一番多かった。このように札幌人自体の意識が広くなった状態で自分自身のこ

とを語ることで、多様な人の中の一部として、自分も札幌人なんだなという気持ちに自然となっている。

札幌に対する当事者意識が変化している可能性も考えられるが、一方で札幌という地域に対しての意識の変化を聞くと、あまり変わらないという声が多い。札幌人図鑑が人にフォーカスをしているので、「札幌人」への意識には変化はあっても、土地や地域に対する認識というのは変化しにくい。人にフォーカスをしているというところの影響、札幌人と札幌の意味合いの違いが大きく現れていた。

概念《地域貢献番組としての札幌人図鑑》

地域ローカルのメディアだからこそ、内容の質ではなく地域貢献の役割や新たな価値を探求することができること。

・2015 年にですね、全国 70 局くらいある J:COM がバラバラに作るのでなく、どローカルをテーマに番組制作を通じてどのように地域貢献できるか。ただ好きなものを作って流すだけでなく、どのように地域にいい影響を与えられるか。逆に J:COM が地域にとって必要だねとされる番組をつくれるか、ということが一つ指針として出されたんですよね。どローカルということをテーマにしていこうということがあったんですよ。それが 2015 年だったんですね。それでちょうど札幌はその時にですね、番組の改編のこともいろいろ考えてく中で、当時僕が札幌人図鑑を知っておりましたホームページで。まさにこれだよなと思っていたんですよ、ケーブルテレビがやる番組ってこれだよなって。福津さんすごいなって。毎日休まず、3 年で 1000 人とっぱして、いやぁすごいな。ほんとにこんなことができたらいいなと思っていたところ、福津さんがその 1000 回のきっかけに、いったん小休止と考えられていたみたいだったので、そのタイミングで、もし 1001 回以降やるのであれば、ぜひうちと一緒にやりませんかと提案をさせていただいていたんですね。まぁ福津さんとまぁ話し合いを続けていく中で、じゃあぜひ一緒にやっていきましょうと福津さんからも声をかけていただいて、それをきっかけに 1001 回目から番組と福津さんがやってるホームページの方も引き続き継続しながらやりはじめたというのが一番最初の経緯です。それが 2015 年の 11 月です。（中島 1 項）

・それこそ、その大学の時にやっていた映画制作ワークショップで、それが札幌のある地域を舞台にして映画を作るっていうのが必ずテーマになっているんですよ。私やった時は、芸森とか狸小路商店街とか、発寒、琴似とか。いろんなところ。主に商店街が多いんです

けど。そこと協力して、子どもに映画を作らせるっていうワークショップの裏方をずっとやっていて。そういう意味では、裏方だったので。もう地域との関わりが仕事みたいな。その協力をお願いしたりとか、エキストラさんお願いしたりとか。商店街の人にお願いしたりとか。そういう感じをやってたので。助成金取ったりとかもやっていたので。そういう意味でなんか、どうやったら私たちの魅力をわかってもらえるかもあるし、どうやったら地域の魅力を映画にできるかみたいな。ずっと考えてたかもしれないですね。（西尾：そういう観点から見ても、札幌人図鑑って、面白いなって思ったりしますか。）そうです。やってることが近いというか、逆に。そういう人の魅力だったり、地域の魅力をどうやったらみんなに分かってもらえるかみたいなのが。それで三つのキーワードとかを出すじゃないですか。あれの事前の打ち合わせでも、凄い福津さん、細かく聞いてくれるし。やろうとしていることは近いのかもっていうか。そういう意味で、自分がずっとベースになってやってきたこととの親和性みたいな、そういうのがあるかもしれないですね。（大澤５項）

札幌人図鑑は、地域貢献を意図した組織や活動との親和性が高いということがヴァリエーションから明らかになった。視聴率やスポンサーなどの制約がない中で取り組むからこそ、純粋に地域の人にスポットを当てた番組として取り組むことができる。地域内の新たな人の発掘と魅力の発信の蓄積によって、自然とそうした役割を担う組織や人とつながるようになる。

概念《中間支援・コーディネーター的活用》

新しい●●図鑑の立ち上げや、出演者が集う場、企業との連携など、地域の中の主体をつなぐ新しい仕組みへの活用の動きが生まれていること。

・ここでママ向けの活動をしていたので、ママも結構すごいことやっている人っていうか、いるんだよなと思って、どうしようかな、福津さん札幌人図鑑やっているし、私もできそうかな、福津さん専業主婦ずっとやっていた方で、そこからラジオパーソナリティーをやってっていうので、何か私もやってみようかなという気になったんですよね、そこで。それで、福津さんにちょっと相談したんです。メッセージを送って、ちょっと相談に乗ってもらえませんかっていうので。（越後４項）

・後は逆の使い方も今はしていますかね。例えば JCOM って番組を作るところじゃだけじゃなくて、当然営業もあったりするわけですよね。あとはイベントをやるプロモーショ

ンチームとかもあるわけです。で、例えばそういう営業部とかプロモーションチームとか自分たちで何かイベントを開催するとかっていう時に、例えばそうだな、動物フェスティバルみたいなのが、例えばうちのプロモーションチームがイベントを企画したとしますよね。そこでまずとっかかりとしてつながりをつくるために札幌人図鑑というのがあるから、そこで多少の PR も含めてですけども、出演してもらえませんか？って言って、まずそこでつながっちゃってから、今度はイベントの具体的な話をしていくとか。僕らだけじゃなくて会社全体としても今この札幌人図鑑というのを活用して自分たちがやるイベントだとか、そういうものの人脈を作るためのフックというか、器として使わせてもらってというところもあるんですよね。（中島 6 項）

ここでは、図鑑に出演した人が、自分が関係しているコミュニティでもこの仕組みを使うといい効果がありそうだと感じやってみたいという気持ちになるというこがヴァリエーションに表れている。それは、自分がインタビューを受けて色々な気づきがあったり、単純に楽しかったという気持ちがあるからこそ、自分でもやってみたいと思ったり、取り組みの形がフォーマットがあるため自分でもできそうだという心理的ハードルが低いなど、さまざまな要因が考えられる。始めるにあたっての動機には、それぞれの地域・コミュニティ内にいる魅力的な人を知ってもらいたい、知りたいという思いが根底にあるのかもしれない。

また、なにかコミュニティの形成に関心がある場合は、コミュニティメンバーになりうる人たちに ZUKAN インタビューに出演してみないかとアプローチすることができる。すでにコミュニティを持っている場合も、リアルのコミュニティは開催できる回数や規模などに限界があるが、オンラインであれば、自分のできるタイミングで取り組むことができるため、補完的な関係を作ることが可能である。

企業にとっては、札幌人図鑑を通じてインタビュアーが持っているネットワークや出演する地域のキーパーソンとつながりを作ることができるメリットがある。また、出演者からの依頼で大手メディアが知らない情報を元にした番組の企画が生まれるという具体的な事例もある。逆に取り組みたい企画のアイデアをベースとして出演者を選定するというアプローチも存在する。新しくつながりたい相手に対して札幌人図鑑へ出演の依頼という形でアプローチして、関係性を構築し企画の実現につなげられる。つながりにくい相手でもメディア出演を名目にすることで、ネットワークの構築をしやすくなる。

これらは ZUKAN インタビューの取り組みのプロセスを活用して、地域の人材を発掘

して関係性をつくり、新しいプロジェクトやコミュニティの創出につなげる、中間支援やコーディネーターのような立場としての活用といえる。言いかえると自己組織性の理論における「支援」の手法としての可能性を見出すことができる。

第５章　　総合考察

第１節　　はじめに

この章では、4 章までに明らかになったことを踏まえ、第 1 章にて設定したリサーチクエスチョンについて総合的に考察を行う。まずは改めてリサーチクエスチョンを振り返る。

1. 地域人材リゾーム形成への第一歩として、創造的個にアプローチする ZUKAN インタビューの実践にどのような効果があるか？
2. ZUKAN インタビューの設計思想に則った実践が、地域に根差すところまで発展していくために、どのような要素が必要か？

１つめのリサーチクエスチョンは、自己組織性の理論、手法としての OST および 100 人委員会の実践、京都市の町衆の歴史・文化から要素を抽出して定義し、形成プロセスを作成した「地域人材リゾーム」に対する ZUKAN インタビューの効果である。また「第一歩」とは、地域の創造的個である人材へのフォーカスであり、具体的には第２章の図６における前半のプロセスである【手法】～【図鑑】にかけてを指す。図 19 は、図 6 の一部の項目を ZUKAN インタビューの要素に置き換えたものである。

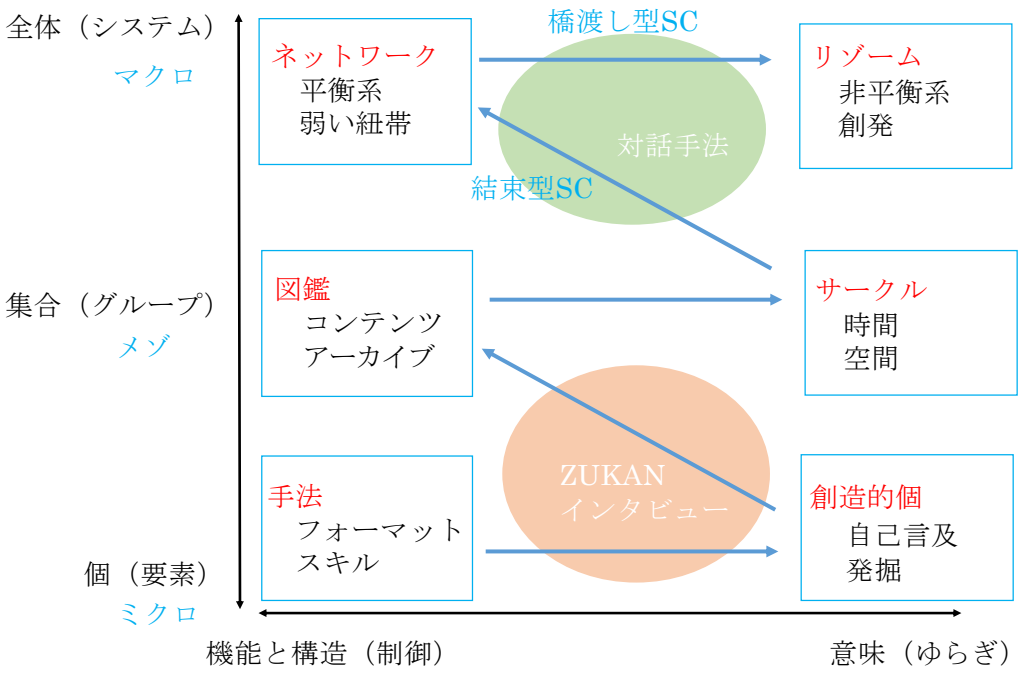

図 19：地域人材リゾーム形成プロセスと ZUKAN インタビュー（筆者作成）

地域人材リゾームの ZUKAN インタビューの効果は、3 章の ZUKAN インタビューの設計思想と、4 章の札幌人図鑑の調査分析の結果から以下の３つが導き出された。①創造的個の発掘：地域内の知られざる人材を舞台に上げる効果、②創造的個の強化：フォーカスされたことでの効果、および話されたストーリーのコンテンツ化の効果、③図鑑の構築：取り組みを積み重ねていくこと、人材情報が集積していくことでの効果。

２つめのリサーチクエスチョンは、実際に地域で ZUKAN インタビューに取り組む際に必要な要素、具体的には心構え、リソース、留意点などである。なにごとも言うは易く行うは難しであり、札幌人図鑑のように 1000 人を超え、地域の中で広く認知されるような取り組みにまで発展させていくことは並大抵のことではない。実際、筆者含めいくつかの地域や分野で●●図鑑が立ち上げられたが、現在も一定のペースで更新し続けているのは、企業が業務として運営している J:COM によるご当地人図鑑を除くと、札幌人図鑑のみである。そこで 4 章では、札幌人図鑑に加え、他の図鑑のインタビュアーへもヒアリングを行い、ZUKAN インタビューを取り組む動機や難しさについての情報を収集した。それらを整理すると、地域に根ざすところまで発展していくためのポイントとして①継続、②自分ごととの接続、③資金の獲得に分けられる。

そして、札幌人図鑑の調査分析では、本来の意図を超え、リゾーム形成の後半のプロセスにあたる内容についても具体的な事例が複数語られた。それらは①結束型および②橋渡し型のソーシャル・キャピタルに通じる内容である。つまり、ZUKAN インタビューの取り組みやインタビュアーの存在は、地域人材リゾームのプロセスの前半から後半のプロセスである場からネットワークに至る間をつなぐ役割も担いうることが明らかになった。この要素についても、追加の 3 つめとして記述したい。

次節より、順を追って詳細な考察を行っていく。

第２節　地域人材リゾーム形成への第一歩としての効果

3 章の ZUKAN インタビューの特徴と、4 章の札幌人図鑑の調査分析結果を踏まえると、図 19 の前半部分は、図 20 のように表すことができる。ZUKAN インタビューの手法を用いて地域の創造的個である人材にアプローチし、インタビュー映像を作成して配信する。

それらが蓄積して図鑑となる。このプロセスに対し、これまでの結果を通じて見出すことができた ZUKAN インタビューの効果は、①創造的個の発掘、②創造的個の強化、③図鑑の構築の３つにまとめられる。

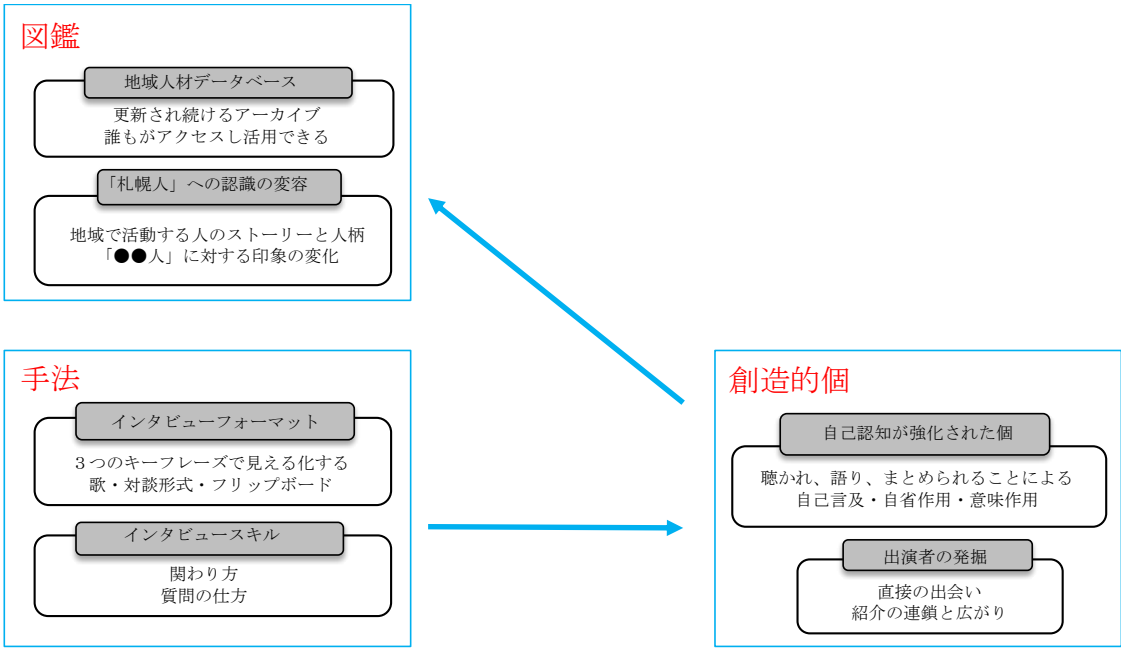

図 20　ZUKAN インタビューによる地域人材リゾームへの効果

第１項　　創造的個の発掘：地域内の知られざる人材を舞台に上げる効果

まずあげられるのが、地域内のまだ知られていない人材を発掘し、インタビューを通じてフォーカスをあてることによる効果である。地域のコミュニティは、職業や分野などで分断されており、かつ著名人でなければ既存のメディアで取り上げられることも少ない。まだ広くは知られていない、地域の中で主体的に活動をしている人を、人々の目にとまる舞台に上げることは、重要な役割である。その発掘の方法については、以下の 2 種類がある。これらの発掘を通じて著名人や社会的地位のある人だけでなく、分野も様々な人材を可視化することができ、そのことがゆくゆくはリゾーム化へにつながるゆらぎや相互作用による創発につながっていくのである。

直接の出会い

4 章の《インタビュアーの直接のつながりからの出演者の発掘》の概念にあったように、

まずはインタビュアー自身の以前からの知り合いや、何かの機会に出会った人である。ZUKAN インタビューをスタートするにあたって、まず自分の知り合いやつながりから入っていく。自分の知り合いがいなければ、持っている人と連携して取り組むなど、必ずしも自分が最初から持っていなくても取り組むことができる。ただ、始める際に自分の知り合いの中でも、知り合いの紹介でもいいので、できるだけ沢山候補者をリストアップすることから始める。その数は札幌人図鑑の場合は、100 人挙げていたが少なくとも 1 ヶ月分となる 30 人は確実にアプローチできると始められる。型があるとは言え実際に取り組んでみるとやってみることで初めて分かる留意点が出てくる。そのため、最初の数人は試行錯誤も含めて協力してもらえる近い存在からスタートすることをお勧めする。そういう意味では、人脈を持っておく必要はないが、協力や連携のできる人や組織がある状態からスタートすることが大切と言える。また札幌人図鑑では、インタビュアーが地域のイベントや企画の現場に足を運んで、そこで出会った人に声をかけて出演依頼をするパターンも多くみられた。やはり直接会うと、お互いに人となりがわかるし、その場で趣旨の伝達や都合の調整などが行えるため、アポイントメントにつながりやすい。

紹介の連鎖の広がり

次に重要なのが、《紹介による出演者の発掘》である。第 3 章では、研究者図鑑に置いて出演者に次の出演者を紹介してもらう「数珠つなぎ」の仕組みを導入していた。第 4 章の概念では、札幌人図鑑が導入した試みとして、信頼のできる地域のキーパーソンにおすすめの人材を紹介してもらう「キュレーターシステム」についての言及もあった。大事なのは、自分の周辺だけでなく、出演者や広く地域につながりのある人たちによる紹介で出演者を発掘していくことである。そうすることで、インタビュアー個人や特定の組織だけではアプローチできない多様な知らせざる人材にアプローチすることができる。既存のメディアではない ZUKAN インタビューのサイクルだからこそのスピードと幅広さが実現できる。それは基本コンセプトの【いつでも、どこでも、だれでもできる手法】によって毎日一人で行えるという身軽さも重要な要素である。

一定の数を超え認知が高まってくると、自然と色んなところから情報が集まってくるようになり、出演依頼をした時の承諾も得やすくなってくる。筆者の経験上、最初の 50 人を超えると徐々に反応が変わってくる。

第２項　　創造的個の強化：フォーカスされることや、コンテンツの効果

札幌人図鑑のプロセスの中で、出演者はインタビュアーからの好意的関心や受容的態度、取り組みを応援する言葉などを通じて、自分自身に対する肯定感やこれからに対する意欲の向上など、様々な形でエンパワーメントされる。出演者は未来を語ったことによる意識付けもあいまって、出演後新しいチャレンジに対する感度や一歩踏み出す勇気などが高まり、具体的な行動に移った事例も見られた。これは自己組織性の理論で言い換えると、創造的個の強化といえる。これは第 2 章で整理した①インタビュアーからの問いを呼び水として自分で自分のことを語る「自己言及」、②語ったことによって自らを省みる「自省作用」、③語った内容から新たな気付きを生み出す「意味作用」の 3 つに重なっている。今田の理論によると、ネットワークに自分で自分の構造を変えていく機能を加え、リゾームに至るために必要なのが自己言及と自省作用であり、かつ社会科学化するために必要なのが意味作用である。特に、個人の中でうまれた意味作用を他の人に伝わるコンテンツ化し、アーカイブとして誰もがアクセスできる形にしていることは、違う見方をすると、人の心の中というゆらぎを機能に変換することを通じたゆらぎ図式と制御図式の融合ということもできる。４章の調査分析を通じて、この創造的個の強化に、ZUKAN インタビューのフォーマットが大きく影響を与えていることが分かった。これもひとつのゆらぎ図式と制御図式の相乗効果ということもできる。

自分自身のことを語る「自己言及」

インタビューでは《インタビュアーからの質問》に答える形で、出演者は自分自身のことを語ることによる自己言及をする。ZUKAN インタビューではさらに、現在・過去・未来という設計思想における半構造化の枠組みがあることで、現在の活動だけでなく、人生や心の中ついて全体的な内容の《フォーマットとインタラクションから引き出されるストーリー》が語られる。

語ったことによって自らを省みる「自省作用」

出演者は自分自身について語る中で、先ほどの枠組みに加えインタビュアーによる《目の前の人のリアルに焦点を当てる》関わり方や、相手の源にアプローチする傾聴を通じて、《自分のヒストリーが整理され、まとめられる》。そうして《浮かび上がってくる 3 つのキーフレーズ》を目にすることで、自分自身の活動やヒストリー、さらには思考の癖や

価値観など自らを省みることになる。

語った内容から新たな気付きや共感を生み出す「意味作用」

語られた内容は、言葉にすることで単に言語的情報だけでなく、聞いた人それぞれに伝わる意味を持つ。3 つのキーフレーズの３つめには、《未来を語ることによる一歩踏み出すことへの勇気づけ》の効果がある。また、出演者は自らが語った話に対して、インタビュアーから共感され《応援されることが自己肯定感の向上や強みにつながる》。さらに、語られた内容がコンテンツとして配信され、それを見た《知り合いからの反応で喚起される感情および相手との関係性の変化》も重要な意味作用である。

第３項　図鑑の構築：取り組みの積み重ねや、情報の集積による効果

インタビューを繰り返していくことで、地域人材の情報が蓄積され、データベースが形成されていく。地域人材のデータベースは、具体的な人の名前や、自分の興味関心のキーワードなどで検索をしてアクセスすることができ、それを見ることで、自身の取り組みへの参考にしたり、実際に会う時の会話のきっかけを考えたりすることができる。特に後者は、実際に会った際に相手に対する親しみやすさから心理的ハードルを下げ、スムーズ且つスピーディに相手との深いコミュニケーションや関係性を進めたりすることができる。また、データベースは蓄積され認知が広がっていくと、それを見た人に地域の人材の多様さや、行動する人たちの存在を身近に感じるように印象づけ、それらはゆるやかな規範のようなものを醸成する入口とも成り得る。100 人委員会のときは、運営事務局のメンバーが持っているネットワークを寄り集めることによって、一種の人材情報の集約を行った。これは、２章でも述べた京都市の市民活動の歴史や文化の背景があるからこそ可能であったと考えられる。それを、どのような地域でも人材の情報が集まり、誰もがアクセスできるデータベースを構築することは、100 人委員会のようなプロセスを辿っていく基盤として重要であると考える。つまり、ZUKAN インタビューをすることで創造的個が集積され、地域人材リゾームの後半のプロセスにつながっていくと言える。

地域人材のデータベース

蓄積されていったアーカイブは、《人の名前で検索しての利用》や《目的や興味関心などのキーワードで検索》といったデータベースとしての活用ができる。その際、《著名人

も一般人もフラットに人柄を伝える映像コンテンツ》であることが、重要である。リゾームは上も下もなく、はじまりも終わりもない自在結合の概念である。ZUKAN インタビューも知名度や地位・年齢などに関わらず、全員同じフォーマットで紹介をしている。そのことが、次のサークルの状態につながり、OST のような自己組織的な人の関わりが生まれてくるのである。また、人材の発掘の段階で多様な人が発掘されることが、ひいては人材データベースの多様性にもつながってくる。

「●●人」への認識の変容

掲載される地域人材の数が増えていくと、《幅広い人が出ているという印象》《知っている人が出ているという印象》《活躍している人が出ているという印象》など、見る人はその図鑑に対してさまざまな見方をするようになる。とくに《幅広い人が出ているという印象》は、自分たちの地域には、自分が思っていた以上に多様な人材が活動していることへの認知ということができる。また《活躍している人が出ているという印象》は、同様に、自分が思っていた以上に地域に対して精力的に働きかけている人がいるという認知につながったと考えることもできる。これらの意識は、Putnam の市民共同体を示す市民性の「公的諸問題への市民的積極参加」や町衆の「自分たちのまちは自分たちで」とも共通する。そして、その多様さは、大きな組織の役員やメディアでとりあげられている著名人だけでなく、自分と立場の近い人や、自分の近所の人、知っている人など、身近な人も含んでいる。そのことで、図鑑に出ている人に対して、画面の向こう側という遠い世界ではなく、自分のような人でもいいんだ。自分も機会があればこの中に入れるだと、《『●●人』としての意識の変化》が起きる。特に移住者の場合、自分はよそ者という意識から、自分のアイデンティティとしての地域を表に出すのを遠慮しがちである。そうではなく、さまざまな関わり方があっていいという、受容性を示したりお墨付きを与えたりするような効果も、人材情報の集合である図鑑から示されることがある。

第３節　　地域に根差すまでの発展に必要な要素

ここからは、リサーチクエスチョン２について言及する。地域人材リゾームをめざし、新たに地域の中で ZUKAN インタビューを始めたとして、それを地域に根ざすところまで発展していくためのポイントとして継続と自分ごととの接続、資金の獲得の 3 つに分けて考察していく。

第１項　　長期の継続と高頻度での更新

ZUKAN インタビューを取り組む際に重要な視点は、初めから質を追わないことである。質を追ってしまうと既存のメディアの蓄積したノウハウや技術、専門の機材などに太刀打ちするのは非常に困難である。また、データベースの形成の視点を考えても、数をいかに増やしていけるかということが重要である。地域の中で、認知を高め様々な協力者や出演者の発掘につなげるためには、まず《継続による効果とインパクト》を出していくことが大切である。その際「365 日毎日、3 年で 1000 人」などのキャッチコピーは初めて聞く人にも伝わりやすく、取り組みの認知を高めることにつながる。

次に、《全て一人で行っていることのインパクト》を出していく。札幌人図鑑でメディア関係者からの反応として情報の速さに対する驚きというのがあった。一人で取り組むことができ、人材の情報があったら、すぐにインタビュー及び配信を行うことができる。そうしたまだあまり知られていない情報や人材をいち早く取り上げ紹介することも、地域の中で認知を高めるポイントと成り得る。また、そうした情報へのアクセスのしやすさもできるだけ考えていく必要がある。ZUKAN インタビューは基本的にインターネットで誰もがアクセスすることができるものとして配信をしているが、キーワードや名前などで検索をして、見たい人の映像に辿り着きやすくしていくことも大事である。

第２項　　インタビュアーの自分ごととの接続

インタビュアーの必要な素養として、まずはインタビュースキルが挙げられる。インタビュースキルについては第３章で詳細に述べた。また、札幌人図鑑においても、インタビュアーからの質問や関わり行動から出演者の語りや気づきなどに大きな影響を与えていることが示唆された。一方で先程も述べたように ZUKAN インタビューはフォーマットがあり、スキルがまだ熟達していない人でも取り組みやすいような仕組みとなっている。概念《インタビュアーの出演者の関わり方》で紹介したヴァリエーションで見られたように、スキルが拙くても、一生懸命聴こうという姿勢や、出演者に対する関心を示す努力さえあれば、相手はそれに応えようと真剣に話をしてくれるものでもある。

料理のようなもので、スキルが上がると様々なパターンへの対応や安定感につながるが、まずはフォーマットというレシピに沿って丁寧に経験を積んでいけば、数を重ねるごとに熟達していくものである。先程数のインパクトの話をしたが、数にはもう一つ、量質転換

という見方もある。こちらも経験上、50 人前後までとにかくやり続ければ、場馴れや要点の感覚を掴むことができてくる。

インタビュアーにもう一つ重要な点は、ある意味スキルよりも大切な点で在ると言える、「自分ごとと一致しているか」である。「自分ごと」とは、《インタビュアーの興味関心という軸》であり、好きなトピックや自分自身が地域の中で実現したいこと、その他自分自身がやりがいを感じることなど、これらと ZUKAN インタビューの実践の重なりを常に持っておくことである。ZUKAN インタビューに限らず、ほぼ毎日のように取り組み続けるには、義務感だけでは続けていくことは難しい。自分の中の大きな目標、目印となる北極星のような自分ごとに向かう一つの手段として、ZUKAN インタビューの実践というものを位置づけられるかどうかが重要である。それは直接的にインタビューをすることが好きで、興味のある人をインタビューするという意味ではない。ZUKAN インタビューの実践と図鑑の構築によってもたらされる効果や成果が、その北極星への様々な意味での糧となるということが大事なのである。言い換えると、自分ごとと地域ごとの重なる部分に ZUKAN インタビューがあることが、あるべき位置づけなのである。

第３項　　資金の獲得

次に、活動資金の問題である。趣味で行うのでなければ、活動資金が無いと続けていくことはできない。研究者図鑑は所属していた組織のプロジェクトとして取り組んでいたし、札幌人図鑑はフリーランスでの収入がある上で個人の活動として行っていた。現在はテレビ局との連携で出演料という形で継続的に資金を得ながら活動を続けている。ふくしま人図鑑は震災復興のプロジェクトとしてスタートし、震災復興の事業の予算で行われていた。いくつか図鑑が立ち上がってきたが、ふくしま人図鑑も含めて継続ができなくなる理由は、継続的な資金が得られなくなるとどうしても続けていくことが難しくなる。札幌人図鑑のようにそれ自体で資金が得られなくても取り組むことはできるが、それはよほど優先順位が高くなければ難しい。活動資金の獲得にもいくつかのパターンが考えられる。まずは筆者のように所属する組織やプロジェクトの事業として取り組む形である。例えば、地域の中間支援組織や行政のコーディネーター職が考えられる。さらには、地域おこし協力隊として、地域に入りその地域の中で、地域に入った最初の取り組みとして行うのもいいのではないだろうか。地域の中のキーパーソンに会いに行き、話を聞き、関係性を構築することは協力隊が修了したあとの自身の活動にも大きな資産と成り得る。その地域の中でまた

新たな地域おこし協力隊員が引き継いで実施していくことで、継続的に地域の人材の情報が可視化され蓄積されていくことができる。もう一つは、クラウドファンディングやスポンサーなど活動資金を地域の内外のステークホルダーから集める方法である。ただ、クラウドファンディングは、継続的な資金の獲得にはあまり向いていないため、スタートアップのサイトの立ち上げや軌道に乗るまでの活動費の獲得までとした方がいいだろう。

スポンサーであるが、ジェイコムのご当地人図鑑のある地域では、地元の企業がスポンサーとして入っている事例もあるように、地域の様々なキーパーソンとつながりが作れる機会を設けるなど、地域の企業にとってのメリットとなる仕組みをつくることが大切となる。また、スポンサーとの関係は注意が必要である。人選など地域のキーパーソンでもその企業と競合になるような人は紹介できないといった制約が発生すると、ZUKAN 本来の精神や価値が削減されてしまうことになりかねない。

第４節　　リゾームに至る兆しの要素

ここまで、1.地域人材リゾーム形成への第一歩として、創造的個にアプローチする ZUKAN インタビューの実践にどのような効果があるか？、2.ZUKAN インタビューの設計思想に則った実践が、地域に根差すところまで発展していくために、どのような要素が必要か？という２つのリサーチクエスチョンについて考察を行ってきた。先述したとおり、もともとの研究対象はここまでであるが、札幌人図鑑の調査を通じて、その次のリゾームへとつながる流れについても要素を見出すことができたので、項目を追加して記述していく。

第１項　　ネットワーク化

まず、札幌人図鑑の中で顕著に現れていたのが、インタビュアーの存在自体の持つ影響力である。出演した人たちはインタビュアーを通じて他の出演者とつながることになる。これはネットワーク論でいうところの、構造的隙間（Structural Hole）[13]にインタビュアーが位置していると言える。《インタビュアーによる出演者との継続的な関係性とコミュニティの形成》は非常に重要な要素となりうる。次に、《出演者および関係者が集う場へ

[13] Burt（1992）が提唱した、相互関係になり人々の間に生じるネットワーク構造上の隙間である。互いに知り合いではない集団に所属するため、隙間に位置する人はネットワークを通じた多くの情報や、つながっている人の間での交渉を通じた漁夫の利などを得ることができる。

のニーズ》である。そうしたネットワークやコミュニティが相互作用し、リゾームにつながっていくためには、出演者を中心とした多様な人々が出会い、交流する場が必要となる。札幌人図鑑の出演者でもそうした場へのニーズは高く、実際に 1000 人記念パーティーや本の出版記念パーティーなど何度か開催され、さらには、2019 年からは都通りスタジオとして特定の場所をインタビュアーが用意し、小規模な集まりや企画を行える実験的な取り組みもスタートした。本論では、それらを通じた効果の調査までは行っていないが、次の研究課題として ZUKAN インタビューからリゾームにつながる取り組みについても深めていきたい。本論を執筆しいている 2020 年には新型コロナウイルスの影響で、直接的な人の交流が困難な状況になった。そうした中オンラインのコミュニケーションツールを使ったイベントや交流の機会が注目されることとなった。ZUKAN インタビューからリゾームにつながる仕組みとして、そうしたオンライン上の場やコミュニティも十分に考えられる。

ZUKAN インタビューによって創造的個が強化され、一人ひとりの自己認知や意味が明確になっている状態で、且つその情報がデータベースとして集約され誰もがアクセスできる状態であり、予め見たり集まった場で提示することで、参加者同士の相互理解や共感などコミュニケーションが円滑になる。コミュニケーションの深さと速さが高まる状態で相互作用することによって、《出演者同士のつながりやコラボレーションの創出》も起きやすくなっている。それは多様な人が集まる混沌と揺らぎの中に自己言及を通じて、新たな秩序が生まれていく自己組織性のプロセスにつながっていくのである。

第２項　　支援の仕組み

リゾームへの兆しのもう 1 つは、支援の要素である。そもそもインタビュアーという存在自体、出演者の自己認知の強化や情報発信を助け、エンパワーメントしていく支援者といえる。さらに、《地域貢献番組としての札幌人図鑑》という見方もされているように、そのプロセスや存在は、地域への支援サービスと捉えることもできる。さらに ZUKAN インタビューの運営側だけでなく、外部の組織や人により、《中間支援・コーディネーター的活用》につなげることもできる。地域人材リゾームのプロセスの中で制御図式とゆらぎ図式の間をつないできたが、管理は行っていない。プロセスを通じて地域の人材が自己組織していく支援のための手法であり、図鑑なのである。

第６章　　終章

第１節　　はじめに

第 1 章では、VUCA の時代における機械論パラダイムの限界と生命論パラダイムの可能性について述べた上で、生命論パラダイムを視野に入れたソーシャル・イノベーションのあり方を考察した。そして、その実践として ZUKAN インタビューをテーマとし、以下の 2 つのリサーチクエスチョンを設定した。

1．地域人材リゾーム形成への第一歩として、創造的個にアプローチする ZUKAN インタビューの実践にどのような効果があるか？

2．ZUKAN インタビューの設計思想に則った実践が、地域に根差すところまで発展していくために、どのような要素が必要か？

第 2 章では、地域社会における自己組織化にまつわる理論、手法および実践、歴史・文化的文脈を統合して「地域人材リゾームを」定義した。具体的には、自己組織性理論、手法としての OST および実践としての京都市未来まちづくり 100 人委員会、地域の根底にある歴史・文化としての町衆の精神の 3 つを組み合わせ、要素をつなぎあわせた概念化とプロセスモデルの作成を行った。多様な人材が集積している地域は各地に存在しているが、注目されているのはカリスマ的リーダーによるイノベーティブな事業を核とした集積（クラスター）か、UI ターンを通じた外部からの人材（いわゆる若者・馬鹿者・よそ者）流入によるものが多い。京都市は地元民も移住者も区別なく多用な人材が主体的に活動をしているが、元々町衆文化をはじめ、長い年月をかけ育まれてきた地域活動や市民活動の土壌が存在している。いずれにせよ、何かしらの中心的な存在や年月をかけた文脈がなければ到達できないモデルとなっている。言いかえると、図のプロセスでいえば後半部分に視点が集まりすぎているのではないかという問題意識である。そこで、プロセス前半に目を向け、プロセスの起点となる取り組みとして ZUKAN インタビューを提案した。

続く第 3 章では、その「ZUKAN インタビュー」について、フォーマット形成の背景や経緯、具体的な方法や設計思想などを詳細に記述した。ZUKAN インタビューはもともと、研究者ネットワークの構築が目的であり、質ではなく数のインパクトで認知を高めていく作戦であった。数を重ねていく中で、研究の紹介から研究者の紹介へとコンテンツの方向性の転換、数珠つなぎによるあらゆる分野の研究者の発掘、インタビューを通じた気づきや効果など、もともと想定していなかったような成果が生まれていった。そうして蓄

積したノウハウを整理し、設計思想として体系化を行った。設計思想は、【基本コンセプト】（人の前向きな想いと行動を見える化する漢方型メディア、いつでも、どこでも、だれでもできる手法、「人」を通じて伝えるヒト・モノ・コト）、【ZUKAN フォーマット】（3 つのキーフレーズ、対談式の映像、OP ソング）、【インタビュー】（傾聴：安心安全の場を構築、質問：事柄から意味・源へ、語り：振り返りと発見）という要素で構成されている。インタビュアーとの相互作用により、相手の表面的な情報だけでなく、思いや価値観など目に見えない深い源に近づけるように進めていく。その際、3 つのフレーズや半構造化の質問などの働きが道標となる。そして、ZUKAN インタビューのプロセスを活用した人材育成のプログラムや、ふくしま人図鑑をはじめとする他地域へ展開を紹介した。

第 4 章では、ZUKAN インタビューを第三者が 1 から立ち上げて、オリジナルの研究者図鑑を超える 1000 人以上の地域の人々を紹介している札幌人図鑑を対象に、出演者および関係者へのヒアリングを通じた質的データと M-GTA の手法を用いた分析を行った。その結果として、最終的に 32 の概念にまとまった。また、各概念の類似性や相互関係などを検討して 10 のカテゴリーを作成し、さらに、3 のコアカテゴリーを作成した。それらの関係を整理することで、ストーリーラインと結果図を作成し、札幌人図鑑を通じて地域人材リゾームの初期段階を形成するプロセスモデルを提示することができた。

第 5 章では、総合考察として、その分析結果を受けて、改めて 2 つのリサーチクエスチョンについて考察し、ZUKAN インタビューの実践を通じた効果と、実践する際に必要な要素について検討を行った。1 つめの地域人材リゾーム形成への第一歩としての効果については、創造的個の発掘：地域内の知られざる人材を舞台に上げる効果、創造的個の強化：フォーカスされることや、コンテンツの効果、図鑑の構築：取り組みの積み重ねや、情報の集積による効果の 3 つに、2 つめの地域に根ざすまでの発展に必要な要素は、長期の継続と高頻度での更新、インタビュアーの自分ごととの接続、資金の獲得の 3 つに分けて考察を行った。またその先のリゾームに至る兆しの要素として、ネットワーク化と支援の仕組みの 2 つについて考察を行った。

最後に本章では、今後の研究課題や展望、本論の内容の先にある生命論式ソーシャル・イノベーションの実践として目指していきたい地域や社会のあり方、その中での ZUKAN インタビューが担いうる役割などを整理し、述べていく。

第２節　今後の課題と展望

今回は、生命論パラダイムのビジョンから ZUKAN インタビュー実践まで含む、網羅的なものとなった。生命論パラダイムやリゾームの視点がなければ、単に独特なフォーマットを持ったインタビュー手法の紹介でとどまってしまうため、長期的・俯瞰的視点でのソーシャル・イノベーションのための実践であることを示すためには、必要な内容、構成であった。

第１項　理論面

いくつか理論的に深めたいものとして、今回は代表的な Putnam の理論の要素との接続は行ったが、より精緻な「ソーシャル・キャピタルと地域人材リゾームの理論的接続」を試みたい。

特に今回は、意図的に Putnam による結束型と橋渡し型の分類を中心に扱ったが、個別の要素（信頼と互酬性など）や他の論者による概念の詳細な検討までは踏み込んでいない。ソーシャル・キャピタルは非常に多様な定義や解釈があるが、一つの軸としてネットワーク論がベースとなっている。今田の自己組織性理論で述べたとおり、ネットワーク論には自己言及やゆらぎの要素が入っていない。そもそもが「資本」という蓄積され使用される元手を意味する言葉が使われている。しかし、ソーシャル・キャピタルの持つ「信頼」「規範」といった認知的ソーシャル・キャピタルは、自己言及や相互作用に関わりうる要素であると考えられる。言いかえると、シナジェネティックな自己組織性の側面からソーシャル・キャピタルを捉えることで、ソーシャル・キャピタルの形成プロセスを明らかにし、さらには静的・均衡なネットワークから動的で不均衡なリゾームへという流れが表現できる可能性がある。

さらに、発展的に、生命論パラダイムにおいては、トランジションデザインや Teal 組織といった、新しい理論・手法へのより具体的、実践的な接続も考えられる。地域人材リゾームへ導くトランジションデザインの手法として Teal 組織の概念やプロセスが援用できるかもしれない。例えば、トランジションデザインでは、持続可能な社会に向けてのコスモポリタンローカリズムや日常生活とライフスタイルの持つ影響や効果を、学際的な理論で明らかにしている。特に社会学やデザイン学と複雑系の理論を統合して、日常生活のニーズがミクロ、メゾ、マクロと展開される「入れ子」の概念は、まさに自己組織性を通じた持続可能な社会へのトランジションの構造をあらわしている。また、ヒエラルキーを

排し構成メンバーの自律性により組織運営が行われる Teal 組織は、主に企業や NPO などの現場で導入が試みられているが、地域レベルでの取り組みも考えられる。ホールシステムアプローチももともとは組織や紛争地の解決などで使われていた手法だったが、地域活性やまちづくりで広まっている。

第２項　　実践面

今回の調査では、主にインタビュー実践の現場を対象としたため、画面の向こうの視聴者は対象外としていた。視聴者のインタビュー映像を見ての意識や行動の変容などについて調査し、今回の結果と照らし合わせることは、地域人材リゾームの主体を広げる意味でも重要な視点であろう。

札幌人図鑑が 1700 人を超えるほどの規模にまで展開ができたのも、福津京子という個人の持つ人間性、技術、環境などの総合的なリソースによる部分は大きい。インタビューなどの経験の有無に関わらず、地域へのコミットメントへの意欲のある人が、この手法を使って実践を行った場合の事例調査も、テーマとなりうる。特に I ターンで新たに地域おこし協力隊となった人が、赴任した地域内で実践することで得られる効果と成果からは、各地で課題となる移住者の能力と地域のニーズの最適なマッチングや迅速な関係性構築のヒントが得られるのではないかと考えている。

第３項　　機能面

YouTuber のような継続的に動画配信をする人たちが増え、映像コンテンツ利用の層やシーンも広がっている。しかし、20 分映像を毎日見るのは難しい。札幌人図鑑の調査でも多く聞かれたが、映像を見るのは知り合いか、事前調査の必要性があるか、よほど興味がある場合に限られる。

より視聴しやすいコンテンツの見せ方、「図鑑」としての機能など、視聴者のユーザビリティやアクセシビリティにフォーカスした取り組みも必要である。20 分の映像を気軽に見られる、もしくは映像を見なくても一定の情報を得られるなど、図鑑をぱらぱらめくるようにサイトにアクセスできるにはどのような仕組み、デザインが必要か。これは一人の専門性では困難なテーマであるため、WEB メディアのデザインに関する専門家などとの共同で取り組むことを視野に入れて考えていきたい。

第３節　　終論

第１項　　誰もが「自分ごと」で行動する地域へ

最後に、全体のまとめとして、ZUKAN インタビューの目指すソーシャル・イノベーションのビジョンを示して終論とする。序論の冒頭にて、VUCA 時代について述べたが、我々が暮らす日本の地域社会においても少子高齢化、異常気象、子どもの貧困など、VUCA 要素の非常に高い問題を多く抱えている。さらに、課題先進国と言われるように、それらの課題は世界の中でも予想される状況の進展は早く、すでに影響が出始めている。序論で述べたような時代背景に対応できなければ、企業などの営利組織のみならず地方自治体などの公的機関でさえ、「消滅可能性都市[14]」という言葉が生まれるほど、存続が危うくなるような状況になってきている。世界的な動向を意識しつつ、コミュニティとしての持続可能性を担保し、住民一人ひとりも豊かな暮らしを送ることができるような地域づくりが求められていると言える。

VUCA 時代の社会や地域の課題は、もはや限られた権力者の力、偉人によるリーダーシップだけでは根源的な解決は不可能である。すべてのステークホルダーが想いや能力を出し合って関与することが不可欠である。その関与の形も、評論家やコンサルタントのように変えようとしている世界の外に立っての関与ではなく、自分自身が変化させたいと考えているシステムの一部であると認識し「世界が変われば私たちも変わり、私たちが変われば世界も変わる」という、相互作用的な関与へ私たち自身が、意識と態度を変化させていく必要がある。過去にも、1993 年の阪神・淡路大震災や 2011 年の東日本大震災などの天災、2001 年のアメリカ同時多発テロ事件、そして本論の執筆をしている 2020 年に世界的なパンデミックとなった新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の感染拡大など、衝撃的なできごとをきっかけとして人、さらには社会全体の意識は大きく変わってきた。しかし、そのような変化は計り知れない犠牲の上に成り立っている。外部的な力を必要としない、自分たち自身の内発的な力を引き出すことでの意識変化こそ、まず考えていくべきアプローチであろう。また、前者は偶発的・受動的なものであるが、後者であれば、さまざまな「仕掛け」や「仕組み」として、私たちが意図的・能動的に発生させていくこともできる。

考えるべきは、一部の意識ある人たちの輪を超えて、どうすれば多くの人々が社会に対

---

[14] 少子化や人口減少により、将来の消滅が危ぶまれる自治体のこと。日本創成会議（増田寛也座長）が 2010 年から 30 年間の人口の移動を全国の市区町村別に推計し、2014 年に発表した。

して「自分ごと」として捉えて接することができるようになるかという、意識・行動変容のメカニズムである。ただ一方的に「自分たちで社会を、地域を変えていこう！」と啓発をしたとしても、むしろ拒否反応を示されることだろう。他者の意思で「変えられる」のは外発的な力による変化である。自らの意思という内発的な力で「変わっていく」には、「自分もこうなりたい」「やってみたい」と思えるようなロールモデルの存在が必要である。

第２項　　ロールモデルとしての「凡人」

筆者はこれまで、産官学民の間に立つコーディネーターとして地域活性やまちづくりに携わり、加えてあらゆる分野、地域、職業の人たち 1000 人近い人々にインタビューを行ってきた。それらを通じて地域の現場で活躍している人々と接して実感しているのは、「世の中をより良くしよう」、「地域に貢献しよう」、「困っている人の助けになろう」という前向きな想いをもって行動を続けている、ロールモデルとなりうる人たちが、実は誰もが出会える身近な範囲にたくさん存在しているということだ。中には、すでにメディアにも取り上げられ、社会的注目を集めているカリスマ的リーダーもいる。しかし、実際は、地域の中でもまだ存在が知られていない、地道に活動を続けている人々がほとんどである。社会的認知に直結する既存のメディアでは、もともと著名人であるか何かしらニュース性がある取り組みであるか、よほどインパクトのあるものでなければ取り上げられないためである。

20 年以上、全国各地の地域の現場で活性化に取り組んできた地域再生事業家である木下斉（2018）は、「いつまで待っても地元にスーパーマンは来ない」（木下斉 2018：5）と訴える。成功しているように見える地域のリーダーは、ときにスーパーマンに見えるが、それは単なる勘違いである。若い頃に様々な失敗をしていたり、 普通の人なら立ち直れないような経験もしていたりする。スーパーマンが一人でまちを変えてくれることはない。大事なのは、最初は少人数でいいので「よき仲間」を見つけ、地味であっても事業を継続して成果を着実に積み上げていくこと。「ヒトなし・モノなし・カネなし、という困難な状況でもめげずに足を一歩前に出し進んできた「凡人」がいるかどうかが、各地域の明暗を分ける」（木下斉 2018：6）のである。

どんな地域にも「人材」は必ずいる。独自のコンセプトの店を、自らのリスクで立ち上げ成功しているオーナーは個性豊か。前例や和よりも自らが「こうだ」と思ったら、それ

を優先する。だからこそ、地域の政策決定などの委員会に呼ばれることはほとんどなく、地元の経済団体において「浮いた」存在として目される。結果として「地元にはいい人がいない」と嘆くことになる。困難な地域であっても、従来の既得権益にとらわれず、支援もあてにせず、自らのコンセプトと人間的魅力で人を集める人材こそ、地方にとって未来を切り開く「担い手」である（木下斉 2018：56）。

まだ知られていない人々が、多くの人に知ってもらうことができる仕組みができれば、ロールモデルに触れて「自分も」という内発的な気持ちを喚起し、何かしら小さな一歩につながる可能性が広がる。一人ひとりの小さな行動を引き出すことを積み重ねていき、社会や地域全体が「自分たちの行動でより良くしていく」という文化・風土となることで、新しい問題が起きたとしても、その都度、新しい行動が生まれ、解決に向かっていくことができる。さらにはすでに起きてしまった課題への対処療法だけではなく、未然に問題の発生を防ぐ免疫構造ともなりうる。日常的に人々が関わり合い助け合う社会は、レジリエンスが高く持続可能な社会となる。

また、もし一歩踏み出して行動する人々が互いに認識し、同じ目標に向かって結集すれば、これまで解決できなかった問題の解決や、目指す未来像の実現に近づくはずだ。現に近年は、2010 年 12 月のチュニジアでのジャスミン革命をはじめとして、Twitter や Facebook などソーシャルメディアを通じて人々が集い、ムーブメントとなり、地域、国、さらには国際的な世論を動かすような事例も出てきている。しかし、それも、国の危機的状況という非常時かつ外部的な要因による動きである。より日常的に、内発的な力で行動している人のロールモデルと出会うことができる社会・地域の取り組みを考えていくことが必要である。

第３項　「日常生活」の支援を通じた活私開公

トランジションデザインでは、地域の人々の「日常生活」も、持続可能な未来と生活の質の向上のためにデザインするための主要なコンテクストとすべきであると提案している。ライフスタイルや日常生活の中で、人々がどのようにして彼らのニーズを満足させるかを理解することは持続可能な解決策を開発するための重要な戦略である。トランジション・デザインでは、コミュニティが自己組織化しており、その結果、家庭、近隣、都市、地域などの様々なレベルでニーズの満足度を（内生的に）コントロールできる場合、日常生活はより持続可能である（Kossoff, Tonkinwise and Irwin 2015：18）と論じている。しか

し、社会が近代化するにつれて中央集権化が進み、ニーズ充足のコントロールは日常生活から切り離されて外部の機関に委譲され、充足者はしばしば劣化して相乗的な統合性を失い、あらゆる規模のレベルで日常生活の領域の活力と実行可能性が低下する傾向にある。このダイナミックさが日常生活の持続可能性の低下につながっている（Kossoff, Tonkinwise and Irwin 2015：20）。持続可能な社会への移行のためには、日常生活の構造や活力が地域内で内生的に循環する仕組みのデザインが必要となる。

今田（2005）は旧来の公共性の特徴として、《私》と対立したかたちでの《公》を問題とすることにあったという。「私事とは別に公が存在し、私事を超えた問題に参加することが公共的関心を示すことであった。行政管理型の公共性と市民運動型の公共性は、ともに《私》に対置されたかたちでの《公》という枠組みを持つ。」（今田 2005:266-67）

しかし、現在求められているのは、「《私》を活かして《公》を開くこと、すなわち《活私開公》の視点」（今田 2005:267）であり、私的な行為のなかに公共性を開く契機を見いだすことであると主張する。

それは行政管理型や市民運動型の公共性に代わって広まりつつある《自発支援型の公共性》と呼べる領域にヒントがあるという。具体的には民間の支援活動としてのボランティア団体や NPO、NGO などである。「行政管理型の公共性が持つ限界を、支援活動というかたちで一人ひとりの自発的な実践によって克服する行為が自発支援型の公共性の基礎である」（今田 2005:267-68）。

さらに、「支援とは、他者の行為の質の維持、改善をめざす一連の行為のことであり、他者をエンパワーすることにある。つまり、他者がことがらをなす力、生きる力をつけることにその本質がある。支援をおこなう当事者は、自分の生き甲斐や自己実現を得るという私的動機を持つが、これを満たすために被支援者の行為の質を改善し、被支援者をエンパワーするのである。そこでは私的な自己実現をすることと他者の支援とが分離せず、渾然一体となっている。」（今田 2005:268）

認識すべきは、「公と私というかたちで対立的に捉えられた、行政管理型の公共性や市民運動型の公共性だけでなく、それ以上に自己実現という私的な動機に裏づけられた支援活動によって、各人がそれぞれの公共空間を開いていくこと」（今田 2005:268）である。

第４項　　凡人集めて非凡を成す ZUKAN インタビュー

日本のソーシャル・ビジネスの草分けの一人である熊野（2013）は、人間は本来、

自然のために、社会のために、人のために行動したいという利他的欲求を持ち、人と仲良くしたい、愛されたいという信頼動機で行動することができる存在であると主張する。しかし、同時にこのような欲求は、脆く儚い。容易に物的欲求に凌駕されてしまう。経済の視点では不確実なものとされてしまい、工業化社会の中で切り捨てられてきた。熊野はそのような現実の中でも、大勢の人間が集まって質的・量的に確実性を高めることで、さらに、多くの人が集まり相乗効果が生まれ、一人ひとりの利他的行動の時間も長くなっていく。そうした利他的モデルの実現が必要であり、そのためには、母体となる生活文化—意味のある食事、意味のある衣料、意味のある住居などのライフスタイル—を共有するコミュニティーが必要であると述べる（熊野 2013:92-93）。それは、地域の人の心から生まれる「心産業」—「フィロカルチャー（Philoculture）＝生活文化を愛する産業」または「マインダストリー（Mindustry）＝心をつくる産業」とも—を起こしていくことで実現していく。心産業は、原価が計算できない信頼や愛情といった心の伝わる産業であり、人が主役の事業群である（熊野 2013:14,158）。

ZUKAN インタビューはまさに、地域や社会に点在する「凡人」の可視化の取り組みである。そのアーカイブである図鑑は、その人のもつ属性や事柄などの無機質なデータベースでなく、心や人柄などの柔らかいデータベースである。これらに触れた「凡人」の新しい小さな行動の喚起が、理想的なアウトカムといえる。同時に図鑑で紹介する人々は、おのおのの商品やサービスを持っている場合も多い。そうした実利的な情報も、その人の心や人柄といった柔らかい情報と文脈をつなげていくことで、地域の人の心から生まれる「心産業」の創出にもつながりはしないだろうか。

地域内で手作りで提供しているものは、何かしらの「心」がこめられているはずである。それを言語化することも、創造的個に働きかけ、ニーズの地域での内生化を推進する「支援」である。それは人々の日常生活という《私》から生まれた行動をエンパワーメントし、その蓄積を通じて《公》を開く「支援」の実践手法である。2 章にて TED の「裸踊り」の動画について言及し、一人の取り組みがムーブメントになっていくためには、最初のフォロワーの存在が最も重要であることを示した。インタビュアーはその最初のフォロワー、もしくはフォロワーとなる人とをつなぐ役割を担う存在にもなりうる。

最後に、熊野は座右の銘として「凡人集めて非凡を成す」という言葉を掲げている（URL 21）。自身の会社を、持続可能社会の実現というミッションに共感し、同じ目標

のために取り組んでいける仲間が集う有機的な組織にしたいという意志をあらわしている言葉だが、これは会社組織に限ったものではない。地域や社会のあらゆるコミュニティで置き換えることができ、町衆の精神のようにシナジェネティックな自己組織性を促しリゾームへと導く規範ともなりうる。今後も、ZUKAN インタビューをはじめとした実践や手法の開発を通じて、「凡人集めて非凡を成すための手法」を提唱していけるよう、研究を継続していきたい。

（文字数：151,710 字）

参考文献

日本語文献（書籍）

- 飯田泰之・木下斉・川崎一泰・入山章栄・林直樹・熊谷俊人（2016）『地域再生の失敗学』光文社新書。
- 今田高俊（2005）『自己組織性と社会』東京大学出版会。
- 筧裕介（2019）『実践 地方創生×SDGｓ 持続可能な地域のつくり方 未来を育む「人と経済の生態系」のデザイン』英治出版。
- 香取一昭、 大川恒（2011）『ホールシステム・アプローチ—1000 人以上でもとことん話し合える方法』日本経済新聞出版社。
- 木下康仁（2003）『グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践—質的研究への誘い』弘文堂。
- 木下康仁（2007）『ライブ講義 M-GTA 実践的質的研究法 修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチのすべて』弘文堂。
- 木下斉（2018）『地方がヤバい…と思ったら読む 凡人のための地域再生入門』ダイヤモンド社。
- 熊野英介（2013）『思考するカンパニー』アミタホールディングス株式会社。
- 戈木クレイグヒル滋子（2016）『ワードマップ グラウンデッド・セオリー・アプローチ改訂版 理論を生みだすまで』株式会社新曜社。
- 齋藤孝（2003）『質問力—話し上手はここがちがう』筑摩書房。
- 高橋勅徳, 木村隆之, 石黒督朗（2018）『ソーシャル・イノベーションを理論化する: 切り拓かれる社会企業家の新たな実践』文眞堂。
- 高間邦男（2008）『組織を変える「仕掛け」　正解なき時代のリーダーシップとは』光文社新書。
- 田坂広志（1997）『複雑系の知—二十一世紀に求められる七つの知』講談社。
- 日本総合研究所（1998）『生命論パラダイムの時代』第三文明社。
- 林家辰三朗（1964）『町衆—京都における「市民」形成史』中公文庫。
- 三隅一人（2013）『社会関係資本　理論統合の挑戦』ミネルヴァ書房。
- 福津京子（2017）『札幌人図鑑』北海道新聞社。

・ 福原眞知子（2007）『マイクロカウンセリング技法』 風間書房。
・ 保坂享・中澤潤・大野木裕明（2000）『心理学マニュアル 面接法』北大路書房。

日本語文献（論文）

・ 赤坂真人（2007）「パーソンズ以降における社会システム理論の展開」『吉備国際大学 社会学部研究紀要』17、1-14。
・ 小川幸裕（2015）「独立型社会福祉士における活動領域とソーシャルイノベーションの可能性」『弘前学院大学社会福祉学部研究紀要』15、1-9。
・ 可知直芳・西尾直樹・手塚太郎（2010）「インタビューの場における科学技術コミュニケーション：Researcher Zukan 制作の経験から」『科学技術コミュニケーション』7、135-143。
・ 北井万裕子（2017）「パットナムのソーシャル・キャピタル概念再考:共同体の美化と国家制度の役割」『立命館経済学』65(6)、311-324。
・ 北井万裕子（2018）「イノベーション・プロセスにおける社会関係資本についての一考察:開放性と閉鎖性の概念的検討および公的制度の補完的位置付け」『立命館経済学』67（4）、476-499。
・ 北川洋一（2013）「地方の計画 京都市未来まちづくり 100 人委員会」『計画行政 / 日本計画行政学会 編』36（3）、66-69。
・ 木下康仁（2007）「修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ(M-GTA)の分析技法」『富山大学看護学会誌』 6（2)、1-10。
・ 木下康仁（2016）「M-GTA の基本特性と分析方法―質的研究の可能性を確認する―」『順天堂大学医療看護学部 医療看護研究』13（1)、1−11。
・ 国際協力事業団国際協力総合研修所（2002）「ソーシャル・キャピタルと国際協力: 持続する成果を目指して 総論編」
・ 佐藤嘉倫（2006）「自己組織性とエージェント・ベースト・モデル」『理論と方法』 21（1）、1-10。
・ 佐野淳也（2019）「島根県海士町における地域づくり主体の自己生態系化プロセス」『同志社政策科学研究』20（2）、13-30。

・ 谷本寛治（2009）「ソーシャル・ビジネスとソーシャル・イノベーション」『一橋ビジネスレビュー』56（4）、26-41。
・ 露木真也子（2011）「社会イノベーションの普及過程と社会起業家の役割」『計画行政』34（3）、45-50。
・ 寺島健一（2012）「組織における「ゆらぎ」の考察「ゆらぎを通した秩序形成」プロセスの研究に向けて」『経営学研究論集』 37、87-97。
・ 渡部奈々（2011）「パットナムのソーシャル・キャピタル論に関する批判的考察」『社学研論集 』18、 135-150。

外国語文献

・ Ackoff , R. L.（1974）*Redesigning the Future: Systems Approach to Societal Problems*, John Wiley & Sons Inc.（＝1982、若林千鶴子訳『未来の再設計―社会問題へのシステム・アプローチ』啓学出版。）
・ Bertalanffy, G.（1968）System *Theory: Foundations, Development, Applications,* New York. George Braziller.
・ Deleuze, G., and Guattari, F. (1980) *Capitalisme et Schizophrénie,* tome 2: Mille Plateaux.Editions de Minuit.（＝2010、宇野邦一、小沢秋広、田中敏彦訳 『千のプラトー資本主義と分裂症』河出文庫。）
・ Kahane, A. (2009) *Power and Love: A Theory and Practice of Social Change,* Berrett-Koehler Publishers.（＝2010、由佐美加子監訳、東出顕子訳『未来を変えるためにほんとうに必要なこと―最善の道を見出す技術』英治出版。）
・ Laloux,F. (2014) *Reinventing Organizations: A Guide to Creating Organizations Inspired by the Next Stage in Human Consciousness,* Lightning Source Inc.(=2018、嘉村賢州解説、鈴木立哉訳『ティール組織――マネジメントの常識を覆す次世代型組織の出現』英治出版。)
・ Nicholls, A. & Murdock, A.（2012）*Social Inovation: Blurring Boundaries to Reconfigure Markets,* Palgrave Macmillan.

- Maturana, H.R. and Varela, F.J. (1980) *Autopoiesis and Cognition: the Ralization of the Living,* D. Reidel: Boston; Springer,(＝1991、河本英夫訳『オートポイエーシス — 生命システムとは何か』国文社。)
- Owen, H. (1997) *Open Space Technology : A User's Guide.* Berrett-Kohler Publishers.（＝2007、株式会社ヒューマンバリュー訳『オープン・スペース・テクノロジー5 人から 1000 人が輪になって考えるファシリテーション』株式会社ヒューマンバリュー。）
- Putnam, R. D. (1993) *Making Democracy Work: Civic Traditions in Modern Italy*, Princeton University Press.（＝2001、河田潤一訳『哲学する民主主義—伝統と改革の市民構造—』NTT 出版株式会社。）
- Putnam, R. D. (2000) *Bowling Alone: The Collective and Revival of American Community,* Simon and Schuster.（＝2006、柴内康文訳『孤独なボウリング—米国コミュニティの崩壊と再生』柏書房。）
- Rogers, R, C.and Farson, E, R.(1957)*Active listening* ,Industrial Relations Center, the University of Chicago.
- Wegner, D. M., Guiliano, T., & Hertel, P. T. (1985). Cognitive interdependence in close relationships. In W. J. Ickes (Ed.), *Compatible and incompatible relationships,* Springer-Verlag.

電子ジャーナル掲載論文

- Kossoff,G. Tonkinwise,C. and Irwin,T.（2015）Transition Design: The Importance of Everyday Life and Lifestyles as a Leverage Point for Sustainability Transitions,*Carnegie Mellon Design* 1-25,(2020 年 5 月 6 日取得 https://www.academia.edu/15403946/Transition_Design_The_Importance_of_Everyday_Life_and_Lifestyles_as_a_Leverage_Point_for_Sustainability_Transitions_presented_at_the_STRN_Conference_2015_Sussex_).

・ Irwin,T.(2015)Tansition Design 2015.*Carnegie Mellon Design* 1-32,(2020 年 5 月 6 日,https://www.academia.edu/13122242/Transition_Design_Overview?fbclid=IwAR1RJllkNHMpYj4Cv56OOc4YoTKlxpviWdrsWbYvIQz6ULEk8gqxTWcpMaU).
・ Uphoff, N.(2000)Understanding social capital：learning from the analysis and experience of participation.*Cornell University Press* 3,215-249,(2020 年 5 月 6 日,https://www.ircwash.org/sites/default/files/Uphoff-2000-Understanding.pdf).

ウェブページ

1. Haken, H.(2008)　Self-organization　Scholarpedia 3(8),(2020 年 5 月 6 日,http://www.scholarpedia.org/article/Self-organization?fbclid=IwAR2bnWcTDeb9RHgd3tZUPKdshyxsXXQ5wgVZMDO_kbI3TGiOTD-NwG-hNtg).
2. TED（2020）「Derek Sivers: How to start a movement」TED Ideas worth spreading 2010 年 2 月（2020 年 5 月 5 日, https://www.ted.com/talks/derek_sivers_how_to_start_a_movement）.
3. 内閣府（2001）「平成 13 年度 中間支援組織の現状と課題に関する調査」内閣府 NPO ホームページ（2020 年 5 月 5 日, https://www.npo-homepage.go.jp/toukei/2009izen-chousa/2009izen-sonota/2001nposhien-report?fbclid=IwAR2lNIHvZ6TDv12L6ieR6dnl6tNDgtv3czghMzvDCoIt-qd3wLAKZrGx1IM）.
4. 国立研究開発法人 新エネルギー・産業技術総合開発機構（2010）「産業技術フェローシップ事業」国立研究開発法人 新エネルギー・産業技術総合開発機構ホームページ（2020 年 5 月 5 日, https://www.nedo.go.jp/activities/CA_00188.html）.
5. 一般財団法人　地域公共人材開発機構（2019）「京の公共人材 未来を担う人づくり　推進事業」一般財団法人　地域公共人材開発機構ホームページ

（2020 年 5 月 5 日，http://www.colpu.org/）.
6. *interview* , Online Etymology Dictionary（2020 年 5 月 20 日，https://www.etymonline.com/word/interview#etymonline_v_42593）
7. 株式会社聴き綴り本舗（2014）がんばってはる人図鑑(2020 年 5 月 5 日，https://zukan-tv.jimdofree.com/).
8. 独立行政法人科学技術振興機構（2013）JST さきがけ「情報環境と人」研究領域　「さきがけヒューマン図鑑」独立行政法人科学技術振興機構ホームページ（2020 年 5 月 5 日，https://www.jst.go.jp/presto/human/researcher/index.html）.
9. 北海道大学高等教育推進機構 CoSTEP（2020）「北大人図鑑」いいね！北大ホームページ（2020 年 5 月 5 日，https://costep.open-ed.hokudai.ac.jp/like_hokudai/contents/index.php?storytopic=4）.
10. 福津京子（2020）札幌人図鑑（2020 年 5 月 5 日，http://sapporojinzukan.sapolog.com/）.
11. 株式会社ジュピターテレコム（2020）地域で活躍する人たちにインタビューする対談番組 J:COM ご当地人図鑑（2020 年 5 月 5 日，https://jinzukan.myjcom.jp/）.
12. 学生団体「Adachi Students Network」（2018）足立区の”キラリ”と輝く方を学生が紹介する動画サイト 足立人図鑑（2020 年 5 月 5 日，http://adachijinzukan.blog.fc2.com/）.
13. 医療法人稲生会（2019）稲生会図鑑（2020 年 5 月 5 日，http://www.toseikai.net/school/toseikai-zukan-main/）.
14. 来 mama ルーム（2019）ママたちの居場所来 mama ルーム 北海道ママ図鑑（2020 年 5 月 5 日，https://kimamaroom.jimdofree.com/%E5%8C%97%E6%B5%B7%E9%81%93%E3%83%9E%E3%83%9E%E5%9B%B3%E9%91%91/）.
15. 株式会社ジュピターテレコム（2019）地域で活躍する人たちにインタビューする対談番組 熊谷・深谷人図鑑（2020 年 5 月 5 日，https://jinzukan.myjcom.jp/kumagaya/）.
16. 株式会社ジュピターテレコム（2020）地域で活躍する人たちにインタビュ

ーする対談番組 横浜人図鑑（2020 年 5 月 5 日，
https://jinzukan.myjcom.jp/yokohama/）．
17. 株式会社ジュピターテレコム（2020）地域で活躍する人たちにインタビューする対談番組 八王子人図鑑（2020 年 5 月 5 日，
https://jinzukan.myjcom.jp/hachioji/）．
18. 株式会社ジュピターテレコム（2020）地域で活躍する人たちにインタビューする対談番組 仙台人図鑑 （2020 年 5 月 5 日，
https://jinzukan.myjcom.jp/sendai/）．
19. 株式会社ジュピターテレコム（2020）地域で活躍する人たちにインタビューする対談番組 たまろくと人図鑑（2020 年 5 月 5 日，
https://jinzukan.myjcom.jp/tamarokuto/）．
20. 株式会社ジュピターテレコム（2020）地域で活躍する人たちにインタビューする対談番組 神戸人図鑑（2020 年 5 月 5 日，
https://jinzukan.myjcom.jp/kobe/）．
21. アミタホールディングス株式会社 代表取締役 会長兼社長 熊野英介（2020 年 5 月 20 日，https://www.amita-hd.co.jp/ir/kumano.pdf）

謝辞

本研究を遂行しまとめるにあたって、大変多くの方々のご支援とご指導を賜りました。博士論文を上梓するにあたり、この場をお借りして感謝の意を申し上げます。

まず、指導教官主査の同志社大学 今里滋先生には、修士課程の頃から公私に渡りお世話になっておりましたが、2010 年からは社会人博士としてソーシャル・イノベーションの輪に加えていただき、学びや出会いの機会を大きく広げていただきました。実践や新しい概念などはどんどん蓄積する一方、遅々として執筆が進まないまま博士課程退学および札幌への移住となりましたが、必ず博論は書きなさいと強く背中を押していただきました。また執筆が進む中では、遠隔にも関わらず相談に乗っていただき、文章や論理の問題点の指摘、体裁へのアドバイスなど細かくご指導いただき、なんとか形にすることができました。

同志社大学 佐野淳也先生には、論文の方針に悩んでいる際にアドバイスおよび叱咤激励していただき、ZUKAN インタビューをテーマにすることの意義と、ソーシャル・キャピタルへの示唆をいただきました。相談に伺った日を境に、大きな方向性についての覚悟が定まったように思います。

北海道大学 三上直之先生には、その大きな方向性について理解をしていただきつつ、広がり過ぎていた要素や論点の中から、しっかり範囲を設定し、それを明確に示すことの重要性についてアドバイスをいただきました。より具体的な指針が定まったように思います。

札幌人図鑑の福津京子さんには、今回の論文のメインの研究対象とさせていただき、ヒアリングへのご協力から、出演者、関係者をご紹介いただくなど、多岐にわたってご支援をしていただきました。あらゆる意味で福津さんの存在なしに、この論文は成しえませんでした。

ヒアリングにご協力いただいた、小川恵子さん、朴炫貞さん、竹垣吉彦さん、越後久美子さん、浅野目祥子さん、鈴木卓真さん、古賀詠風さん、山崎翔さん、大澤夏美さん、中島隆さん、小笠原隼人さんには、お忙しい中を長時間ご対応いただき、大変貴重で、気づ

きの深いお話を聞かせていただきました。おかげさまで、当初想定していたのを遥かに超える要素を見出すことができ、大変厚みのある論文となりました。

札幌に来て 2 年目、本格的に論文を執筆することを決めて最初に相談に乗っていただいた須子善彦さん、伊藤孝介さん、奥本素子さんには、さまざまな観点からフィードバックやアイデアを提供していただいたり、作業を手伝っていただいたりしました。一番迷走していた時期に親身に聞いてもらい、いろいろと振り回してしまった部分もあったかと思いますが、あの時期に足場を固められたことが、その後の推進力となりました。

最後に、家族に対して感謝を伝えたいと思います。妻・早苗には仕事と論文で全く余裕がない私の代わりに家庭を支え、子どもたちの世話をしながら、論文についても分析の整理、文章のチェック、カウンセラーとしての視点での意見など、多くのサポートをしてもらいました。あなたの存在なしには、ここまでたどり着けませんでした。また私の両親、妻のご両親にも、さまざまな形でサポートと応援をしていただきました。そして子どもたちの存在も、疲れがとれない日々の心の癒やしとなりました。家族の絆が根底にあるからこそ、このような内容の論文が書けたのではないかと思っています。

以上の皆様や、ここに記しきれない多くの方々の助言・支援・協力・励ましがあって、本論文は成立していることに、改めて深く感謝いたします。本当にありがとうございました。

2020 年 5 月 27 日

西尾直樹